

岳 山

年 八 十 第

號 二 第

山 岳

第十八年第二號

大正十三年十二月發行

目 次

北海道に於ける積雪期の登山

加納 一郎 一頁

御坂山塊

沼井鐵太郎 一七

春の焼山と火打山

冠松次郎 三八

陸奥の山水

別所梅之助 四八

圖 版

○三月の鉢盛山

對頁 八

○三峠山

一六

○三峠山より見たる釋迦ヶ岳と黒岳 二四

○三峠山より見たる節刀ヶ岳と十二ヶ岳 三二

○薬師 岳 と 眞 川 四八

○焼山との鞍部より見たる火打山 五六

雑 録

○觀望臺としての荒船山及其附近(吉岡八二郎)○丹澤山の近況と眺望(武田久吉)○黒部川瑣談(冠)○雁白山(沿井鑑太郎)○マコリー氏を悼む(木暮)

雑 報

○南アルプスに小屋建設○各地高山の初雪○千島の大噴火

○山岳圖書紹介

○高山植物の話

○會員通信

會 報

○第二十五回小集會記事○日本山岳會會員有志晚餐會○特別取扱手数料廢止○本會規則の一部削除○會務報告○會員の死亡○住所不明の會員○英國地學協會及山岳會よりの招待○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

附 録

○會員名簿(會員にのみ頒布す)

北海道に於ける積雪期の登山

加 納 一 郎

高い山へ登ることが夏期に限られてゐた頃、日本アルプス方面の山々が一通り登り盡されて、東北、北海道の山々が注目をひいた。そして北海道では特に中央高地が焦點となつて、長い間熱心な研究を續けられてゐた小泉秀雄氏などが、貴重な資料を呈供せられて、その道は漸次に開かれた。

然しその頃からスキーでの登山が行はれ出して、日本アルプスの冬期登山も、昔しの無計畫さから、追々具體化して合理的に試みられる様になり、一方クレツテライの技術も進んで、その方面に新しい興趣を開く様になつた關係からか、北海道の夏の登山は、どちらかと云へば期待せられたほど進まなかつた様である。

信賴するに足る地圖がなく、交通が開けず、多くの山は斧鉞の全く入らぬ原生林に圍まれてゐて、案内者は云ふまでもなく、多少相談相手になる人夫さへ得難いと云ふ様なことは、若いバイヲニアの心を引締めるに充分であつたかも知れないが、何と云つてもその高さは千島を除いて、最高二二九〇・三米（旭岳）。——最近陸地測量部發行の旭岳圖幅による。）にすぎず、山座の大きさも思つた程でなく、その上、無立木地を占領する根曲竹の密生と、原生林内の糠蚊ヌカガと、随分稀になつたが、それでも今尚ほ脅威を感じしめる點と、且つ登山口の住民が登山の如き閑事にかゝり合ふ餘裕のなかつたために、スポーツとしての進歩は著しく妨げられたのであつた。

更にまた大抵の山は測量家とか、林業家とか或は山師など非登山家の爲に登られてしまつてゐたのである。たゞ極く少數の人々は山岳の爲にではなくむしろ高山植物に對する深い憧憬と研究との爲に、

熱心に山へはいつて行つたのであるが、此は比較的低い高度で、此等絢爛の花を獲られると云ふ特點に基因するものではないかと思ふ。今日でも北海道山岳會などで、登山の獎勵をやつてゐるが、北海道の人々はまだ、登山の爲の登山と云ふ様なことを解する餘裕に乏しいと見なければならぬ有様で、内地からも遙々をしかける人は前云つた様な事情で割合に少いのである。

之に反してスキー登山は、日本アルプス方面でそれが行はれるよりも、遙かに前から行はれてゐたので、登山の爲の登山はむしろ此の方面から先に開けたものと見るべきである。それは一九一二年以來のスキーの發達によるものであるが、また冬期は前述べた様な色々の障害が全くなくなり、或は非常に輕減せられることも著しい影響を與へてゐる。スキーが行はれる以前に於ける非登山家の登山も四、五月の所謂堅雪カゲユキの頃を以て最も有利な時期と考へられてゐた。更にスキーそのものに就て見ても主としてアルパイン式が傳はり、今日の如くスキーの技ワザそのものゝうちに快を見出すに到らず、むしろより長い滑走を求めた事が、スキーランナーを山へ導いたのであつた。そして年と共にスキーを用ひ得る範圍以上に出で、所謂冬期登山にまで足を延す様になつた。此の間に多くの山々は登られたのであつた。夏は一度も登つたことのない山へ積雪期には數回、十數回も登つたと云ふ人さへ出来る様になつた。今日ではレルヒ少佐直傳のカテゴリーから脱してノルウェー式スキー術が普及し、スキーランナーはジャムプにまで達するものと、登山のミツテルとして考へる者と、劃然二つに分れる様になつて各その道を進んでゐる。

かゝる事實から見ると北海道の山岳は積雪期を以て登山の最好期とするものと考へらるるのであるが、さてそれでは此等諸山岳の登路は如何であるか。此は尙ほ弘く知られてゐないことであると思はるるからして、此處に今日迄私共の知り得た限りに於て、記載して見様と思ふのである。

こゝで斷つて置かなければならないことは、これまでにスキー登山と冬期登山と積雪期の登山との

三つの言葉を用ひてゐるが、此の三者は各意味が異つてゐるのである。スキー登山と云ふのは時期の如何にかゝはらず、「積雪に蓋はれたる山岳にスキーを以て登り、且つ長きスキー滑走を樂まんとするものである。而してスキーを單に登山の一用具と思意する如き登山とは自らその目的を異にし、スキー登山にあつては通常スキー以外の用具を使用せず、従つてスキーを以て到達し得る範圍に限るものである。」「スキー術梯八一頁拙稿」之に對し冬期登山とは「總て徒歩またはスキーを使用して曆の定めた冬の期間に行はれた登山」[Ski; Annuaire de A. S. C. S. 1918. Marcel Kurz. 山とスキー第十三號大島亮吉氏譯]を云ふのであつて、方法の如何を問はず、その時期を限定するものである。然し乍ら多くの高山は此の曆の所謂冬期のみならず、その前後に於て尙全山雪を以て蓋はることがあり、此の積雪期間中の登山は夏期の登山と著しく趣を異にしてゐる。此處に積雪期の登山と云ふのは、個々の山岳に就てその大部分が雪に蓋はるる時期に於ける登山を意味し、その登山の方法如何に關せず、またスキー滑走の爲の登山と否とを問はないものであつて、前二者を含む廣義のものである。廣田戸七郎氏は雪期(Schnezeit)を定義し、「スキーを穿いて完全に麓から山頂に行を續け得る間の時期を意味するものである」「山とスキー第二十八號」とし之を冬期と春期の二に分つて居られるが、私の此處に云ふ積雪期とは、スキーで達し得るか否かの如き限定を附するものではない。

羊 蹄 山 「二八九三米」

シリベシ・マツカリスプリのことで蝦夷富士と呼ばれてゐる。函館本線俱知安附近からその全容を仰ぎ得るので北海道の山のうちでは最も有名である。平原に聳立した獨立山である爲め近づき易く、夏期登山の設備も比較的整ひ、多くの登山者がある。

一九一一年三月テオドル・フォン・レルヒ氏が初めてスキーを以て登山を企てたが失敗してゐる。爾

後、一九一三年一月二月、一九一七年三月、一九一九年二月、一九二〇年一月、一九二三年一月にいはれもスキーを用ひて登山したが、そのうち一九一七年三月二五日、六合目からスタイグアイゼンに代えて頂上に達し、一九二〇年一月四日スキーを以てその頂上に達してゐる。元來此の山の積雪期に於ける登山はその時期の問題が中心であつて、今日まで一月から三月に到る間に試みられてゐるが、一月二月はまだ積雪が落ちつかず、三月以後は日射と風の爲に積雪の硬化が著しく、表面は時に氷にまで成つてゐる。最も有利なのは一月又は二月である。雪が引締つてゐるからである。而し此の間でも、登山前一週間の天候によつて雪質が著しく違ふから、よく注意してその出發の日を判定すべきである。

登路(俱知安・留壽都圖幅參照) 函館本線比羅夫驛に降りる。驛前の旅館に泊つて早朝出發するがよい。或は山麓半月湖畔の登山會事務所に泊れば更に近い。此處に泊るには俱知安町の蝦夷富士登山會に豫め依頼し置かなければならない。半月湖畔から夏道を登る。六合目までは喬木帶で風もなく、雪質も變化ない。灌木が尠く登り易い。登ると共に針葉樹は漸次減少して樺類が疎生する様になる。六合目以上は完全な裸地で、七合目までの間、左方に溪谷が迫つて可なり急な斜面である。此の斜面は先づ第一の關門と見るべく、悪いときには既に雪がスキーの綾付を拒むときがある。かゝるときにはスキーはもうあきらめなければならぬ。新雪が惠まれてゐるときは雪崩の危険がある。七合目以上になると斜面は谷と尾根との區別がなくなり、缺頂圓錐の平滑な面を登ることになる。それ故に八合、九合と進むにつれて見下す斜面は眞直に何の凸凹もなく下までつゞいてゐる。八合目から九合目の邊には矮生樺類や偃松が雪に蓋はれ饅頭形の雪塊となつてゐる。此の大小様々の突起の間を行くことになる。新雪があつても風にたゞきつけられてスキーの綾付は困難となる。平滑な大斜面に出てからの目標は九合目の平である。此處に小屋がある。小屋は秋に食糧燃料の準備をして置かないと役に立たない。小

屋から一登りで火口壁に達し得るが、三角點のある最高頂まではスキーでは困難である。スタイグアイゼンを用ふる方がよい。登行時間は五乃至六時間と見ればよい。滑降には二乃至三時間を要する。雪の状態にも依るが、裸地ではステムボーゲンの類を用ふるがよい。六合目から四合目の間にベルトと呼ばれてゐる長い伐開きがある。可なり急な斜面であるが、西側が森林である爲め、大抵の場合雪質がよく、長い直滑降が出来る。

頂上の火口壁を一周することは誰も試みたことがない。此は小屋に泊らなければ出来ない事であるが、さして興味あることではない。勿論クランボンとビッケルとが必要である。また他の方面からの登山も試みられない。夏道は眞狩別の方に新設されたが、此の方面は交通が不便で且つ登路もより急である。

一二月は日が短かくて、且つ行程が捗らないが、一月以後であれば比羅夫驛前に泊り、朝遅くも六時に出れば登山後夕方の汽車で此處を立つことが出来る。

イワヲヌブリ 「一二五四米」

ニセコアンヌブリと共に尻別川をへだて、羊蹄山に相對する火山である。一九一九年二月岩雄登鑛山事務所より火口原まで登り、二三年三月、二四年三月に登つてゐる。二四年に初めて頂上に達した。登路（岩内圖幅）山の東北に岩雄登鑛山がある。此の合宿に泊めてもらへばよい。俱知安町との間にケーブルと電話がある。俱知安より此處までは半日行程。ケーブルにつたへば道は明かである。鑛山から新山精鍊場へ通ずる道を行けば狭路の左に小イワヲヌブリの岩が来る。之を廻つて左に行くとイワヲヌブリの火口壁の一部が破れて、火口原からすぐ斜面に移つてゐる部分がすぐ見出される。此を登るのが最も樂である。簡單な登路である。此の山だけに一日を費すことはない。ニセコアンベツ

の上流を渡つて新山精錬所を経て八三九・三米に到り、一氣に青山温泉に降るのが、一日行程として面白い。火口原に登る約一〇〇米の斜面が稍急で、且つ雪が硬化し易いだけで、その他はニセコアンペツを渡る際に多少の注意を要する位である。新山より香川團體に通ずる夏道は冬は駄目である。その鞍部の南向きにはいつも大きなコルニスが出来来る。

ニセコアンヌブリ 「一三〇八・五米」

一九一九年以來、毎年一二月から三月にかけて登られてゐる。山容が清雅で峯が稍尖り、且つ滑かな半腹以下の傾斜がスキ一の滑走を愉快ならしめる。

登路（岩内圖幅）三つの根據地がある。前の岩雄登鑛山と、青山温泉と、山田温泉とである。鑛山よりするものは新山の少し上手の村界線附近に登ることになるが、可なり急で、雪は硬化し易い。青山からは「狩太村」の太の字の邊のテレースに登り此處から白樺の疎林を縫ふて登る。樹は八〇〇米位でなくなると共に傾斜は急になり、一三〇八・五米より東南に派出した峰にとりつくのである。此の峰から頂上までは脊尾根で高いコルニスが出来てゐるから、スキ一を脱いだ方がよい。一〇〇〇米附近でも時とすると雪は硬化してゐる。山田温泉からだと九七一・三米の上方に出て、青山からの道と合する様になる。此の山はイワヲヌブリの様に岩がない。その代りにスキ一の滑り方は全く自由で長い滑降をつづけることが出来る。青山からは往復七時間位。天氣がよければ一日行程として、八〇〇米邊の疎林中の雪のよい所を撰んで一、二時間享樂することも出来る。

ニセコアンヌブリとイワヲヌブリとの間の鞍部は青山温泉から倶知安に出る要路である。之をニセコアン乗越と呼び、八三九・三米の山を藻岩山と新稱する。藻岩山の麓の斜面は好個のスキ一ブラッツである。山田温泉はまだスキ一客に慣れてゐない。

チセヌブリ 「一二三四・五米」

イワヌブリの西に在る整正な缺頂圓錐型の山である。八〇〇米位までは喬木がある。

登路（岩内圖幅）青山温泉を出て小泉農場に登り、熊本團體から馬場温泉に出る。緩やかな登りである。馬場温泉は樹の間から湯煙を認められる故容易に解る。此處には大低番人は居ない。粗末な家が雪に埋れてゐる。標高の數字のある邊を上つて行くと、林地を離れて全山を望み得る平に出る。此處から缺頂圓錐の斜面にチックザックをさざむのである。雪は稍硬化するがスキーを拒む程にはならない。登りに四、五時間を要す。九〇〇米まではステムボーゲンの類、九〇〇米からは長い直滑降、下つて林内に入ればスラロームがいゝ。此の峰からは目國內岳^{メダナイ}の方へ廻れるし、南の方へ降れば新山精鍊所を経て八三九・三米を廻ることも出来る。後者は一日行程。一九二〇年一月初めてスキーで登る。一二月でも一、二、三月でもよい。四月になると雪は稍硬くなるが危険ではない。岩雄登鑛山からも登ることが出来る。

ワイスベルヒ 「一〇四五・八米」

岩雄登北方の一〇四五・八米の峯をワイスベルヒと新稱する。眞白な山膚が如何にも長い滑走を誘惑する様に小澤村の方に出てゐるからである。樺の疎林が點々するのみで長い長いクエールファールを續けることが出来る。小澤村から一日で登降するのであるが、鑛山から行つて小澤へ降るのもよい。以上述べた諸山岳は大抵青山温泉を根據地として登ることが出来る。此の附近には宮川、馬場、新見、成田、黒澤等の温泉がある。一温泉には一つの温泉宿しかない。そのうちでも青山温泉は此等の登山者を遇するに最も慣れてゐる。函館本線昆布驛で降り約二キロで達する。平地滑走で樂な道であ

るが雪の悪いときには温泉から出てゐる馬橋を利用するといふ。
此處を中心にして前記諸山の外に目國內岳から岩内岳、雷電峠の方へ出で岩内町に降ることも出来る。

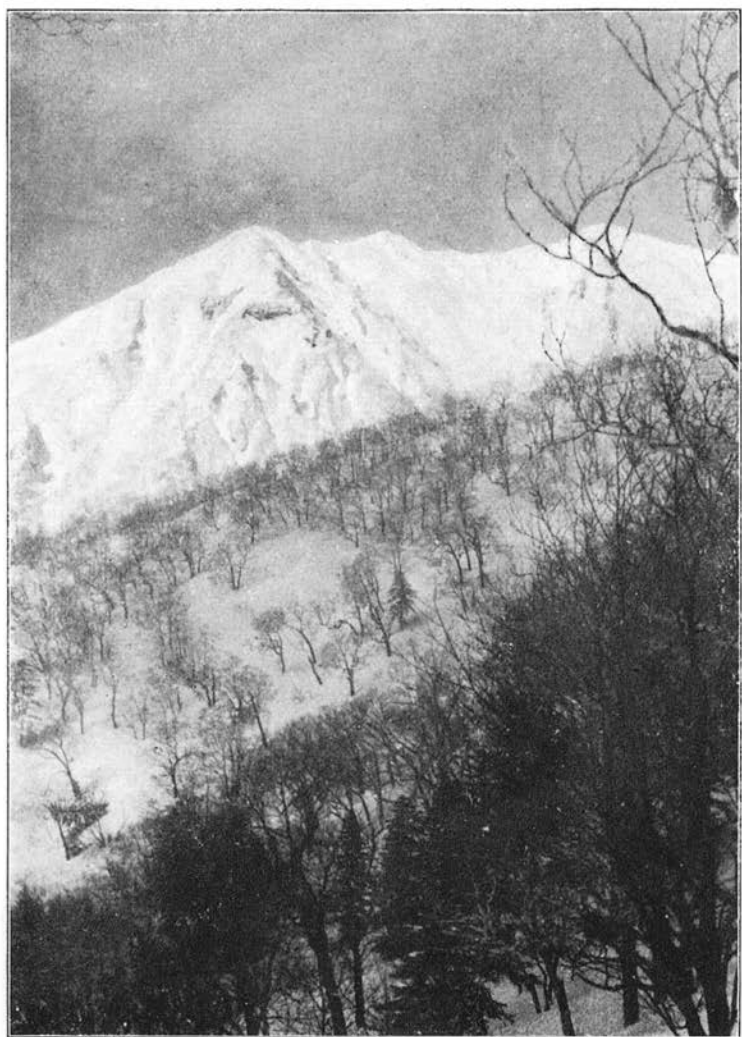
此等の地方は積雪量が豊富で雪質もよい。一二月の下旬には山は新雪で蓋はれる。最もよいのは一月から三月までであるが、四月の中旬でも尙愉快な登山を行ふことが出来る。イワヲヌブリの火口壁を登る場合のほか、ビッケルやクランポンは殆んど不用である。

昆 布 岳 「二〇四五・一米」

登路（狩太圖幅）昆布驛より國道をルベシベ二十六戸の附近に到り、その邊の農家又は小學校に泊つて、名無川と昆布川の第一支流との間の三つの尾根の中央を登る。全山針闊葉樹に蓋はれてゐる。頂上の手前に六、七〇米の下りがある。頂上より西方半キロの八六〇米位の鞍部に登り、その尾根の南側を東へ頂に達するのである。峯の北側は絶壁で、コルニスが出来てゐる。一九二一年一月にスキ登山が行はれただけである。あまり興味のある山ではない。

余 市 岳 「二四八八・一米」

登路（仁木、錢函、定山溪圖幅）小樽より小樽峠（六四八米）又は毛無山（五四八・四米）を経て盤ノ澤の部落に達し一泊しなければならぬ。一日行程である此の兩通路は、冬期間人馬の交通甚だ稀である。盤ノ澤を早朝に出發し五四一米に登り尾根傳ひに九八九・五米、一一一八米を経て國境線の盡かれた第二の峯に達する。樺類の疎林で、起伏を超えねばならぬ。こゝから頂上までは裸地で可なり急である。麓から頂上まで六時間はかかる。若し天候と時間が許すならば朝里岳に下るもよい。



影撮氏耶一納加

(部一の山連ッベユシア)山盛鉢の月三

但しその方に下るならば峰の眞近で狭い鞍部を通らねばならない。雪の硬いときには餘程の注意を要する。朝里岳からは北方に續く高原を朝里又は錢函の方に降るも可。又白井岳に渡り定山溪に出ることも出来る。此はいづれも三月以後の日長と温かさとを以てゞなければ無理である。寧ろゾンメルシノを用ひた方がよい。又盤ノ澤へ下る一一八米の少し手前から左へ阿女鯨岳の方に降るも長い滑降をする事が出来る。小樽又は札幌を中心にしてどうしても三日を要する山である。春期の登山を可とする。

札 幌 岳 「一二九三・八米」

豐平川上流には一〇〇〇米内外の山が連つてゐるが、札幌岳は中でも眺望のよい點に於てすぐれてゐる。若し快晴であるならば蝦夷富士以東檜前山まで西部北海道の顯著な山は大抵指呼することが出来る。

登路（定山溪圖幅）函館本線白石驛より定山溪鐵道に乗り、ミスマツ麓舞か瀧ノ澤で降り、盤ノ澤又は瀧ノ澤の農家に泊り、早朝に出發して三乃至四時間で頂上に達する。登路は瀧ノ澤左岸の尾根を行く、大部分樹林である。峰の東北面は急斜であるが西南面は廣闊な斜面を持つてゐる。札幌岳のみで歸るならば冷水澤を定山溪へ出てもよい。尙足をのばすならば狹薄岳「一二九六・一米」から空沼岳「一二五一米」に到り、更にまた漁岳から支笏湖畔に出るのもよいが、此は四月凍雪期でなければ無理である。此等のコースは一九二三年二月及び三四月の頃に試みられた。

キ モ ベ ツ 岳 「一二七六・九米」

定山溪の奥から倶知安平原に出る國道に中山峠「八三六米」と云ふのがあり、その峠の廣闊な頂に、驛遞所一棟ある。冬は勿論夏でも今は番人が居ない時が多いと云ふ様な寂れた驛遞で、秋色を探る閑

人と積雪期の漂泊者とを待つてゐる。

附近は針葉樹の鬱閉中庸な森林に保護せられた概して緩やかな斜面が豊富にあつて、絶好のスキージラツツである。此の峠に達するには定山溪（札幌より汽車にて一時間半）から六、七時間、俱知安方面からだと脇方驛から數キロ離れた群馬團體又は黒橋から四、五時間を要する。此の驛遞所に泊るには黒橋の驛遞所に豫め通じて置けば人夫の世話をして呉れる。

さて此處からキモベツ岳とムイネシリ岳とへ行くことが出来るのである。その登路は（定山溪圖幅参照）甚だ明了で驛遞から國境線のある尾根を傳へばよいので、多少の高低はあるが廣い尾根で且つ峰は遠くから望み得られる故容易である。驛遞を根據としてゆつくりしたターゲットストーンレンである。キモベツ岳はまた群馬團體よりも直接登ることが出来る。此のコースをとつて中山峠に下り泊するも面白い一日行程である。更に足を延してムイネシリ岳を経て定山溪に下ることも出来る。一九二〇年二月初めてスキィで登られ、爾來毎年訪ふものが絶えない。此の附近は四月に尙時とすると乾いた軟雪を持つ。

ムイネシリ岳 「一四六〇・五米」

キモベツ岳の北方に並河岳と新稱さるる一三八七・八米の峰をはさんでムイネシリ岳がある。南北に細長い峰で東面は急斜である。

登路（定山溪圖幅）中山峠を根據地とするならば、キモベツ岳、並河岳を経て國境線の尾根傳ひに往復するのも雪が良ければ困難ではない。前に記した様に群馬團體からもキモベツを経て達することが出来る。定山溪方面からは豊羽鑛山の元山に泊ることが出来れば長尾山を経て一日で往復出来るし、また薄別の農家に泊つて往復することも出来る。一九二一年一月元山から長尾山を経て初めてスキィ

で登られた。

中山峠を中心とする山々は一二月から四月の中旬まで積雪を保ち、その間いづれの時でも徹頭徹尾スキヤを用ふるだけで充分である。

アシユベツ岳 「一七二六・九米」

夕張山脈中の一峰であつて根室本線下富良野・山部間の車窓からその峯頭のみを望むことが出来る。札幌市街からも冬から春にかけて快晴の日、殊に夕方正東に紅に輝く三角錐狀の峯を望むことが出来る。

登路（山部圖幅）山部驛に降り殖民區劃地二十五線の奥の農家に宿泊するのが最も便利である。或は山部驛前の旅館に泊しても行けない事はない。一日行程で夜の汽車に乗ることが出来る。

二十五線の奥から續いて尾根にとりつき、一〇八八米で初めてポントナシベツをへだて、蘆別岳から鉢盛山へつゞく岩壁を見ることが出来る。これからは北西に向つて可なり狭い急な尾根を登るのであるが、闊葉樹も漸次減少して一三〇〇米位から裸地になる。峯の北面は非常な斷崖であるから、峯に近づくと、ポントナシベツの澤の上方を横切つて南方から峯に登るのがよい。峯はわづかに南西方が稍緩なる他、特にその北面は恐ろしい絶壁となつてゐる。登行には六時間以上を要する。一〇八八米までが近い様でなかなか苦しい。一三〇〇米以上は多くの場合硬雪で蓋はれ、峯頂附近は時として板狀硬雪を持つことがある。それ故スキヤは樺林の最後に置いて、クラムボンと代へるがよい。降りも亦狭い尾根と鬱閉の密な森林との爲に、可なりの時間を費す。四時間はかゝると見て置くべきである。若し此の峯に登ることが出来、幸に天候に恵まるるならばポントナシベツをへだて、聳立する鉢盛山までの

岩壁とその雪の粉飾を見ることが出来、更に南方に夕張岳の頭を望むことが出来る。蘆別から鉢盛への此の岩尾根の縦走はたしかに多くの興味をそそるものではあるが、極めて簡易な野營に自信を積まなければ不可能である。

アシュベツ岳は一九二〇年三月殖民區劃十九線からユウフレ澤を登り夫婦岩の北方を廻つて國境線の尾根を南に進んだのであるが、一六〇〇米附近で大きなギャップにさへぎられ、且つクランボンであつたため時間の制限を受けて引返したのであつたが、北方から見た峯は丁度燕方面から見た槍ヶ岳にも比すべき優れたスカイラインを劃するのである。ユウフレ澤の上流に面する絶壁とその積雪状況とは北海道では他にあまり見ない景觀である。野營が許されるなら此の方面から是非一度登るべきである。

一九二一年四月二十五線の奥より初めて頂上に達した。云ふまでもなく樹林帯以上はクランボンを利用した。四月の下旬にはグルンドラヴィネーの危険が著しい。

十 勝 岳 [二〇七七米]

オプタシケ連山中の顯著なる一峯として注目されるものである。山腹に硫黄鑛山あり又温泉の湧出するものあり、比較的人環に近い。むしろ將來興味あるものとしてはホロカメトックヌブリを推す。

登路(十勝岳圖幅) 富良野線上富良野からヌッカクシフラスイ川に沿ふて登る。平坦な十數キロの道である。麓から硫黄鑛山事務所迄はケーブルがある。ケーブルの下に事務所に宿泊を乞ふとも出来るが、なるべくは鑛山事務所又は瀧ノ湯と記された所に中川温泉と云ふのがあり、冬も番人を置く故、此處までを上富良野から一日行程とするがよい。鑛山事務所までは針闊葉樹混生林、それから上は白樺帯となり、一四〇〇米位からは偃松地帯となる。硬雪又は堅雪の場合にはスキは森林帯まで見

棄てなければならぬ。硫黄鑛山の記號ある所には採鑛の山小屋がある。大體夏道に沿ふて登る。尙進んで村界線の記された尾根を右山に登り頂上に達するのである。頂上はあまり廣くない。鑛山事務所から雪質にもよるが五時間位である。國境から少し十勝側に下つた十勝川水源に新しく小屋が建てられると云ふから、此の小屋を利用すれば更に一九二・二米の峯やホロカメトック岳にも行くことが出来る。

降路は登路と同じ。若し雪が新しい乾燥した軟雪であれば、採鑛所から事務所までの間の闊い斜面に自由自在な滑走をすることが出来る。採鑛所附近には硫黄が紅く噴出し、それが沈澱して乳黄色になつてゐて、雪と奇怪なコントラストをなしてゐるのを見る。事務所又は温泉まで三時間とはかゝらない。氣温が低ければ事務所から麓までの橇道はよく滑るし、平地の雪が堅雪になつてゐれば、上富良野のその日の夜の汽車に乗ることが出来る。

一九二〇年三月にはスタイグアイゼンを用ひて達し、一九二四年一月にはスキーを以てその頂上に登られた。

旭 岳 「二二九〇・三米」

所謂北海道中央高地のうちでスタクカムウシユベ山彙は北海道の最高點をなすが故に王座の如く考へられてゐたが、今日では松山温泉と層雲別温泉とが驛遞所に指定せられ、松山より旭岳へ、層雲別より黒岳への登路が新設せられ、且つ兩山の側近に小屋が建てらるるに到り、夏期に於ては松山温泉を早朝に出發すれば旭岳の頂を極めて黒岳を経て層雲別まで強行一日を以て横斷し得る有様であつて、むしろ中央高地の山岳として尙將來に俟つべきものは北見、石狩の國境並に十勝、石狩の國境に連亘する諸峯であると云ふべきである。然しながらスタクカムウシユベの積雪期の登山に就ては美瑛忠別

より旭岳に到るものと、層雲別より黒岳に登るものとに就て記し得る他は二三の豫想を附記し得るにすぎない。

登路（旭岳・志比内圖幅） 富良野線美瑛驛から邊別川を溯り志比内峠を超えて美瑛忠別まで二十五キロの大部分平地滑走の一日行程は、山へはいる重い荷を負つては可なりつらいものである。旭川より直接向つても大差はない。出来れば馬橋に乗つた方がよい。美瑛忠別が積雪期登山のステーションとなる。こゝからユコマベツに登るのである。それは此の澤に毎年多少位置を轉ずるが、伐木小屋が作られるので、此の小屋に泊つて旭岳に往復するのである。忠別から小屋までやはり一日行程と見る方がよい。登路はユコマベツの右岸、八八六米、一一九二米の尾根を行くのである。尾根と云つても全く見通しのきかぬ針葉喬木樹帯の多少上下のある緩かな登りで、進むと共にユコマベツの上流に近寄つて来る。むしろ高臺と云ふべき地形でこれが行き詰つたところは即ち温泉の湧くところで、一見判明する。地圖に温泉の記號のある邊でその反對側の約一〇〇米許りの急斜面を登ると森林帯を脱して峯を見る。此處までは林内で雪も常に良好であるが、案外時間を費す。伐木小屋の位置にも依るが大抵五六時間かゝる。森林帯を超えてからほんとうの仕事にかゝるのであるから、出来るならば前日によく方位を考慮して此處までシユプールを附けて置くと、次の日はあまり頭をつかはずに且つより早く裸地まで到達することが出来る。（雪がよければ四時間位）一月でも三月でも乃至五月でも此の山は比較的霧に包まれ易い故、裸地に出ても展望がきかず、結局初めの日か二日は温泉の上あたりまでの道つきに終ることゝなるであらう。

裸地に出ると旭岳は大きな爆烈火口を西に向けて、雪に埋められた中から煙を吐いてゐる。此の火口を目あてに稍右廻りに姿見池に達するのである。此の邊までは雪は硬化すること尠く、たとひ硬雲であつても傾斜は概して急ではない故、スキーを拒まれることは稀である。姿見池からは火口の向つ

て右の尾根を即ち夏道通り登るのであるが、此の邊は雪は飛ばされて比較的少く、斜面は硬雪と岩石混りの歩き難い状態となつてゐる。それ故或はクランボンに代へる方が得である。温泉の上の急斜面を上つて裸地に出ると北方に比布、愛別、永山の三峯の鋸齒峯が鋭角のスカイラインを畫くのが見え、また右方には白雲岳より忠別岳に續く平らな高根原が望まれる。

姿見池より頂上までスタイグアイゼンを用ひて、一時間半乃至二時間、下りは四十五分乃至一時間で充分である。姿見池でスキーを穿くならば、裸地はボーゲンで、温泉から下は殆んど樂な平地滑走で時々右山、左山に滑る。急げば三時間で登路づたひに小屋に歸ることが出来る。此日一舉に忠別まで下るのも強行ではあるが出来る。翌日小屋から美瑛驛まで行くのも強行である。

以上の登路は伐木小屋を根據とするもので、一九二二年一月之に依つて頂上を極むることが出来たのであるが、伐木小屋はその年の事業の關係で終初の期日が解らない故あまり當にならない。勿論一九二一年の三月末に行つた時は引上げた跡であつたけれども薪など豊富にあつて、充分宿泊の便を得られた。此處までは忠別から人夫をつれて行つた方がよい。然し今年（一九二四年）姿見池の西南方に北海道山岳會が登山小屋を建てたからして、此に宿泊するとすれば行程は大分變つて来る。恐らく松山温泉に泊して夏道通りを登山小屋まで一日の行程とせなければならぬ。たゞ面倒なのは忠別川右岸の急斜面を登ることであるが、夏は現に登つて居り、積雪期に於ても、その對岸は登られてゐるのであるから不可能ではなからぬ。かくすれば旭岳の登山は甚だ容易になるであらうが、アイシボツの積雪期の狀況が未知である。姿見の小屋に泊ることになれば、黒岳との間にある比布、愛別、永山の三峯や北嶺、凌雲等へも達し得るであらうし、或は黒岳を経て層雲別に下る積雪期の横斷にも成功するであらう。

旭岳登山の時期は全く確定し難い。三月末でも豊かな新雪が在り、五月の中旬でも此の地方は粉雪

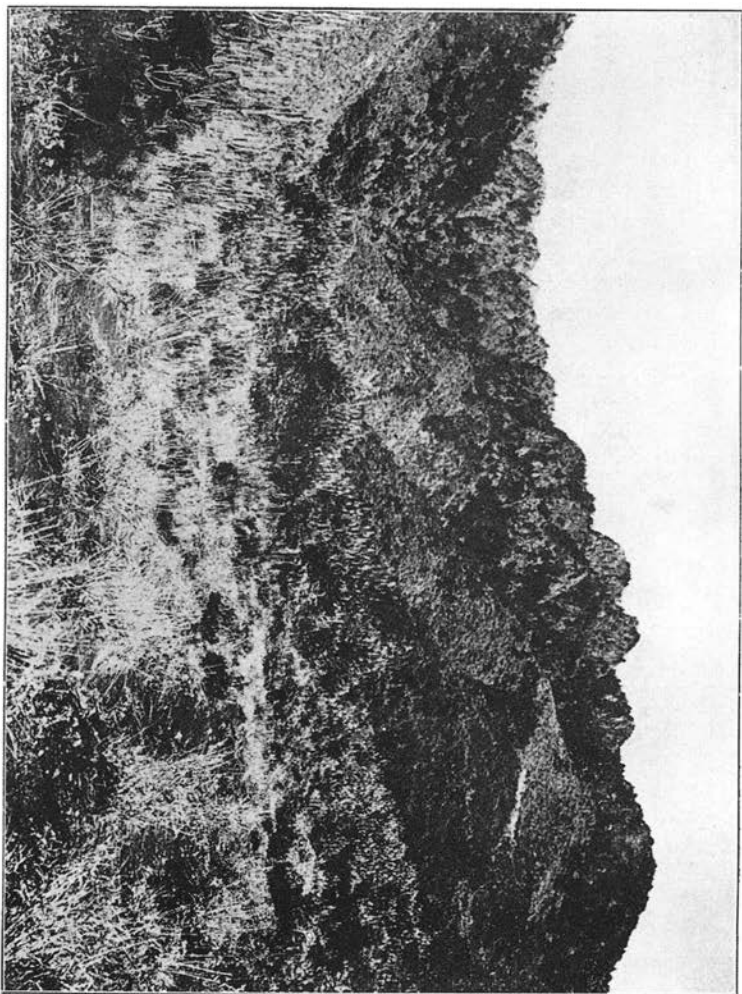
の吹雪があると云ふ有様であるから一概にその雪質を定められない。たゞ一、二月は雪質は良好であるが、日が短かいのと寒氣が強いのとで十分な活動はのぞまれない。やはり三月から五月中旬までである。此の間に於て雪崩の危険期を注意して避けなければならない。濃霧日數の比較は數字的に不明であるが冬期でも春期でも大差ないかと思はれる。

黒 岳 「一九八四・四米」

火口原をへだて、旭岳と相對する峯で、特に云ふべきものではないが層雲別方面より最も近い峯として地理的に重要なのである。

登路（スタクカムシユベ山圖幅）上川線の終點上川驛に降りて層雲別温泉まで一日行程。今道路を作つてゐるが此處は馬槌の便を得ることは尙しばらく無理である。温泉は石狩川に沿ふて溯れば左岸に在る。此處の驛遞は冬でも人が居ていつでも宿泊出来る。温泉の所へ出て来る尾根を夏道通りに真直に登れば六時間内外で黒岳の頂に達する。一六〇〇米附近まで針葉樹喬木帶でそれから少しばかり白樺の疎林となり、頂上近くの三〇〇米位は急な無立木地である故、時にはスタイグアイゼンを要するであらう。新設の登山小屋は此の冬から用ひられるのであるが、それは頂上から四、五〇〇米西方に下つた所に建てられた。黒岳はたゞ、より高い峯々へのステップストーンとして登らるる山である。一九二三年三月末に一七〇〇米以上はスタイグアイゼンを用ひて初めて登られた。

以上積雪期に於て登山を試みられた山岳に就てその登路の概要を記したのであるが、之に附加して注意すべきことは、相當蓄積のある森林で蓋はれてゐる山々は多くの場合冬期積雪を利用して伐木される爲に、か様な所では伐木小屋が建てられ數十人の伐木夫が一月から三月頃までそこで生活する



影撮氏雄藩滿川前

らして、之を利用すると、登路は甚だ縮小されるのである。登山小屋の存在の稀な深い山地では此の小屋が實に有難い。勿論食料は携帯して所謂山子と共に寝る覺悟がなければならぬ。それからか様に伐木のはいつてゐる所では馬轎道が作られてゐるからして此の轎道をスキーで登降するには特殊の工夫と熟練とを必要とするのであるが、特にその降りに當つては若し行遇ふ人馬がなければ、丁度トボガンのバーンを行く様で一種の壯快感があるものである。

「北海道の冬期登山の道」は板倉勝宣君が筆をつけたのであるが、僅かにニセコアンヌブリとチセヌブリとを記されたのみで絶えたので、此處に改めて今日迄知られた山々の事柄を書き連ねたのである。雪に恵まれた此等の山々を訪ふ人々の爲に幾分でも參考になれば幸である。

御 坂 山 塊

沼 井 鐵 太 郎

御坂山塊は地質學上有名な山で、其地理上の位置から夙に富士の擬壁と稱せられて居た。此山塊全般に關する記述若しくは個々の地點に就ての記事は決して少いとは言はれない。けれども吾々暢氣な遊山者の氣を惹く様な記録は、最近三峠山がリュックサック組の間に復活した迄は、至つて僅かであつたと稱して宜しい。私の記憶では、大日本地誌、日本山岳志、並に或意味に於て最も重要な甲斐國志がある。然し其山の現状は「山岳」の本欄乃至會員通信の一部に見出せるばかりである。なほ大正十年十二月東京日々新聞に連載された武田久吉氏の「冬の登山」及單行本で河田楨氏の「山の旅」が實際ビクニックする者にとつて最も信頼し得る記載であらう。

御坂山塊は概して言へば、森林が貧弱になつた若しくは全然消滅した爲、奥深い感を與へないが、どちらかといへば山は急峻で、往々岩壁を顯はし、尾根ははつきりして居り、展望殊に赤石白峯の大山脈に對しては絶好の位置を占めて居る。此内名山として推獎すべきは三峠山を筆頭とし、次に十二ヶ岳鬼ヶ岳等があるが、後の二つは所謂「忘れられた名山」に屬し、現今は道らしいものもないのである。

なほ注意すべき事は交通の便如何である。此は「山の旅」著者の言はるゝ様に一言にして不便と稱するのには首肯し難い、中央沿線の藪山に散策する程の人ならば、夜行で立つて、吉田から河口湖北岸迄歩き、又は石和、市川大門（甲府から乗合馬車を通ずる）から山に取り付く事は決して苦痛でない。又、私の試みた様に、笹子驛から奥野澤に入り、清八峠又は女坂又は摺張峠を越えて、黒岳、御坂峠、八丁峠續きの一地點に駆け上るも困難ではない。十二ヶ岳も遣り方で一日で済ます事も確かに出来ると思ふ。

偕て、大體甲府及谷村の五萬分一地形圖に従へば、此山塊で登る價值のあるのは三峠山は申す迄もなし、先づ黒岳より節刀十二ヶ岳の一塊に到る迄の山稜、なほ西して王岳（四本木頭）迄、及び神座山の釋迦ヶ岳、其れからは八坂峠東微北に當る釋迦ヶ岳、四尾連湖畔より蛾ヶ岳（トリス）といふ順であらう。なほ、御坂峠八丁山の間、芦川谷右岸の山脈殊に瀧戸山等の訪問は相當に收獲があるであらう。本栖湖南方の高さ大方山連山（天子山塊）は高度から言へば最も優秀であるが、私の未知境であると共に、狭義の御坂山塊とは別にしてこゝに述べない方がいゝと思ふ。又、私は本誌其他に詳細な記録のあつた處は重複を避けて成るべく觸れないで置く。勿論私の未訪地も少くない。要するに此一篇は只、拾遺的な記事に過ぎないのである。

先づ東端の三峠山塊に就て、大體要點を記し、次で記録洩れのノートを集めて見る。此山塊の最高點三峠山は海拔一七八五米で、黒岳に次で御坂山塊中第二の高點である。特徴としては東面概して急峻、殊に最高壇直下に屏風岩の美事な岩壁を峙て、其他にも諸所に相當壯大な峭壁を露出してゐるが、西面は概ね茅戸で、山腹の傾斜も強くない。此が名山としての價值は山岳第十五年第二號又木氏の「三峠山」及び前記「冬の登山」及び「山の旅」中の記述に見られたい。尙、山岳第十六年第一號會員通信欄中にある武田久吉氏の分は重要な參考資料である。又、日本山岳會小集會第十七回の席上に於て武田氏は三峠山開山の由來を話されたが、未だ印刷された文字に表れないのが遺憾である。此山の登山道は富士軌道の小沼驛で下車、下幕地から大山祇神社を經、釋迦流し川に添ふて達摩石の尾根に取付くのが本道で、最近保勝會の手で道案内も建て、あるし、最も容易なそして興味深いものである。登行には、名勝見物、展望、撮影、休息等の時間を加へて先づ四時間と見るのが至當であらう。けれど、途中で道草を食へば、嘗て私どもが試みた様に、途中の岩屋や澤に深く入つたりして居ると、五時間位は譯なく經つてしまふ。本道を登つたら下山はフトヲを經て上幕地か吉田方面へ下つて行く方がよいだらう。若し之を逆に行くと、主峰の岩壁を目指し乍ら眺望を貪る快はあるが、稍遠い底の感がある。此尾根に取付くに西面からは、河口村から草刈の上る道と船津村淺川からの道がある。淺川からの道は初めは桑畑の間を通る細徑で、少し許り林がかつた山腹にかゝると、薪炭類を運搬する爲か、多少道らしく電光形に上つて、やがて南を指す様になると、尾根は間近だ。淺川から三四十分を要する。(附記、船津で一泊するなら河口湖畔八王寺神社の傍なる中屋こと渡邊彌會右衛門方が好い。)

河口村からの道は會員別宮氏の話によると、河口村の淺間神社の裏から入るもので、山腹をうねる草刈道に合してから上は道らしい道も無いらしい。下は可成り森林の情趣に涵(ひた)る事が出来る。

それから東側で達磨石の少し上流から直接登る道がある。此は現今殆ど廢道に歸したと云つてもいい位荒れて居るもので、大正十年の春私が下つた時は、先づ最高點から北に二つ目の隆起の附近で稍まごつき、下り出すと踏めた所を直きに見失つたので、只其らしく思はれる所を針葉樹や岩石の間を縫ひつゝ急轉直下して行くと、遙か下方でやつと道らしくなつたが、藪が相當に繁茂して居て、同行の初心者には大分つらい様であつた。下つた所は達磨石から右の支流數町の上流で、それから本道に合する迄道の作りも悪かつた。登山本道との分岐點迄頂上から下山凡一時間半を費した。けれども此方面は森林が思ふ存分はびこり、論所山の方へ續く側尾根の木立の色を眺める事が出来て、只「奥深い」氣のする所だ。水を得られない點から云つても、下るとも上る道で無いかも知れぬ。

三峠山から八丁峠へかけて縦走し、笹子河口間古來の間道と稱する清八峠を下つて奥野澤に入り笹子驛に出るコースは思つたよりは便利である。(河田氏著「山の旅」參照)本道の三石壁に眼をそばだて、或は其一つ二つに岩登りを試みてから、頂上の大觀に酔つた人には、此尾根の藪は所謂試鍊(training)には逃へ向きである。巢鷹山の下りかけが一寸面倒な丈で、後は藪も繼續的であるし、加之、八丁峠近くなつて最低鞍部の邊から左に稍下ると(此は道がある)、澤の清水が乾からびかけた咽を待つて居る。八丁峠に向ふのに此道を下りてカネガクボの炭焼小屋から、よく踏めた清八峠の河口側を登つて行く事も出来る。そして八丁峠と清八峠とが交叉して居るあたり、本社ヶ丸尾根一帶の寂しい山の氣分は、茅戸と岩壁の三峠山には見られぬ風雅な趣に富んで居るのである。

清八峠の由來は巢鷹山の北方鞍部(アマタテバ)に出た時、居合せた菌取りから聞いた。其は「山の旅」著者の話と大同小異であつた。其前、即ち大正十年十月の初めに私は會員岩永氏と二人で、十二ヶ岳に登るつもりで船津に一泊した處、連日の雨はなほ霽れないので中止し、土砂降りの中を、多分笹子へ越す樵夫の路位あるだらうと見當を付けて、八丁峠へ向つたのであつた。河口の淺間神社に參

詣してから、御坂峠道を進んで、^モ庖橋の少し先の水車小屋から右へ支流の澤を入った。それから八丁峠迄の道は當時は炭焼小屋もなく、人一人も通らない。澤は初めは深く削つて居たが、やがて細くなつて、其上を右へ左へ幾度か跳んで渡つた。谷の方向が南北を指す様になると、何だか立場が廣がつて、傾斜も有るか無しかである。二萬分一地形圖御坂峠圖幅に表された藤野木^{トウキ}寄りの峠路は今はすたれて、私達が殆ど苦勞しずに着いたのは大幡寄り八丁峠の頂であつた。其處に管子間道の立札がしてあつたので、雀躍しながら山腹を上り、崩れの上を這ひづつたりして、清八峠尾根の上に出た。河口から凡三時間を費した。それから奥野澤迄の下りは、山腹を西に廻つて森林を抜けると、北口に向つて一直線に落す。雨に濡れて土は滑る、頼りにする草は多くは刺と針を持つてゐる。其惡場^{わるば}は間も無く盡きて、稍長い尾根の林の中を小徑は下つて行く。頂から一時間程して谷間に入り、主に右岸に添ふてだら／＼下ると、やがて奥野澤が北に曲る。數町進むと森の中に新しい奥野稻荷の宮がある。それから三四軒の人家の側を通つて、里人から始めて峠と澤の名を聞いたりした。管子川に架した丸木橋を渡り街道に出て數町下ると管子の驛だ。葡萄を買つて汽車の中で食べる。雨の清八峠はかうして私達に忘れられない旅の一つであつた。

この清八峠は二度目に三峠山の方から尾根傳ひして行つた時には、もう餘程手が入れられて、樂になつて居た。今、峠の兩側を比較して見ると、奥野澤は名稱が暗示する程深い趣がある谷ではない。甲府行の電柱は以前からこの澤を登つて藤野木に越えて居たし、又現今では薪炭業が盛になつた爲、大分明るもなつた様だ。之に反して河口方面（澤の名は未だ聞く機會が無い）はカネガクボに小部落が開けたが、未だ幾分「さびしみ」が勝つた様である。

清八峠と出發點を同じうして我々夜行遊山者に見逃す事の出来ない女坂^{オンナザカ}の事を茲に記さねばならない。この峠は二萬分一御坂圖幅で位置を示すと、一四六〇米峯と一四四七米峯との間の低所（約一三

七〇米）を通過するものであつて、奥野澤の上、清八峠の急な登りの口から數町下に分れ道がある。即ち笹子から來て右へ山腹を斜に登つて行くもので、笹子から分岐點迄凡一時間、それから尾根の上迄凡四十分かゝる。頂上は木立ではあるが、北から東にかけて開いてゐるので、大菩薩連嶺を稍々斜に見て、其右に武相境の大波小波を指す事が出来る。西側はこんもりと枝の擴がつた大樹と近い山が邪魔するので、眺望は無い。秋の半ば、落葉を踏んで感じのいゝ澤の源頭を一散に下つて行くと、炭焼小屋が點々としてあつた。それからはもう深い趣は無い。時折雪の輝く甲斐駒山脈を眺めつゝ、割合に平凡に下つて行くと、赤く染まつた黒岳の麓に藤野木の部落が立列んで、白壁が鮮やかに映る。峠の頂から藤野木迄四五十分で行ける。例の夜行で東京を立つて暗い内から歩き出すと、晚くも午前七時前には此處に來て朝食を濟ます事が出来る。然し藤野木は小平氏の通られた當時（日本山岳志御坂峠の項參照）からはずつとさびれた。現在は宿屋は愚か茶店すら無い。それに最近御坂峠の上り口で物騒な人殺しがあつたとやらで、峠越えは益々稀になつたと云ふ。前に書くのを忘れたが女坂といふのは藤野木の稱呼で、其峠に入る澤をカルオキ澤といふ。村の人は鐵道へ出るには皆之を越えるのださうだ。かうして朝早い内に藤野木へ來てしまへば、御坂峠へ登つて黒岳へ向ふなり、八丁山の尾根を傳ふなり、又は八丁峠を上るなりする事は容易である。

女坂の北にも一つ、摺張峠といふのがある。此は笹子峠の途中から分れて來るもので、藤野木の下、新田附近に出る事になる。私は未だ通つて見た事はないが、若し黒岳へ新田から登る事が出来るとすれば、此峠を経由するのが捷徑であらうと思ふ。

三峠山塊即ち御坂峠以東の山々に關しての覺書は以上で打切りとし、次に御坂峠に就て一言し、漸次黒岳から以西へ進む事とする。

藤野木から登つて行く御坂峠道は道の作りが一寸珍らしい。即ち村から數町進んで橋を一つ渡る

と、そろ／＼石疊の様になつた所を歩む。確かに人工を加へたものらしく、御坂層の名を得た古生代岩石を二間幅に敷きつめた形式は、一寸他所では見られない。然し此は峠の全部がさうであるといふのではない。そして比較的幽邃な澤の右岸をゆるく大廻りに段々に上つて、一時間二十分の後には頂と同高度の一角に達する。奥秩父、八ヶ岳、駒の連脈等を眺める。眞の頂上では地形上の關係で北の眺望は得られない。頂上（一五二五米）に行けば三國一の富士は河口湖を裾模様にして氣高く聳える。御坂峠の富士、それは人口に喰ひつたものだつた。峠の頂には今は甘酒を賣る茶店も無い。只、昔時の儼を、廣くならした平地と西側の笹の内に天神の石像とに見るのみである。峠から河口迄の大部分は私は知らない。古い峠の一つである御坂に關する古記録や、口碑傳説等を集めたいものである。最後に此峠の頂上附近で僅か乍ら清水を求める事が出来るのを非常な特點に數へて置かう。

御坂峠から黒岳へ登るのは、黒岳登攀の四つの方面中最も簡單であり、且、一般に推奨すべきものであらう。先づ峠の頂から西へ向つて短かい笹藪をがさ／＼やつて行くと、一つの瘤を越えて愈々黒岳東尾根の登りとなる。概して灌木の藪が多小からまつた、岩の露出も相當にある細い尾根で、或る所では鼻先につかへる様な岩尾根もあつた。尾根の左の峭壁は三峠山から見えるガレである。切開は強いて求めずとも、一體に筋張つたこの山では必ず尾根の線を歩かざるを得ない。針葉樹木となると大分歩き易くなる。かうして御坂峠から凡一時間で、海拔一七九二米の黒岳の頂に達する事が出来る。此尾根は會員大塚氏の經驗によれば下りに凡三十五分を要する過ぎない。

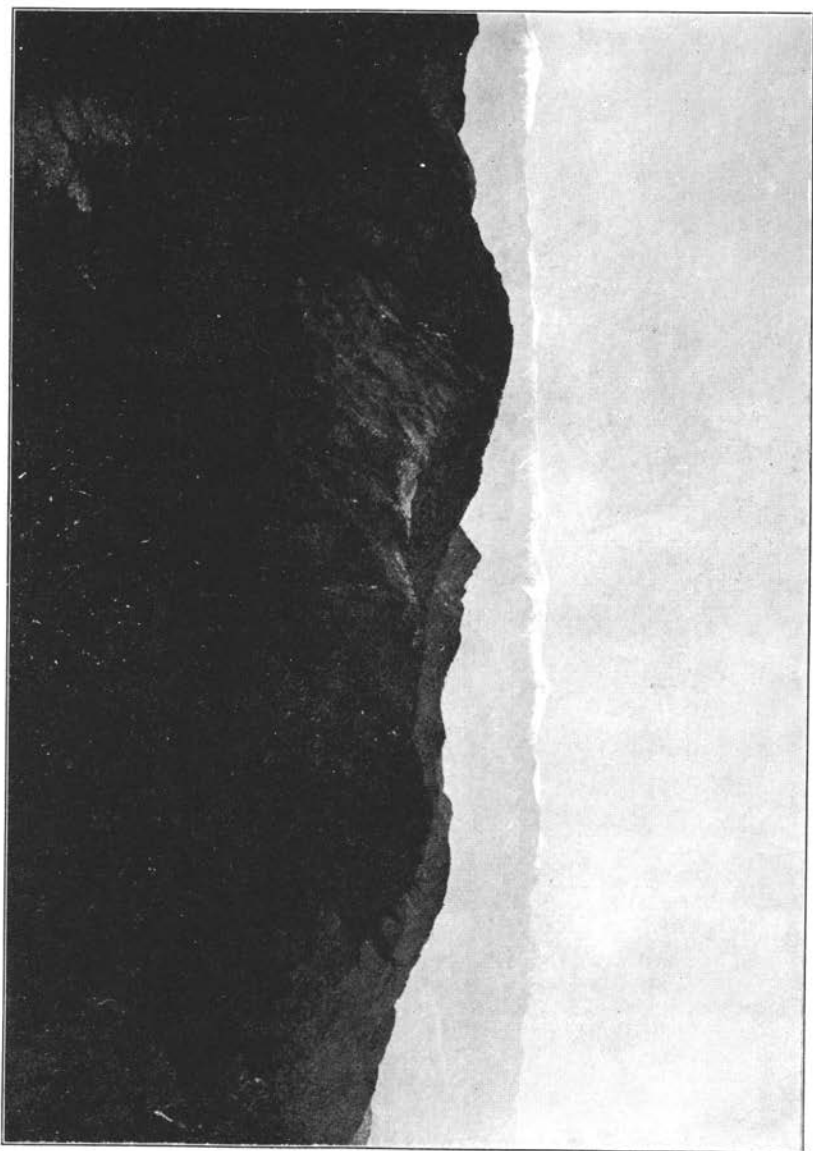
黒岳の頂は針葉樹林に包まれてゐる。四つの尾根は頂近くなると充分にたるんで全體に圓味を帯び、其の爲に一等三角點があり乍ら眺望は皆無である。然し少し許り尾根を下ると多くは木の無い開地があつて、相當に展望を貪る事が出来る。此内最もすぐれたのは西尾根と南尾根である。

黒岳の西尾根は下りかける所が一寸廣く見通しも無いので困るが、少し下れば林は切れて、直き

に切開を発見する事が出来る。と同時に尾根は細まつて露岩が多くなる。切開は主に尾根の南側に付いて居て藪もさうひどくはないが、其は四月上旬の事で、十月に行つた時には例の茨軍が時々引掻いて弱つた。尾根の北面は一帶に林が多く稍々見晴らしを妨げるが、其合間から八ヶ岳、奥秩父を見たりする。南側は開けて川口湖も殆ど全部現れる。其内に三峠山の高い長い草山姿や、山中湖の鏡などが見えた。鞍部迄頂から四月上旬では十五分乃至二十分、十月では四十分かかる。そして傾斜は東尾根に比すれば稍緩慢であり、又木立の数は東尾根の方がずつと多い。鞍部から先は「ミツケ」此は大石村中澤の農夫が教へて呉れたものであるが、武田氏の記事によると「三ヶ尻」である。因に其西の一六〇〇米程度の山は私の聞いたのは三ヶ尻であるが、武田氏によると節三郎である。眞偽は未だ詳かにしないが、兎に角此等の名稱は共に甲斐國志に載せられてあるものだ。といふ山に高まるが、記事を更に以西に進む前に、黒岳の南北二尾根に就て記す必要がある。

黒岳の北尾根は嘗て神座山（ジザサン）の釋迦ヶ岳から縦走して其鞍部迄來て見たが、餘りにひどく坊主になつてゐたのと、時間の都合なども惡かつたのとで、登る事を止めてしまつた。然し其後行かれた大塚氏によると、登攀は急ではあるが平凡に四十五分で終つたさうである。

最後に黒岳の南尾根は取付くのに一寸不便であるが、行つて見ると中々面白い所でもあつた。大正九年四月、船津から河口湖を船で渡り（船津から船が出て暫くしてから白峯が見えるのは注意すべき事だ。）大石村に上陸してから中内の方へ歩いて行き、小さい澤を渡つた所（字中澤）で路傍の農夫に道を訪ね、其教に従つてナガード澤の澤添ひに小徑を上る。杉葉を背負つた村人に折々出遇つたりして半時間の後最後の杉林に來た。途中の道は相當に峻しく澤の水も勢がいく。それから暫く進んで澤を渡る所で一休み、もう海拔千二百米位の所で、富士の晴れ姿、河口湖兩端の一部、それから大室山のドームがとり分け美しかった。此方面の黒岳は所謂「岩屋」で、露岩が所々にあり、少しばかりの黒木が



影堀氏雄壽満川前

山連スアルヲ南は景遠 (左)岳黒と(右)岳迦釋るた見りよ山峠三

生えてゐる。其處を出て二三町すると道が二つに分れ、左の方はくるくると急にかくれてしまふが、道の作りはいゝ。其を行けば黒岳の西方の肩に取付ける筈である。が、私は右に分れ入り、やがて三十度前後の急坂の一筋道を喘いで上つた。聊か西穂高式の十二ヶ岳連嶺が黒木立に身を固めてゐるのを振りかへり眺め乍ら、一氣に尾根迄行つた。其處は木も少くて岩だらけの所である。一息入れた後直ちに尾根の上を頂に向つて、目前の一隆起を越えようと、黒岳は尙も行手に高く盛り上つてゐる。尾根の通過は先づ容易な方で、東側にのびやかな三峠山背を見、西側は御坂山塊中央の覇者たる十二ヶ岳、節刀ヶ岳の一群から遠くは薄曇りの南アルプスが見える。可成空元たる尾根で、黒岳の四方の山稜中峻嶮の度は東尾根に劣るが、尾根其者の感じは此南尾根が最も優秀である様に思つた。登攀の時間は大石村から頂上迄凡二時間半を費した。

こゝで再び筆を西尾根の御坂山塊の本脈に向くべきであるが、便宜上釋迦ヶ岳支脈（芦川谷右岸の山脈）を先に記す事とする。此脈は神座山の釋迦ヶ岳（一六四〇米余）を除いては目覺しいものもなく、黒岳との間を縦走する事も大して興味がなないと「山の旅」著者は明言してゐるが、誠に然りである。然し秋は釋迦ヶ岳以西に於て發達してゐる少からぬ峠道及び其間に存する低い草山も此支脈の北面の開けた位置から見て、主脈に劣らぬ立派な展望臺である事を注意したい。就中瀧戸山（一二二一米）及び其南西の一峯（一二四五米）は其附近通過の際には時間を割愛しても惜しくないだらう事は、鶯宿村（アヲシユヅカ）の人が「中々景色がいゝ」と私に聞かした事によつて裏書される。只、私は釋迦ヶ岳の他は僅かに夕暮のあはたしい時、鳥坂峠（トツサカ）を越えた丈なので確言する事が出来ないのみである。

釋迦ヶ岳は日本山岳志に引用してある山梨鑑によると、之は嵯峨ヶ嶽と云つたものだ。今日では神座山（此は槍峯神社（ヒミナネ）一帯に渡る山地を通稱するらしい。）方面即ち黒駒村方面ではシヤカヶ岳で通じ、芦川谷では一名「タイコンドー」と俗稱する。なほ大塚氏は黒岳北麓の炭焼の男から「サクセン」岳

と云ふ名稱を聞かされたさうだ。この山の事は山岳十五年三號會員通信の欄に相當詳細に記録して置いたから、茲には其補遺として多少の事を附記するにとどめる。

此山は私の通信にも河田氏の「山の旅」此小冊子は御坂山塊に關しては他の山々程親切に書かれてゐない。にも書かれた通り、山其物の面白さ、山頂の好望の二點から、一度は訪問してもいい山である。其に山の表と云つてもいい、黒駒村方面の山腹には幽邃な檜峯神社がある。又、一晚位野營するとして、之から黒岳を経て、三峠山の方へ行つたり、節刀、十二ヶ岳の方へ向つたりするのも悪くはない。順路としては石和驛から舊鎌倉往還を進んで黒駒村上黒駒から入り、黒駒川の支流のシンボチ澤を登るのであるが、若しこの澤を東に取り過ぎて釋迦ヶ岳頂上の東方に出ると、尾根迄の行路の比較は分らないが、本尾根は西方の岩尾根の感じが遙かに優れて居る爲之を見ないのは先づ損である。又、頂上から黒岳に向ふ尾根は比較的つまらないが、若し途中便宜の箇所から芦川谷に一旦下りてしまつて、水源の道を上りつめ、其處から黒岳に上れば多少變つた旅を味はふ事が出来やう。芦川に下るのは大抵無難であると思ふ。

なほ會員大塚氏の便りによると、飯田町發午後十一時の汽車で立つて、石和から釋迦ヶ岳の東方鞍部を経、頂下に十一時四十分に着いて居る。其から黒岳北麓の乗越迄、氏は一時間半で達して居る。

なほ、此は私の未踏地ではあるが、黒駒の上なる新田シンデンから南に、崖溝の記號ある澤（水の有無は知らない）を溯つて黒岳、釋迦ヶ岳を連ねる尾根に出る事も出来さうだ（前出）。此は通信に記した様に、新田芦川村間の間道であるかも知れない。けれど現在では新田側は少くとも乗越の附近は荒れてゐる様だ。之に反し芦川の方は炭焼も入る事であるし、傾斜も鈍いし、充分に踏めてゐる。

凡て釋迦ヶ岳の山脈は飛驒山脈に於ける常念山脈の如き位置を以て、一方は直接甲府盆地に面して居る所から、地學的に山の深みは全く無いと言つても宜しい。然し、人事に最も交渉のあるのは全山

塊中此一脈であり、従つて山麓には數多くの里落を有して、手當り次第に泊れるし（但宿舍は多く粗末である）、馬車を利用すれば山迄の距離を短縮する事も出来る。又、此山脈の北側には多數の寺院を有する事と、尾根西半を過ぎる重要な街道に添ふ左右口村の山地は嘗て山窩人種の棲家であつた事を、私は思出す。

偕て本脈に歸つて、黒岳西隣の一山は「ミツケ」（武田氏の三ヶ尻）なる事は前記の如し。此は鞍部から十五分許（早春）で頂上に達する。海拔一六六五米。特徴はたるんだ稍東西に平たい頭で、南面にかけて一面の短い笹原であるが、其を少し南下すると崖の縁になる。北面はひねくれた闊葉樹の林で、針葉樹も幾分混生してゐる。芦川谷は其爲によく見えないが、釋迦ヶ岳は屏風岩を前に怪偉な姿を現はす。其右上に八ヶ岳が見え、更に此山脈の先は次の三ヶ尻（武田氏の節三郎）及節刀ヶ岳十二ヶ岳鬼ヶ岳等の峻峯が聳えて居る。此山からミツケ峠（大石峠新道）迄は主に短い笹原で歩行も容易である。然も眺望、就中南アルプスの其れは、黒岳以西、節刀ヶ岳以東中最も秀でて居る。先の鞍部から此峠迄、秋で凡四十五分かゝる。ミツケ峠（一五七四米）は大石峠新道であつて、二萬分一地形圖御坂峠圖幅には大石峠と記名してある。新道とは言へ、目下は芦川谷の山民も殆ど通る者は無く、依然として西方舊道の大石峠が繁盛して居る。大正十一年十月末私が之から芦川谷に向つて下りた時には、下るにれて草藪や木の枝が道の左右から押し寄せて随分うるさい事であつた。芦川の流迄凡三十分を要した。其旅で笹子から連れになつた法政大學の學生二人は私達と分れて大石村の方へ下つて行つたが後の便りによると、頂上から半分位は電光形で、其以下は一本の下り道である、道幅は二尺位、中腹以下は草をよく刈つてあつたといふ。兎に角迷ふ所もなく、五十五分位で河口湖畔に着いたさうである。

ミツケ峠から以西の尾根は少し藪が密になつて、稍奮闘を要する。凡二十分で三ヶ尻（武田氏の節三

郎)三等三角點(一六六五米)着。河口湖畔の全景、山中湖、吉田町、御正體山、鹿留山等がよく見えた。此山頂は東西に細長く南面は半ば裸かで巖が多い。北面は前の峯よりも貧弱な林、殆ど闊葉樹のみであるが、其も素直に成長して居る。其先に同高度の一峯があつて南側は絶壁である。其から稍ひどい藪をくぐり抜けて先の三角點から凡三十分位で一鞍部着、此邊は總じて南面が峭壁であるが、此次にある岩峯に至つて特に其特色を發揮し、北側からもせり上つた岩壁の爲に尾根は薄つぺらになつて、豫想外の惡場になつてしまふ。此は屏風ヶ岩といふものである事を武田氏及河田氏の記文は教へる。よし小規模にしる、兎に角低山では傑作の岩尾根である。私は北側の岩の割れ目を傳つて之を越え、なほ一峯(前記兩氏によれば不逢山といふ一山が此附近に當る事になる、甲斐國志にも其名がある)を過ぎると切開もらくになつて、先の鞍部から凡二十分で大石峠舊道に合した。(附記、ミツヶ峠以西の時間は總て四月上旬の記録である。)

大石峠(凡一五二〇米)の頂には一本の裏白樺が立つて、其あたりから展望は可成りに好い。河口湖は東の方がよく見え、西の方は一部分隠れてゐる。其向ふに富士は美しい裾を擴げて見せる。十二ヶ岳の大淵谷に面した側には、四月の旅では、雪溪がかゝつて居て、頂の黒木を考へないと先づ春の西穂高の様であつた。芦川の谷を隔てた神座山の釋迦ヶ岳は其連脈中嶄然として頭角を抜き、南面の屏風岩は中々美事である。遠い山では白峯三山、東駒の連脈、八ヶ岳、奥秩父、大菩薩及び遙かに飛驒山脈の尖波を眺める事が出来る。斯くの如くして大石峠は展望上御坂峠以上に重要な、すぐれた感じの休場である。只、御坂峠の様に附近に水が無いので、キャンプを張る譯に行かないのが玉に疵であらう。此峠によつて御坂山塊中最も險怪を極める節刀ヶ岳、十二ヶ岳の一群を黒岳の一群より區別しても宜しい。

私は此峠を河口湖の方へ二度下り、芦川谷の方から一度上つた。峠から南する道は石ころ道で可成

に足が響ける。電光形に幾つか曲つて、凡三百米許下りた所に、僅か乍ら清水の湧く所がある。其から少しすると長い山抜けの跡などがあつて、やがて緩傾斜になると直きに大淵谷道の分岐點に達する。此迄三四十分と見ていゝ。其處から大石村迄は半里の餘に過ぎない。大石村にはろくな宿屋は無いさうで、どうしても船津迄行きたい。然し河口湖の渡船は夜間並に風のある時は賃増を要求せられるから注意すべきである。秋の半ば、灯ともし頃に冷雨をあびて湖を渡つた私達は文字通りに震へて、水の乏しい船津の宿で湯に入れた事が何より嬉しかった。船津大石間湖上渡船は四十分乃至一時間を要する。

大淵谷の道は私は知らないが、其を一町許進むと南東に向つて淵坂峠の道が分れる。峠の上（凡一〇八〇米）迄十五分で行く。そして振り返ると、大石峠から黒岳迄が立て列び、殊に屏風ヶ岩の *Pinna* 〇〇 は際立つて眼を引く。峠には字大法螺山恩賜縣有財産借地面積五七町七畝歩と書いた木標があつた。

芦川谷からの大石峠道は上芦川村の村外れから南に澤の左側を上つて行く。通過した時は秋雨が煙つて周圍の様子はよく分らなかつたが、河口湖の側に比べると森林が豊富で幽邃であつた。途中に休場にいゝ小屋などがあつた。峠上迄凡一時間半かゝつた様に記憶する。（ノートを紛失したので詳しい事は書けない。）

再び尾根に戻る。大石峠節刀ヶ岳の間は黒岳大石峠の間に比べると興味を缺く所で、加之、藪は相當猛烈である。眺望も地形上から見ても一段と落ちるわけで、實際又殆ど無いと云つてもいゝ。先づ峠から西すると一五二六米の一峯を越える。此邊迄は茅戸で見晴らしもよく、たしか次の峯との鞍部にはか細い踏跡が乗越してゐた。それから一五七〇米、一六一〇米の圈を有する二三の隆起を越えて、節力ヶ岳北東の尾根となる。其が百三十米餘の上りだ。私が節刀から大石峠の方へ行つた時（十

一月初)には、面白くない通過だったのでノートにも餘白を存してゐるが、恐らく節刀からの下りと次の一峯とが一番わづらはしかつた。其内のどこかで未だ霜枯れきらぬ丈高い雪の一群が私達を可成り悩ました事を記憶してゐる。節刀から大石峠迄一時間五分を計上した。

節刀ヶ岳は一名雪塔ヶ岳(武田氏によると又、石塔とも書く)と稱し、鬼ヶ岳一名西節刀と云ふに對し、北節刀又は東節刀とも言はれる。(東節刀とは中芦川村から連れた人夫の言によるものであるが東と言へば寧ろ十二ヶ岳に當る。よつて北節刀と稱する方が適當であらう。)そして此二つの節刀を連絡し同時に十二ヶ岳支脈の分岐點となる箇所は中節刀と稱する。此一群と其れから西にかけて王岳に到る間の山容は、御坂山塊中最も崔嵬たるもので、殊に西ノ湖に面する側は宛然城壁の如しである。この山貌からして夙に一部の人の間には信仰上の名山となつたのであらうが、現今では十二ヶ岳絶頂に一の權現祠が名残を止める許りである。私は會員岩永氏の令兄良三氏と二八で大正十年十月卅一日、中芦川から水澤山尾根を上つて西節刀に達し、中節刀から十二ヶ岳に往復して北節刀に到り、其から前記の如く大石峠へ向つた。この一日だけでは未だ説明するには物足りないが、次に例によつて尾根を辿りつゝ情景を思出して見やう。

先づ北節刀の三角點(一七三六米)であるが、此は地形圖で見ると御坂山塊主脈の東部と接してゐる所にある様だが、實はほんの少しばかり北によつて居る。櫓はとうになくなつて周圍は草茫々としてゐる。豫想外に狭い頂で、附近には針葉の太木が生えてゐるが、眺望は南方富士、大室山、それから近くの鬼ヶ岳に中絶されて大方山連山、南アルプスの殆ど全部、北アルプス、八ヶ岳、秩父連山、大菩薩連峯(此は樹間より)、次に黒岳方面を眺められて中々好い。北徼西の一五四八米峯をつなぐ尾根を二三分下りると一寸した平があつて、其處で私達は休んだ。連れて來た道案内の人夫は此尾根を下つて中芦川に歸ると云つた。大塚氏によると其後此下り道はよくなつたらしい。總じて節刀ヶ岳群

峯は黒木の林が豊富であるが、此方面並に芦川谷新井原の對岸の澤筋一帯（澤妻と稱す）は殊に立派だ。そうして森林の内には多少の動物もゐる様である。さて此頂へ登る道は北微西、北東及び南の三尾根の不完全な切開によるのであるが、最も容易なのは中節刀からする南尾根である。又、大淵谷から北節刀に近く上りつめる事が出来る。（私の知合の帝大學生仙波正雄氏が雨の日其處から下りた事を語つた）。入澤（水澤）小尾根と北節刀との間を北流して中芦川村の數町下で芦川に注ぐ支流）から直接上る事は、小徑が澤の可成奥迄入つては居るが、疑問だ。又、澤妻又は入澤の支澤から北節刀北微東の尾根に取付く事も出来ない事はなからうが、得策とも思はれない。

北節刀を下りてから灌木を交えた膝迄しかない笹藪の平を分けて行くと、二十分足らずで中節刀へ来る。此名稱は中芦川では通じない様で別に何とも云はなかつた。大塚氏によると西ノ湖方面では金山といふさうだ。

中節刀から十二ヶ岳迄は、先づ一寸下りると直ぐ深い藪が始まつて、其が普通の藪に變る頃鞍部に着く。それから上りにかゝつてそろ／＼岩が現れ、右へ左へ卷いたりする。もう十二ヶ岳の領分だ。其何處かで岩陰からすゝつと鷹が飛んで行つたりした。岩にはドウダン等が縮こまつて生えて居て何となく高山めく。尾根が少し右手に彎曲し始めると目の前に一寸したキレットが現れる。どの側も急だが殊に大淵谷に面しては聊か緊張味を覺える。次の高峯へ四十度近くの急坂を攀ぢると、尾根は再び左手に曲る。曰くの有りさうな巨岩を乗り越えたと其處が十二ヶ岳最高點で、裏の小平地には石祠及朽ち果てた木の祠（高三尺）があつた。奉納の劔が二十本あつて、中には大石村としたものもある。中芦川で話に聞いた「腰の物」は終に見當らなかつた。時間は中節刀から此處迄凡五十分かゝつた。岩上からの見晴らしは北節刀よりも狭いが、感じは遙かにいい、先づ富士からクロックワイズに見て行くと、大方山の右に赤石南半の一岳（上河内岳？）が現れ、次に鬼ヶ岳の三峯で大分隠されるが

再び蝙蝠、鹽見、農鳥、間ノ岳、北岳、小太郎から、地藏、鳳凰、駒の一脈を望み、八ヶ岳は惜しや北節刀で半ば姿をかくす。秩父連山から大菩薩連脈にかけては殆ど全部見える。なほ廻つて黒岳、三峠山が近く呼應して居る。就中絶景と稱すべきは、雪の高嶺を左右の背景に持つた西節刀の岩峭と針葉樹の風致である。

十二ヶ岳から中節刀迄の歸りは四十分餘りかゝつたが、此方がらくである。

偕て、十二ヶ岳は更に東すると尾根は一層險峻となつて、小規模乍ら幾つもキレットや左右の斷崖を形成する。此は私の未知であるが、幸ひにして會員大塚泰亮氏から詳細な報告があつたので、其大部分を左に掲げて補ふ事とする。改めて誌上に同氏の好意を深謝する次第である。

但、同氏の旅は大正十二年五月に行はれたものである。

時間記錄。 西ノ湖（午前七・一〇發）——大杉附近（八・二〇）——笹ヶ峠（毛無山）（八・五

〇着、九・一〇發）——十二ヶ岳（一一・五〇着、一二・三〇發）——金山（一二・二五着、一・

三五發）——節刀（一・五五着、二・一〇發）——金山（二・二五）——鬼ヶ岳（三・一〇着、

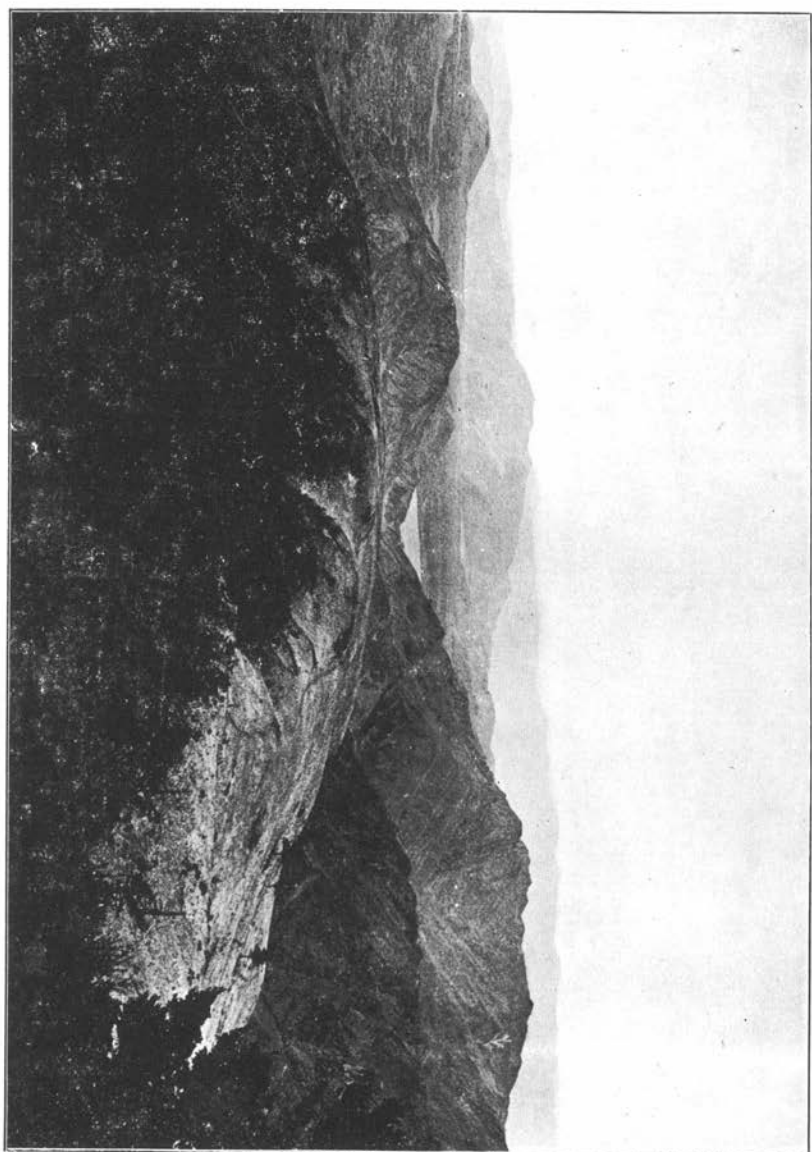
三・二〇發）——鬼より一ツ目の隆起（半面は草山なり）にて霧深かりし爲鍵掛への尾根分らず、

五時三十分頃迄費す、尾根らしき所を下り、後澤に下りて根場に出づ、根場着六時五十分。

山の様子は西ノ湖宿舍の直ぐ前の家の老人より聞く。此處では毛無山と聞いても分らず笹ヶ峯と云つて居る。途中島坂（九六九米の地點か）よりの尾根の中に峯山、大平と稱する地點ある由なれど、案内人無き爲判明せず。十二ヶ岳に向つて進めば矮樹を可成りに生じた隆起が次から次へと出て來るのでがつかりました。十時二十分頃十二ヶ岳と記せる木標のある隆起に來ました。少し進むと行手が急に斷落して崖になつてゐる。扱ては始まつたなと思ひつゝ木につかまり、少し下りて下を覗いて見たら案外、基部迄一間足らず、基部の足場もよかつたので飛び下りてし

影坡氏雄壽滿川前

(山方大と湖西本はき遠央中) 岳々二十と岳刀箭るた見りよ山崎三



まつた。見返せば私のとび下りた處はこの崖の半分以上も下つた所だつたのです。南方が最も立派に岩壁になつてゐて、こゝは高さは五六間はあるでせう。然しその岩壁の脚部を路が迂回してゐるのを見て私は呆れた。木標の前より下へも道が行つてゐる様に思つた。次の隆起も西面は崖だ。下降不可能。北足を迂回する道がある。此崖は其前のものよりも遙かに規模大であつて、基部より見た所では十五間の餘ある様に見へた。南面は岩壁露出し、この脚底は見えぬ。之から二つ目の隆起が十二ヶ岳本峯でした。西ノ湖で十二ヶ岳の手前に二ツ山の險あり、頭は通れぬ故北を廻れと教へられたのはこれだと合點しました。十二ヶ岳頂上には祠あり、この後の臺地に「大正十一年十月登山建立、山梨縣山谷跋涉會、田村九岳」と刻み記した三角點標石様の石標がある。霧の爲眺望は無かつたが、時々大石峠から節刀、國師方面が見えた。頂上から一町半ばかりにして行者返りと稱する險ありと聞かせられて來たが、知らずに通つてしまつた。(中略)なほ十二ヶ岳へは長濱から登れる。この方が道がよいさうで大原の谷とかいふ澤に付いて笹ヶ峯に出るのださうです。西ノ湖からも直接十二ヶ岳へ行く道がある。十二ヶ岳の峯は幾個あるのだから、何處から十二ヶ岳だか判明しませんが、木標があつた二ツ山からその次の隆起と本峯とを云ふのかとも思はれます。西ノ湖の方では鋸山とも云つて居ります。なほ甲斐國志に「コレヨリ(十二ヶ岳)東ニ小嶽及び笹ヶ峯アリ」と記してありますが、小嶽と云ふのは或は二ツ山を云ふのではないかと思はれます。

十二ヶ岳は大塚氏の手紙でも未だ窮めたい箇所は多く残つてゐる。尙、西ノ湖と根場との間から緩傾斜地の間丈潛流をなしてゐる澤に付いて上る道がある。此は十二ヶ岳山腹の鑛坑に行くものださうであるが、それからも岩登りをしつゝ達する事が出来るであらう。但、十二ヶ岳麓の村々にはいづれも安眠し得る良好な宿屋は無い。嘗て私が泊つたのは西ノ湖村の松屋といふ見すばらしい旅舎

で、一晚中蚤の大軍に攻められ、其揚句十二ヶ岳も放棄して青木ヶ原をさまよつた苦い經驗を待つてゐる。然し其處で私は西ノ湖産赤腹（魚名）に關する小話を聞いた。其は、元來西ノ湖村は古い由緒のあるもので、宗旨は初め禪宗であつた。或時眞言の旅僧が長濱の禪寺に來て一碗の飯を乞ふた。所が其寺では僧に禁物の赤腹を副食物にして粟飯を食はした。眞言の僧は其儘西ノ湖にいつて食べたものをすつかり吐下した。其以來西ノ湖の赤腹は今日に至る迄頭に粟粒を載いてゐるといふ。

中節刀から西節刀の鬼ヶ岳迄は兎に角切開が付いてゐる。大塚氏によると四十五分を要し、樹木愈々密になつてリュックサックが引懸つて弱つたさうであるが、私が逆に行つた場合には三十分に過ぎず。大してひどい藪とも感じなかつたが、詳しい事は記憶にない。但鬼へ向つて行く方が上りが多いのは事實である。

鬼ヶ岳は一七三〇米、一七二〇米、一七一〇米の圈を有する三峯が南北に列んでゐる。（最後の峯には一七一二米の水準點がある。）秩父あたりから見ると北節刀が最も壯重であるが、近景はこの西節刀の方が數等優秀である。第一、此處も十二ヶ岳と同じく岩塊が露出して山頂に立つて居る。角蠻岩めいた其岩の南側に西風を遮る暖い休場がある。其處で見える山は大菩薩連脈、御前山塊、黒岳、三峠山、十二ヶ岳、丹澤山塊、御正體山、鹿留山及び山中湖、河口湖などから富士山、箱根火山などで、天狗の鼻の様な形（大塚氏の形容）をした其岩上に立つと、更に鬼ヶ岳西方の疎らな針葉樹林を透して、上河内岳から以北の赤石山脈及白峯山脈の逸物が繪の様に美しい。何となく神韻に満ちた光景だ。（仁田河内岳はイザルヶ岳、千挺木山の間に首を出して居る。）其れから甲府の町や、八ヶ岳を始め上州境の山々、秩父の奥山等が晴れて見えた。近い十二ヶ岳は筈狀に屹立し、黒木の下には岩壁があらはになつて人を威嚇する様だ。御坂山塊を黒岳から縦走して來た人は此處に至つて始めて其眞髓をつかみ得た如く感ずるに違ひない。

なほ大塚氏は「西ノ湖で鬼には青ナギの池と稱する小池があると聞いたが、霧が増々深くなつたので探して居られず、先を急いだ」さうであるが、天候に恵まれた私達も池の存在は認めなかつた。鬼の頂上から疎林の間を通つて一旦西北に向ひ再び西進すると、直に一七〇二米の地點に着く。私は芦川谷から之に上つて來た事を記さう。

大正十年十月卅一日午前七時、中芦川村の旅舎朝日館から芦澤平作といふ炭焼で獵師もする男を案内に連れて芦川の支流入澤（前記）の谷に入つた。行々西節刀を仰ぐ。三十分許してウシマワ澤といふ小澤を上り、榊林から杉林に移ると、其處に清水が流れてゐる。之から上には水は無いといふので、水筒に詰めて水澤山の尾根に上る。まだ八時前の朗らかな空氣を通して灌木の間から、白峯、赤石、東駒、飛驒の大山脈が眼も覺めんばかりに雪の粧をして列ぶ。段々上るに従つて林の切目からすばらしい展望を得られる。此尾根は柳澤（鍵掛峠道に沿ふ澤、それから此尾根にかけて一帯を深川と云ふさうだ。）からかけて大部大げさな伐採をやつた爲山其物の感じは悪いが、其代り比類稀な大バノラマが自由に眼に映ずるのである。尾根の所々藪がからまるが、大體開地が多く、秋晴れの遠山の眺めを充分享樂しつゝ進む事が出来る。かうして九時半に「アシアト」と稱する西節刀の直下にやつて來る。此處は恐らく二萬分一、五萬分一兩地形圖共に記入してある小徑の終點のあたりで、一寸いゝ休場だ。鍵掛峠から王岳にかけての細い尾根も眺められる。此處と殆ど同高の場所ので、入澤を溯つた所に「ワウレンバ」と稱する仕事場の跡があるさうだ。之から徑は藪で少しく悪くなるが、大した事もなく前記一七〇二米の西方、仕事場の跡に出る事が出来る。そして其日は十時十五分に西節刀の頂に着いた。

西節刀の三峯の尾根及び入澤又は南の西ノ湖方面から登る他の通路に關しては何も見聞しなかつた。

西節刀の西一七〇二米から先は私の未知境であるが、大體の事を書き記して見る。先づ一七〇二米峯の西鞍部の東寄りに天狗岩といふ所がある。それから一峯を越えたと鍵掛峠(約一五二〇米)で、鶯宿村の方では根場坂と稱する。次に幾多の小峯を上下して、尾股山支脈分岐點を過ぎ、山稜が南西を指すと一峯を経て、王岳(一六二三米)に到る。王岳は鶯宿村では別名四本木頭(シホンキガシラ)と呼ぶ。其頂からは太平洋が見えると村人は云つた。そして此山以後に目ぼしい崛起もなく、精進湖北方の女坂に到る。それから西すると再び稍高くなつて、先づ一四三二米の一峯を起し、此處で山稜は二岐し、一は北して一二七一米の釋迦ヶ岳から再び畧ぼ東西の方向を取り芦川の左岸山脈を形成する。他は南下し天子山脈の雨ヶ岳に連る。此等の連脈は高度も黒岳連脈(假に女坂以東を稱する)に比すればずつと低下する爲、又文化に近い丈、道路が発達して居るのに氣付く。市川大間から四尾連湖(シビレ)へのあたり、芦川谷の下九一色村と古關村の間等に、相當大きい峠道が走つて居る。そして古關村、山保村の側では、村落が山腹の各所に散在して、其間を道路が様々に縫つて行く。此等の諸村が細々した御坂山塊西派の末端に築かれて居る事を地形圖は教へる。かうした山國の旅、古めかしい名の里落の訪問も興が深いであらう。けれど、私は芦川左岸の山脈、蛾ヶ岳(カマキリ)(芦川左岸山脈中最高)から北西の部分を実際に知つたに過ぎない。次は大正十年四月中旬に於ける旅を記して見やう。(但、其時のノートを見失つたので、記録は正確でない事を御斷りして置きたい。)

甲府から芦川谷入口の市川大門迄は定期では無いらしいが乗合馬車が通じる。私達三人は停車場から大分歩いて其馬車屋を探し當てたが、朝早い事とて、馬車の支度到手間取り、市川大門に着いたのは慥か八時頃であつたと思ふ。其間目指す御坂山塊に注意すると、此方面からは節刀ヶ岳、神座山の釋迦ヶ岳等が可成り峯を鋭く聳えさして居ると見た。西山の方は前山が大きく過ぎて格別の事は無かつた様に記憶してゐる。

市川大門の町を暫く歩いてから南に突き抜け、五萬分一甲府圖幅に現れて居る相當に廣い道を登つて行く。そうすると七百米附近から背後に前山を越して白銀の白峯山脈の一部が現れる。然し其は餘りに近い爲と、前山の大きな爲に節ヶ岳山群以東で見る様な美しい調和を缺いて居る様だ。八六七米の獨立標高點を有する一隆起の附近に好い休場があつた。なほ尾根の山保村側を通つて町から一時間ばかりで、四尾連湖西北の山上に着く。此湖は富士八湖の一に數へる人もあつて裏富士を望む一名所として多少の感興が湧かないでも無からうが、可成り濃い湖の色も、附近に森林らしいものが絶えてしまつた爲、山湖としての趣は頗る淺薄である。私達は下りても見ず、蛾ヶ岳ヒルに向ふ。大畠山から先しばらくの間茅戸の尾根を進む所があつて、展望の快を貪る事が出来る。そしてこの道通り進むと凡一時間にして蛾ヶ岳の西南の肩に着く。この邊も貧弱な林で、灌木に包まれた蛾ヶ岳の頂迄か細い小徑が上つて居る。頂上は一二八〇米。若木の叢林で邪魔になるが全然眺望を失ふ事は無い。詳しい事は忘れたが、兎に角其處で中食を済まして私達は下九一色村の高萩に下る道を求めた。上つて來た細徑程踏めてゐない様で、直きに迷つてしまつた。どうも折門峠へ續く尾根を下りたらしい。で、西側に卷く様にして小澤を下ると、澤は悪いので荆棘を分け、崩れを横切つて確からしい尾根に近付く。やつと炭燒道らしいのにぶつかつたが、随分にすたれたと見えて、矢張り茨軍に包圍された。けれど間も無くよく踏めた正路を得て、草地から森林中の細い側尾根ソノに走り下つた。高萩に下りたのは日暮の頃であつた。

此旅は芦川谷かみの上に向つてなほ續けられた。然し御坂山塊の尾根を西端迄傳つて來た私は人の香の高い芦川谷を足早に過ぎやう。此谷は御坂山塊の育くむ溪流の内最も長いもので、黒岳に源を發し、市川大門より下流十町餘で笛吹川に合する。私は高萩から下流を除いて、谷添ひ道の最奥なる新田乗越（假名、前記）迄歩いた見た。其内、古關より下流は開けた爲、高萩附近三帳附近（三帳）に溪流岩石の變

調を見出すのみで、印象的な何物も無い。加之、此谷にも水電事業が侵入して、左岸には架設水路があり、それから右岸に無趣味な金屬の樋を引いて來るなど、感じの破壊された所も少くない。古關の一泊も駿州中道往還の一古驛に泊つたと自惟した迄の事に過ぎなかった。然し上流鶯宿村あたりへ來ると稍純然たる山間の氣分がうかゞはれる。次の中芦川村には鶯宿、中芦川、上芦川三村の組合村役場がある。一度其役場に立寄つて節刀ヶ岳方面の參考になりさうなものを探してもらつたが、山中字名の他は殆ど得る所が無かつた。上芦川村のあたりから芦川谷は思ひ切り開き直つて、緩傾斜のまゝ新田乗越に登つて行く。そして其處から例へば釋迦ヶ岳の屏風岩の様に峻巖な地形を仰ぐ事は變つた趣がある。盟主黒岳の廣く大きい胸に色づく疎林のある様、北節刀の山腰が概して黒く冷たい事、其等三者の對比は此谷から泌々と味はれるのであつた。(大正十二年十一月廿二日。)

附記 最近此山塊には、三峠山から巢鷹山八丁峠、御坂峠、黒岳、大石峠、節刀ヶ岳、鬼ヶ岳を連ねる尾根上に路が開かれた。尙ほ本年八月フトヲの北端西峠との接合點に河口の人々が三間に四間半の小舎を建てた。

春の焼山と火打山

冠 松 次 郎

焼山火打山等を連らねた、妙高火山麓を旅することは、私にとつて久しい以前からの豫定であつた。春か秋、笹ヶ峯高原の景を賞し、小谷温泉の方まで抜けたならば、奥戸隠の山々や、天狗原から連らなつてゐる妙高火山の英姿が、どんなにか私を喜ばしてくれるだらう。私はたまらなくそう思ひながら、

年々延び／＼になつて今日に到つてしまつた。

大正十年六月八日。明方の空が大分どんよりとしてゐたが、汽車が田口間近くなる頃には、何時もの様に妙高は旭日の閃耀を受けて、雄麗の山頭を淺葱色の空に光らしてゐた。その赭岩磊々たる山の肌も、ある處は紫黒色の陰翳を深く刻み、ある處は桃紅色の華やかな陽光に浸つてゐた。寶玉を見つめてゐるとき、その光りの中に萬種の色彩を含蓄してゐる様に、私はさら／＼と幻耀してゐる大きなエメラルドの様な山の色を眺めて、揚々たる氣分で停車場に下りた。

坦々たる縣道を關川の手前で右に折れ、黒姫山と妙高山の山側を等分に見て、靜かな村道を登つて行く、車中で吸ひ込んだ煤煙交りの瓦斯を吐き出して、思ふさま朝の新鮮な空氣を取り入れた。あたりは靜寂として小川の水の音が聞えるばかりで、田圃の中で忙はしい田植をしてゐる女等を見るのも、私には一幅の畫面を擧げてくれる様に見える。リュックサックが重いので、時々休み黙々として四顧しては、又つま先登に行く。

水力電氣の鐵の櫓柱が甚だしく目ざはりになる。周圍と調和しない文明の設備が、當今は到る處の山間にまではびこつてゐる。折角都會から離れて、山谷の氣分を受け入れ様と思ふ私の心を、又都會の喧噪裡に引き戻してしまふ。然し癢に障つても仕方があるまい自分の方が時代錯誤なのだから。

杉ノ澤の村まではつま先上りで、村へ入ると暫く平になつてゐる、長助の家を尋ねると、丁度私の行くのを待つてゐたところであつた。雜貨、食料品を嚮ひでゐるその店の入口の左手に、苗ノ瀧、小谷溫泉案内所と云ふ古い看板が懸つてゐる。山の好きな彼は、私の行くのを楽しみにしてゐた。必要の品を整へ、十時頃杉ノ澤を出かける。村をはづれると登りになり、暫く草山を登りつめて牛小舎と云ふ小さな平に出ると、杉の木が二本茂つた小さな祠がある。その傍に柚が二人晝寢をしてゐる。夏ならば嘸涼しい處であらう。下方を見ると關川の流れを跨いで、幾つもの部落が雜然と重ねられてゐ

る。野尻湖が眞晝の日に照されて銀板を延べた様な光りを放ち、その先に斑尾山が稍高く、それから奥は萬山煙霞の裡に、糝糊として延展してゐる。黒姫山も随分近くなつた。最も里に近いこの山は、表からは雪一つ見えない。

池の峯の峠にかゝる時分には、妙高の山側は中々廣い裾をひろげてゐる。檜、山毛櫸の密林の中に白樺が大分交つて來た。こゝでは妙高を全く横に望むので、廓岳は心岳よりも遙かに近く、心岳は兀々として東に向つて蟠かまつてゐる。妙高山は晝にする積りでも、寫眞撮らうと思つても、何時か霧がかゝつてその頂點は見えなくなると長助が云つた。然し幸ひに私のカメラに入つてくれた。

だら／＼降りるを左へ迂回して行くと、山坂の窪に始めて残雪をふむ、また登り切ると、闊葉樹の密林が行く手一杯に茂つて、その向ふを恐ろしく黒い雲が盛んに湧き出してゐる、それが南の方へ動いて行き、その切れ目から夥しい残雪が光ると、河馬の脊の様な雄大な山容が、怒濤の如き黒雲の中から脊梁を突き出した。戸隠の裏山、高妻、乙妻の雄姿を始めて仰いで、私の心は急に緊張して來た。そして眼界にある程の高い山は、一つも見逃すまいと四方を物色した。

池の峯を左へ越すと、道は崖上を降る様になる。牧場の入口の頑丈な木戸を押し開けて行くと、笹ヶ峯の高原が眼下に展げられた。こゝから見た黒姫の裾は随分廣い。大きな開墾地が造られてゐるの、戸隠寄の方は大分木を伐り盡されたやうである。少し降ると、水楢の大木の右に焼山が眞白な可憐な頭を出した。降るにつれて、見える／＼、焼山、裏金山、金山、天狗原山の諸山が、白雪皚々として笹ヶ峯高原の上に聳えてゐる。その中で天狗原の頂上から右の肩へかけては、全く雪で埋められて、とても晩春の山とは思はれない程、アルプスの様な冷たい色彩をして、水晶の様な城廓を連ねてゐる、黒姫よりも妙高は雪が多く、火打山や裏戸隠は更に多く、焼山から天狗原に續く山濤の氷雪は、白馬連峯のものにも劣らない程深く饒である。

可なり降ると、楡、七葉樹、白樺などの木がくれに、放牧されてゐる牛馬が、幾塊まりにもなつてさまよつてゐる。地藏岳、乙妻山、高妻山を眺めながら牧場へ降り切ると、路は平坦な疎林の間を芝生の上に付けられてある。數十年前、笹ヶ峯新田の人家のあつた所だと云ふ附近には、木立の間に昔の家の礎石や、寺の跡、石碑の残りが散見される。林の間を通り抜けて、廣い草原に出ると、その端の處に牧場の小舎が見える。午後三時頃に小舎に着いて、旅装を解き、下駄を借りて散歩に出かける。

笹ヶ峯牧場は妙高火打の山麓が、殆ど平地に近い緩漫な傾斜をして、關川の谷に向つて傾いてゐるところにある。そこには闊葉樹の森林のある間に美しい草原が、十數丁も展がつてゐる。その西寄に小舎が一つ建てられて、牧場の事務所にあてられてゐる。四間に五間位の大きさの小舎で、その半ばは土間になつて、残りを板敷に藁藁を敷つて、爐が切つてある。事務所と云ふても事務をとつてゐるものは一人もゐない。放牧された牛馬の番をして、その食料の世話をしてゐるので、私の宿つた時には山の様に細い筈を探つて來て皮をむいてゐた。私もその御馳走に預かつた譯である。牛は日中は林の奥に入り込んでゐるので、多く出てゐないが、朝夕になると、草原の方へ續々出て來る、氣の少さい馬は小舎の邊りに、人なつこそうに集まつては、そこで夜を過すと云ふことである。

小舎から谷川は可なり遠いので、溪聲は殆ど聞えない。障子を開けるとゐながらにして、裏戸隱の地藏岳が見える。原へ出ることに數十歩にして西方を仰ぐと、焼山も天狗原山も晶燦たる雪の裳をかゝけて、蒼黒い前山の上に連らなつてゐる。東の方は黒姫山の翠黛が朝夕の雲霧に、その優美な山容を變幻させる。黒姫の北の裾と妙高の廓岳からなひいて來る斜坂の間が、關川の谿筋になつてゐて、明方になるとそこから白み始めて來る。

六月九日。朝七時頃小舎を後にして、小谷道を降り氣味に行く。トクサ澤と云ふ小流を涉つて、闊葉樹の太木の中を美しい清苔の敷かれた、庭園の様な處を降つて行く内、道が二つに岐れる、左は

小谷へ行く道で、右の歩道が眞川筋の道になつてゐる。焼山の方へ行くのには、上流瀧澤の出合迄は眞川の岸通りを行くので、私等は眞川の道をとる、間もなく黒澤の水が藪の中をかき分けて溢れ出て来る。川幅は甚だ小さいが水は頗る潤澤である。

雪代で水が川の両側に溢れてゐるので、暫くの間、路は沼池の中に消えてしまつて、悪い所は膝まで没する。夥しく繁殖してゐる水芭蕉の中を、迂る足を踏みしめて行くと、水溜の中に蓮の花弁の形をした、カンテンの様なものも幾つも浮んでゐる。キモリの卵だと云ふ、私は始めて見たので珍らしく思つた。川向ふに一段高く笹平の原が、美しく青草で敷つめられてゐる。眞川の流域は鍋倉の出合の少し先までは、随分闊々として闊葉樹の密林が兩岸を一杯に埋めてゐる。

途中で眞川を渡渉しやうと思つたが、水嵩が大きく灰白色に濁つて、川底の石が見えない爲、何となく氣味が悪いので見合せた。眞川は八月川だと土地の者が云ふてゐる。それは八月以後には渡渉が困難だと云ふ意味なのである。出合近くで鍋倉を渡つて、それから本流を右岸に出る。川楊の繁茂した川原の廣い、砂洲の續いてゐるこの附近は、梓川の上を思はせる。

少し行くともう平地に残雪が見えて來た。楡の森の上から藥師のガガの巖壁が名の如く磊々として聳えてゐる。その懷には随分雪があるが、惜いことに高さが低いので、頂上迄針葉樹が立ち並んで見える。追々谷幅が迫つて來ると、突當りに二丈程の瀑が懸つてゐる。これが瀧澤の瀑で、右から流れて來る本流にも瀧があつた。

やがて歩道は谷を離れて山嘴に登る様になる。石楠花や躑躅が大分見えて來たが、僅に芽を出したばかりで、附近の梢も殆ど寒林の姿である。登り切つた處が残雪の平になつてゐて、行く手に枯林の間から、碧空をバックにして、焼山が大きく現はれた。素晴らしい残雪である。鹿の子斑どころではない。七分處はまだ雪に封じこめられてゐる。その頂上が大きくV字形に割れてゐるのを、エボの様

岩骨を白雪の内から尖がらしてゐるのを見ると、如何にも荒々しく、遠望して綿帽子を冠つてゐる様な優しい姿とは、似てもつかぬ程男性美を發揮してゐるのが氣持が好い。

雪の上で三脚を立て、焼山の姿を撮つてゐると、頭の上七八尺の所をかすめて、杜鵑が叫びながら木の間がくれに飛び交してゐる。白雪で封じ込められてゐる山中も、空の色、山の影、霞の微動、鳥の聲は流石に春の酣なるを思はせる。

これからは、金山裏金山の澤を横ぎつて、眞川向きの山側を搦んで行くのだが、勾配が急なので雪の上は一寸歩き悪い。一番歩き悪い處を多分石原坂とか云ふてゐたと覺えてゐる。そこから右手に老山のヨロヒ岩が見える。老山は笈山の方がヨロヒ岩に對してよさそうに思ふ。長助も老山でなく笈山だと云ふてゐた。追々登りとなり、眞川が殆ど雪溪になる頃には、山嘴を廻つて峽谷に降り立つた。

左へ入ると、急に山懷が闊くなり、溪谷は大きな雪の斜原になつてゐる。火打山が始めて見えた。こゝまでは火打山は前山にかくれて一度も見えない。此方面に向つてゐる山側には、残雪の大きな縞が幾つも谷まで續いてゐるが、山容は堤の如く、その最高點も一寸見分けにくい。勿論焼山程の壯んな印象を與へなかつた。

雪の斜原の中に大きな楊が茂つてゐる。そこを楊の茶屋と云ふ。越後の方から焼山の肩を越して來る戸隱の賽道にあたる休場で、今は全く雪に閉じられてゐるが、夏ならばこの廣い窪地は露營地に最も適した處だと思ふ。(午前十時半頃)雪を噛みながら中食をすませ、少し進むとひた登りとなる。この登り口を御殿場と云ふので、登るにつれて笹ヶ峯高原の美しい青草原が展開されて、高原を劃る戸隱の地藏岳の上に、乙妻高妻の嵯峨が高く碧空に蟠まつてゐる。その右後から西岳に續く連嶂は雪は少ないが、屏風の如く折れ重なつて、遙か奥に飛驒山脈の雪山が雲の間々から鋭い光を放つてゐる。焼山の頂上近くまでは残雪の上を行くので、何處からでも登れる。暫く旅行をしなかつた爲か、雪坂

へかゝると、無性に足がだるくなる。幾度も休んでは眺望をむさぼり、午後一時頃になつて漸く焼山の頂上の一角に上りつき、右に廻つて頂點の岩の上へ腰を下した。

火口壁の北側の噴氣孔から盛んに煙を吹いてゐる。深い霞と叢雲の爲日本海方面は朦朧として見え、樂しみにしてゐた飛驒山脈も全く姿を現はさなかつた。妙高山にも雲がかゝつてゐた。火打山の右後の高谷野地も一面に雪に埋められて、その中に、僅かに池らしいものゝ水が一點光つてゐた。

三角石標の上に山友加山龍之助君の名刺があつた。私のもその上に重ねて石を載せておいた。午後二時、火打山の方に向つてゐる東面の急峻な雪の斜面を下る。四十五度以上の角度がある、殆ど波状を爲さない雪の急坂は、或は雪崖と云ふ方が適當かもしれない。夏ならば磊々たる火山岩の上は、如何に急峻としても、一步／＼の足だまりがあるが、稀に巨岩を露出してゐる丈で、足止りが悪いので、可なり骨が折れた。然し降りだから早い。火打焼山の鞍部迄二十分かゝらずに降ることができた。

まだ午後三時にはならないが、火打山を越して高谷池まで行くのは、今日は少し無理の様に思はれたので、豫定を變更して鞍部で一泊することにした。油紙を二枚灌木の間に張り、枯木を集めて焚火を始める。水がないので、雪を解して米をとぎ、飯にする迄には随分時間がかゝつた。野營地としては不適當な、丁度風や霧の乗越の様な處だが、一夜のことだから我慢をする。

白根葵の藤色の花が大分見える。西に焼山を負ひ、東火打山に對し、南は戸隠の連嶂を望み、北の方日本海を俯瞰することが出来るこの鞍部は、案外感じのよい所であつた。

すぐ鼻先に聳えてゐる火打山の美しい雪の縞、鈍いピラミダルの山容は、可なり整調な、立派なもので、この山脈の最高峯たる威嚴を備へてゐる、夕方は幸に晴れてゐたので、この山は絶えず全容を現はしてゐた。火打の右後方に妙高の鐵壁が見える、廓岳の赭褐色とは全く異なつた、鐵の様なその山の色は、龍王や黒岳の眞黒な姿をさへ思はせた。南の方戸隠の山々が夕日に照り榮えて、桔梗色

の山の肌に、氷藍色の雪の光りが溶け合つて、美しいミラージュを描き出してゐる。日本海の方を眺めると、午後の煙霞の底に越後方面の丘陵山河が息づいて、日本海は糢糊として水天の境も見えない。夕焼が却つて禍を爲したのか、夜になると霧が烈しく頭の上を動いて行く。風通しのよい鞍部なので、餘程寒い筈なのが存外暖かで、夜中焚火の消えたのも知らずによく寝こんでしまつた。夜が明け放れると暫く霧が静まつた。焼山を仰ぐと、こゝからは殆ど全部雪に蔽はれた巨大な築山の形をして、處々露出してゐる大きな岩が、中々風情を添えてゐる。

十日朝六時に野營地を出發した。天候の變り目なのであらう、霧が多いので心もとない。野營地からなだらかな丘を越ると、火打の登りとなる。附近に戸渡り式の山稜が三四間續いてゐたが、概してこの山は樂である。一時間程も上つて顧みると、眼下に見える雪の堤の様な天狗原金山を越して、白馬嶺が見える。乗鞍、簗に至る山稜と、雪倉から朝日に續く山濤の懷に屯ろしてゐる雪はアルプス的と云ふよりも極地に於ける氷原の様で、見るから如何にも寒げである。綿をひく様に山の窪、谷の間から匍ひ上つて来る雲は、絶えず山頂を繞ぐつてゐるので、とう／＼白馬の頂上さへよく見ることが出来なかつた。

何時の間にか乙妻高妻の頭がのしかゝる様な大きな笠雲に包まれた。あれがこつちに廻つて來てはかなはないぞと長助がつぶやいた。同じ様な山脊をひた上りに登つて行く内、風が強くなつて來た。濃霧が襲つて來た。一間先も見えない程濃厚な霧の中を私等は離れない様にして登りつゞけた。

火打山は頂上近くなると勾配が益々緩くなり、溝の様な凹が續いてゐて、雪さへあれば野營地に適する處がある。右へ廻りながら上つて行くと、偃松の中へ出た。火打の頂きにかゝる時分には、恐ろしい烈風になつて、霧が大雨を齎らしたのが、とう／＼雲になつた。高谷野地の方へ降るつもりで残雪の上へ出たが、非常な風は雪溪の雪を吹雪の様に飛ばすので、目を完全に明いてゐられない。私等

は風に飛ばされない様に、なだらな雪の上を匍ひ降りて行つた。長助の顔を見ると眞青で、私も齒の根が合はない位顫えて來た。四十分近くも雪の上を降つたが、どうも高谷池の方へ行くのには様子が變だと長助が云ひ出した。その内に霧が少しでもはげはしまいかと、暫くの間徐々と降ることにした。幸に少しばかり風に追はれて霧の隙間が出來た。見ると私等は高谷地の方よりずっと左の雷菱の方へ降りて來たので、遙か下の谷が行かず谷だと云ふ。

已むを得ず戻ることにして、降つて來た雪の上を又火打山の頂上へ向つた。風が強いのと雲が吹つかけるので、兎ても立つては歩けないので、私等は匍行して、午前十一時頃になつて漸く火打山の頂上に辿り着いたが、高谷池の方を斷念して、偃松を横ぎつて鍋倉の谷へ下ることにきめてしまつた。偃松、残雪、それからその間に出てゐる荒くれた尾根の、白樺の密叢の中へ入つて、谷の方へ上り込んで行つた。風が強く當らなくなると急に身體が暖くなり。空腹を覺えて來たので、野營地で焼いて持參した鰯をかじりながら、暫く休んだ。

この山脈を自分の棲家の様にして飛び廻つてゐる長助は、今日路を間違へたことを非常に心外に思つてゐた。火打山に大きな狐がゐると云ふことを、昔から山麓の者は噂をしてゐるので、彼はてつきりその狐につまゝれたものと思ひ、とうとう火打の狐にばかされたかと、幾度もくり返して云ふてゐた。暫く降ると追々谷の様子が整つて、幅が中々大きくなり、高谷池の方から流れて來る澤と落合ふ邊は、溪谷は雪の原の様に廣くなつて、馬でも駆けさせられる位い、丸い鍋の底の様な形の大きな窪地になつてゐる。鍋倉と云ふ名のつけられたのは、この地形からではないか。

雪は中々續いてゐた。丁度、笈山(老山)の東側を見ると、溪谷は實に美しくなる。四方から迫つてくる幾多の尾根の目覺める様な新緑と、その間に皚々たる白雪に埋められてゐる縦谷とが鍋倉の谷に向つて集まつて來る。まだ汚されてゐない残雪は飽くまでも白く、尾根を蔽ふてゐる新緑

は飽くまでも縁に、私のまだ曾て覺えてゐない程對照の美を示してくれた。高谷池から妙高山の方へ出られないのを残念に思つてゐた私の不平は、鍋倉の新緑の美觀ですつかり癒されてしまつた。

追々雪に切れ目が出来て、谷水が残雪よりも大きくなると、間もなく私等は大きな瀑の上へ出た。鍋倉の瀑、一名ヒヨサの瀑、高さ概ね十丈餘、鍋倉全流が飛瀑となるのと、雪解の水の多い時の爲か、すばらしい水量で、瀑を圍む岩の屏風も、瀑壺も、随分立派なもので、恐らく眞川では最大なものであらう。

瀑の上の崖を左岸に回り、山毛櫨白樺榛の木などの間を笹を分けて行くのであるが、雪が多いので細い木や笹は、皆その下敷になつてゐる爲めに歩き好い。夏になると藪でさぞうるさいことであらう。畫家茨木猪之吉君が、その夏鍋倉を降られたが、その時には誤つて瀑の處で右岸を廻つた爲、非常の困難を嘗められたとのことである。然し左岸の方はなだらかで瀑から一時間経たない内に、眞川との出合へ出た。

午後一時頃、雨中を木の間へ油紙を張り、その中で飯を焚き味噌汁を作つて、晝食を認めた。雨は依然として歇まない。山壁を繞つて伸び縮んで行く煙の様な雲、川楊の林の中をボカシて行く川霧を眺めながら、先刻苦しんだ火打山の頂上の光景を思ひ浮べると、全て世界が異がふやうな氣持がする。

暖かい飯で腹具合がよくなつたので、眞川の美しい川添を降る。山腹は残雪が深く、木々の樹幹は寒林のまゝであるが、さすがにその梢はもう何となく赤味を帯びて春らしい氣分がたゞよつてゐる。一面にたなびく新緑の浪、楡山毛櫨榛の木楓檜楊などの密林の底を眞川の溪流は爽やかな音を立て、流れて行く。

午後三時頃に牧場の小舎へ戻つたが雨は上りそうもない。杉ノ澤まで出るつもりであつたが、大分疲れたのと、笹ヶ峯高原の氣分がよいので、今一夜牧場の小舎に厄介を頼んだ。濡れ浸つた服を脱い

で、乾いてゐるシャツの上にドテラを引きかけ、障子を排して前景を眺めた。蕭々として降りそゞく山雨の中を、黄昏がれて行く高原の景趣は何とも云へぬうらさびしさを感ぜしめる。地藏の山壁が糢糊として消えて行く頃、夢の様な林の中から親子の馬が四五匹よりそつて、小舎の方へとぼく／＼と歩いて來た。もう牛の群は何處へ行つたか一匹も見えない。私も寒くなつたので障子を閉め、ランプの下で炬燵へもぐつて、今日一日の旅程を、長助と話し合つた。外では風が追々と強くなつた。明日は天氣になるらしい、霧や雨の多かつたこの旅も笹ヶ峯高原の景趣を思ふ儘にむさぼつたので私の望みは充たされた。

この附近の山々に登るのに残雪と新緑の美を賞し鳥の囀りを聞くのなら晩春が最もよい。然しその頃はこの山脈中の美觀である高谷池や、黒澤野地は殆ど雪で埋められてゐるので、山草の美を味ふとは出来ない。その美觀を得るには矢張夏がよい。笹ヶ峯から、戸隠の高妻山へ登ることが出来る。それも晩春か初夏、谷に雪の多いときの方が都合がよい様である。

陸奥の山水

別所梅之助

青森へ

七月三十一日の夜、上野から奥羽まはりの列車に乗る。時刻は迫つてゐる。青森行の二等車は、ちつとの空席もない。機關車に隣る一番さきに、秋田行の車があると聞いて、係員のいふまゝ、中を通つてゆかうとすると食堂車。これを經營してゐる福島松葉館の男といふのが二人して、こゝは通り

路でないと思しきと見暮、客商賣のものとも思はれない。その關をもとにかく越えて、教へられた車臺にたどりつく。まあ、すいてゐるなと思つたのも、しばらく、夜の二時、三時まで、こゝへと乗りかへてくる人の少からぬは、他の車が込んでゐるからであらう。

八月一日。關根邊でうす明るくなり、米澤では降りる人もあつた。その物賣の聲が、「モ、にリンゴ」ならで、「モ、にデング」と聞きなされる。窪田、糠の目あたり、たゞ田園、東に文珠の小丘をみる。日はそこより昇る。赤湯すぎて景や、改まり、岩もあらはれる。上の山の手まへから藏王火山が、日の下にきら／＼と浮びあがる。左窓の虚空藏山に心づいたのは、もつと山形に近づいてからであつたらう。漆山すぎても、月山は霞んでゐた。楯岡では、あんなに近い飯岳すら煙つてゐた。次第に薄曇つて、袖崎あたり、青田と桐などのさまで高からぬ木とのみ見えた。お天氣が變るのかと思つてゐたら、また日がさしてくる。

大石田にくると、最上川が少し見える。窓の外をのぞいても、昔こゝを下つた俳人のやうな人は、ありや、なしや、知りがたい。たゞ隣席の年配の客が、化粧道具とり出して身仕度するまゝに、左の腕にさしたるローマ字の割青のあらはるゝを見る。新庄すぎて、屋根の勾配の極めて急なるに心づく、雪をおもんばかつてであらう。瓦屋根には雪どめがある。杉峠、國境とて山も迫る。列車は御物川にそつて、北へと山をのがれ出づる。横手のあたり、かなたに雪の山の薄く浮ぶは、鳥海であらう。

羽越線の開通式に招かれた人々は、秋田へくると、どや／＼と降りる。車が空になつた。私も乗るかへる。今度は車もよく、人も少い。青田わたる風が涼しい。八郎瀉をよそに北進すれば、日は午にして、能代川の水が空の青をうつす。二つ井に藤琴川をわたれば、山は白崩れ。矢立峠に植物のすがたの、さすがに北の地の山なるを思ひ、いつか岩木山みゆる野にいで、更に山をこえて、志す青森へ。〇さんの家につく。夕方、Jさんにあふ。明日の用意の買物などして貰つて、九時にやすむ。

酸湯まで

二日。人力車は早くきてくれた。五時半、浦町をたつ。在方の婦人の甲斐々々しき出立してゆくを見れば、女性の労働も烈しのであらう。道のべの杉村の中に、八甲田コウダのお社がある。ミヅハギ、ハゴロモサウなど、野の花うるはしき中をゆく。横内村にて車をすて、伊香イカといふ家にて、駄馬をたのむ。荷を大分つけた乗かけ馬に乗るのが、むづかしい。横内をたつたのは、七時近くであつたらう。道は次第に高原となり、ワラビ生ひ、ウグヒス歌ふ。眺めは廣い。八甲田は霧の中より現れ、雲谷峠は手まへに黒い。右手、白雲の上はるかに見ゆる山をいづくぞと問へば、馬子はタムシ山だと答へる。雲谷峠八時、峠の高みを左にして、馬は文字通り道草食うてゆく。低きヤナギランの咲く野の盡きんとするあたり、建てかけたる一つ家で、馬子は食事をする。こゝはと聞けば、萱野カヤノだといふ。九時十五分すぎてゐた。林あり、澤あり、それを幾つか越えて、十一時半、酸湯カスについた。(青森、横内間を二里、横内、酸湯間を五里半といふ。足すごやかなる人には、歩み興あるべき道であらう。)

湯宿へ〇さんからの添書を出したが、宛名の人には山にゆきをるに、山中のどこかにして、帳場の人は、炭か、硫黄か、何俵々々の勘定にいそがしい。やゝしばらくにして、五番といふのに案内せられる。室には先客が床をしいて休んでをられた。そのうちにも一人の先客もこられた。室を同じうした人の一人は、青森商業校の先生K氏、も一人は植ゑんが爲のツルコケモ、採りにきた黒石の人であつた。湯は量きはめて豊かにして、浴槽三つ四つ、湯瀧も四五ヶ所より落ちてくる。古への繪の風呂のやうに、下帯しめたまゝ入浴するを、男女混浴の爲かとさけば、湯のつよき爲だと、同室の人が教へてくれる。眼を洗はぬがよいとも聞いた。硫黄泉とて、時計がくろくなる。厠カサは山間に往々ある川屋とて、不淨を流しさるまゝ、蠅も発生せぬ。九百メートルからの地とて、蚊もをらぬ。

中食すみて後、K氏に導かれて、少し離れた地獄沼へゆく。湯宿の人々は、そのあたりに手入して、

公園と稱してをる。山にかこまれた一地點、うす白き水の汀に手を入れ、ば、やゝあたゝかい。池の心はもつと熱いのであらう、水はぶつ／＼と湧いてをる。池のほとり、賽の河原といはるゝ、かたの如きものあり、岩の上に石をつむ。毒ガス發生して、湯の花とるもの、さきに二人まで死にたれば心せよとの札が、割れたまゝ、岩に立てかけてあつた。あたりには、コケモ、や、ガンカウランが生えてをる。阿彌陀佛と藥師如來との名號をほつた岩がある。之を刻んだ寂導とは、山に縁ふかき行者であらう。藥師堂浴舎のほとりにあるは、此の湯の效驗を佛の力とみたからであらう。

添書をうけたMさんの歸られたのは、夕方であつたらう。Mさんの世話で、明日の案内を鹿内さんといふ山に熟した人にたのむ。夜、山の美しい寫眞をみせて貰ふ。

八 甲 田 山

三日。けさも晴れてゐる。七時出發。K氏たちと露しげき徑をゆくに、ネマガリダケにサ、ウヲがついてゐる。イタドリイタドリの丈高きが生ふるほとりにて、水をのむ。硫黄とり場のあとがある。わが立つ所高くなりてか、ふりかへれば櫛ヶ峯櫛ヶ峯へ、横岳現れ、駒ヶ峯は左に流れてゐる。アヲモリドマツの根がたに休んで、クロソヨゴの實をつんだり、ミヤマザクラの實をたべたりする。フウリンツ、ジが頭の上に枝を出してゐる。案内はイハナシの實をたべさしてくれる。

すでにして幾抱へもあるシラカンバの倒れて、路を塞ぐにあふ。このカンバの太木の節くれだちて、鬼の面の如く見へたるより、これを鬼面カンバといひ、この澤を鬼面澤といつた。それが大正六年のながせに倒れて、かうなつたのだとか。ながせが來れば荒れると、土地の人のいふのは、東北風で、物の本にあるながせと、少しは違ふかも知れぬ。

私どもはゴゼンタチバナや、シラタマノキの生ふる地を通り、地獄澤へおちる赤水澤をよぎつた。このあたり、道は五萬分の一の地圖と少しく違つてゐるやうに思へた。八時廿分、赤水澤の上、ガン

カウランの菌に腰うちかけて見る横岳は大きい。黒森と板留の二つ森とが西にうすく見える。シロバナノコメツバシさをあとにすれば、岩清水、八時四十分。そこにて少し休む。こゝから梯子登りとして、雨ふらば水の路なるべき木の下路をゆく。なる口の案内は、エンレイサウの實を酒の香がすると食べる。この路には、處々アブが群がつて、岩間に死んでゐる。それが二三ヶ所にとゞまらぬは、何か蠅、蛇の類を毒するものがあるのらしい。

オンコあり、ハヒマツありて、梯子のぼりも終つた。九時四十分、ながめはまた廣くなつた。腰掛岩といふに身をよせると、石倉の方が見える。硫黄岳といふは、もとよりの名ならず、石倉の一峯であつたのを、陸地測量部の人々についた人夫が、山をよく知らずに、硫黄澤の上ゆゑ硫黄岳だといつたのだと、案内はいふ。樂な路を進めば、鏡沼といふに小さい池があり、水浅き所、杖のさきにて驚かせばサンセウウツが逃げてゆく。そこを過ぎると、小さな社があつて、イハギキヤウの紫が、風と戯れてゐた。九時五十分、大岳の三角點、こゝが此の群山の最高點である。小岳は低く、高田大岳高く、雖岳も彼方に靡いてゐた。私どもはこれまでも休むたびに、K氏のドロップスを御馳走になつてゐたが、こゝでもそれを口に入れながら、K氏が往かうといつてくれるまゝに、正面に聳ゆる井戸岳、赤倉岳の方へと進むことにした。

案内がハヒマツの中を漕いでゆくの、私も續いた。そしてミヤマキンバウゲや、キンバイサウの花の上を、仙人の窟といふのへ滑りおりた。そこにはムシトリスミレ生じ、ヒナザクラ白く、イハイテフが亂れさいてゐた。岩につままれて一方だけあいてゐる窪地、私は花の多いのにとりしした。しばらくにして雪の溪をおりてゆく。可なりな雪溪で、下までゆく中に、足がつめたくなる。二十二年、山にのぼるといふ案内は、笛を吹きながら、雪溪の上をおりる。K氏が其節を、ねぶたの囃しの節だと教へてくれる。里ではどう聞へるか知らぬが、山に包まれては音があもしろい。空を雲がゆく、

雲の影が雪溪の上を走る。影のあゆみ速かにして、雪溪の明るさは、煙のやうに奪はれてゆく。この雪溪を南部七の戸邊より見れば、残雪が駒の形をなす。その駒が夏に消えずして、一年、二年、三年と三歳駒に長ずれば、饑饉きたるといはれてゐる。雪溪の大きくなりてゆくのは、寒氣をしめすからの觀察であらう。南部では之を駒ヶ岳と呼ぶさうだ。

十時四十分、雪溪を降りて、氷の水を涉つた彼方の平、チングルマとヒナザクラとがさゝやきかはしてをる上で、食事をする。案内は花の上に、いびきを立てて寝てしまふ。日は照つたり、かげつたりする。

十一時すぎ、さきの雪溪をのぼりゆけば、後方にまた他の雪溪が望まれる。岩根にはミヤマヲダマキの紫うるはしく、イハウメもちどまつてゐる。ムシトリスミレに心してゆくに、雲の脚が早い。ウサギの體が、ミネズワウに囲まれたまゝ、苔をいたゞいてゐる。タカにとられたウサギのはてなのか。山の高みにも殺戮のあるのがわびしい。霧がさきほどからかゝつて來た。東風と南風と相争うて、大岳の北側、蛸坊主とて山の骨の露れたるあたりで衝突する。それを見ながら井戸岳にいたれば、雪を藏めたる圓き火口が、わが足下より地心へと裂けてゐる。あたりの赤き岩をとりあぐるに、鐵の塊のごとく重い。井戸岳の火口の東側をまはつて、赤倉へとゆく。しばしにして穩かな傾斜を右に連れて、赤倉沼へと下る。十二時五分。まつまに霧のベールが晴れて、沼が其の面をあらはす。水は清い。エゾシホガマの白い花の上に身を置き、湖に對してしばしは思ふ事もない。また登つて十二時半、赤倉の火口、赤き、黒き、色さまゝな熔岩のすさまじさ見んとて、半時間も休む。雲來り、雲去りて、恐しい火口を少しは見せる。火口の下は田代、雪中の行軍に、若く壯んな人々の斃れたあとがしのばれる。アカトンボが亂れ飛ぶ。

今度はハヒマツの中を道なき方へ下りつ、のぼりつして、井戸岳の火口の北西部をめぐる。ミヤマ

ザクラのたけ一尺ばかりなのが、岩にしがみついてゐた。チングルマや、ガンカウランの上を、幾度か滑りゐりて、水のいづべき谷地で一休みする。スギゴケが氈をしいたやうに生えてゐる。ウサギの遊ぶ所と見えて、その残したものが多し。

大岳を裏から登る。蛸坊主としてから、ミネズワウなどの上をすべらじと往くのが苦しい。いきが切れる。頂き近くまで登つて、地上に身をよこたへる。動悸はなか／＼やまぬ。霧が迷うてゐる。タカが私のをる上をよこぎつて、硫黄岳の方へと飛ぶ。山にすむマミヤ、テンの話が、案内の口からもれる。二時四十分、小雨が降つてきた。降られてはと急いで、大嶽をおりる。さきにとつた道、梯子のぼりをおりて、三時十五分、岩清水。四時には酸湯へかへるを得た。往復九時間。もし他日、道が酸湯から大岳の西側、井戸岳にちかき方に開けたなら、傾斜もゆるやかゆゑ、この山はもつと樂に登られよう。かへつてからMさんに、おばあさんの多年の丹誠になる数々の腊葉を見せてもらう。郡場ふみ採集としてある。おばあさんは今年六十九歳、もう山へゆかれなはいといふ。土地の人々は、おばあさんが郡場博士を養成したのだといつてをる。案ずるに、なきフオーリーさんが青森その他で植物を採集しはじめたのは、明治十八年。二十年の八月には、八甲田にはひつてゐた。自然が人をまねき、人は人にさまされる。

夕食後、Mさんたちに導かれて、K氏及び黒石の人のあとにきた畫家と井戸湯の谷地から、井戸湯へゆき、それから地獄沼の下流をさかのぼつて歸つた。井戸湯の谷地には、ツルコケモ、が繁茂してゐた。井戸湯は深い穴から、熱湯が湧き出てゐた。Mさんはこゝには傳説があるとして話してくれた。いつの頃か、酸湯に湯治にきてゐた南部女が、湯の宿のつれ／＼に、津輕男と親しくなつた。そして親兄弟をすて、山を降り、津輕男の家にゆけば、男には妻もあり、子もあつた。南部女は今さら故郷へも歸りかねて、再びこの山間に迷ひきたり、井戸湯に投じて死んだ。さる事ありとも知らで、後に人が

きたれば、この湯には長い髪の毛が亂れてゐた。(體は焼けたゞれたといふのであらうか。」「わきもこが寝くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るを悲しき」やうの話。その後も、この小い熱池を竿もて彼方に飛びこえんとした男が、あやまつて池におちて死んだといふやうな事をも、Mさんは語つた。夕闇のせまる中で、私はそれを聞いてゐた。

こなたへと導かれて、地獄澤の下流をさかのぼるのは、足ごしらへのしてない私に、やゝ難儀であつた。足下はもう暗くなつてゐた。やうやく道に出た。地獄湯のあたり、夜目に岩は白雪の如くかゞやいてゐた。高みにのぼる。三日月が細く空に浮ぶ。夜風が寒い。

石 倉 か け て 鳶 へ

四日の朝、六時五十分、鳶へと志して酸湯をたつ。K氏も同行せられ、昨日の鹿内氏も荷をかうてゆく。地獄沼の少しさきの澤にかけた橋は、半ばおちたれど、廣い、よい道、ネマガリ竹を切りひらいてある。道のべにミヅバセヲが青々としてゐる。石倉へ少しは登るつもりでゐたので、左手の登山路からネマガリダケを分ける。今年はまだ登つた人もないかと思はれる竹の生えよう。その竹を案内は切り開いたり、さを結んだりして道をつけてくれる。足場のわるいのに関口しながら、うつむいてゆくと、突元として、そゝり立つ岩石、それを左にからんで、まだ登る。少しは危い所もあつて、岩を一めぐりすれば、溪は足下にひらけて、樹樹美しく、かなたの雲の上に岩木山が浮んでゐた。わがよる所の奇なるに加へて、危くも、美しき景であつた。冬ならぬ今は、綱なくては此の上登りにくいか。岩のぼりの練習には、よい所であらう。

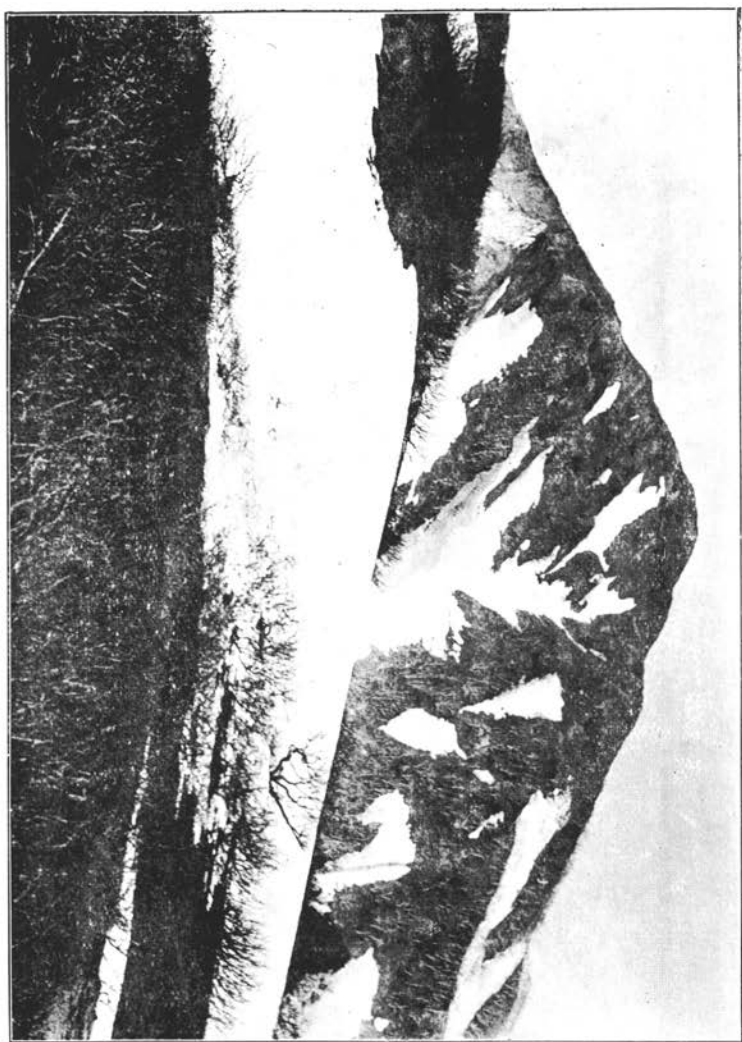
石倉をおりた私どもは、まもなく郡の界、津輕と南部との界に出た。南部になると、道が細くなる。その道を少し横にそれて谷地に入ると、スキレン生ふる静かな沼。もう十時近くなのに、このヒツジグサは、おほかたまだ朝寝をしてゐた。沼にはキモリが泳いてゐた。浮島もあつた。あたりにはヒ

メシクナゲや、ツルコケモ、が茂り、ヒメユリに似たユリが、朱の冠をつけてゐた。その沼の景を守るが如く、高田大岳がどつしりと、晴れた空に聳えてゐる。のどけき天地、この谷地と、この沼と、こゝに生ふるたふとい植物とが、いつまでも變らであれと、私は願つた。

十時四十分、猿倉温泉への岐路で、案内は蔦からの人夫とかはる積りで、しばらくまつ。ラッパを吹いて合圖をしてゐた案内は、やゝじれたらしい。むかうが來ないので、本道をゆく。やがて蔦からの一行にあうたけれど、人夫は十和田から淺蟲みせるとして連れてきたもの、蔦のは居らぬ。たゞ酸湯から迎へにいつたが一人。その若い男とて今更蔦へ引返したがない。それで談合してゐたが、若い男は増賃をえて、蔦までゆく事になる。すぐかへるのでは疲れように、K氏も親切から蔦まで往つて下さるといふ。新しい人夫が早く酸湯へかへれるやうに、今度は急ぐ。それでも人夫は川を涉つて谷地の温泉へよつてくれたりした。谷地は寂しい湯宿ながら、猿倉のやうに人のをらぬのでない。汗をふき、芝生の牧を下り氣味にゆけば、野飼の南部馬があわてゝ逃げはしる。

林の中を右へと折れて、蔦川の川べにあり。橋が流れたまゝなので、少し下手を徒渉する。わたりをへて十二時四十分、右岸に休んで中食をたべる。それから近道だといふ林間の徑をのぼりつ、降りつするほどに、かなり大きな沼があらはれる。蔦沼である。蔦の十湖の中最も大なるもの、沼の水は波をもあげず、マスをすませてゐる。そのマスを取る長いササが、沼尻に横にたてかけてあつた。沼をめぐれば、もう蔦湯、一時少しまはつたに過ぎなかつた。K氏と人夫とは湯にも入らで、歸つてゆく。

蔦の湯は下まで透きとほつて、綺麗であつた。鹽類泉とか。私のいつた時には、湯治客も少かつた。そして設備も、酸湯より里近い様子であつた。酸湯の二夜は眠れなかつたから、この夜は眠られさうなものと思つたが、やはりこゝでも眠れなかつた。



影撮氏耶次松 冠

山打火るた見りよ部鞍のと山焼

十 和 田 へ

五日。昨夜は星が出てゐたのに、今日は曇り日。朝六時半、荷背負を頼んで、焼山へ向ふ。東京の寫眞屋さんが歸るので、行をともしにする。巨木の下をよい道が通つてゐる。鳶川にかけた昇天橋わたるころには、細い雨がしづかに降つてきた。風は東らしい。霧が山を掠める。道のほとりの風穴をのぞきこむと、つめたい風が頬をなでる。「かへで岩」高く立てど、立田の瀧は水量が多からぬ。川水は濁つてゐた。雨衣をきなかつたので、焼山についたころには、大分ぬれてゐた。雨はやみさうもなかつた。十和田の方は雲に包まれてゐた。

茶屋について自動車をまつ。その人が電話をかけたりしてゐるが、よく分らない。その中、子の口から三臺、自動車が來た。二臺は三本木へゆき、一臺は子の口にかへるのだといふから、乗られるのかと思うてゐたら、その一臺も寫眞屋さんをのせて三本木の方へいつてしまふ。寫眞屋さんが三本木からの自動車にあふ所までいつてかへればよいといふのに従つたのであらう。一人になつてまつうちに、三本木方面からの自動車が來た。それに乗つてゆく。茶屋店で物を買つてゐた浴衣がけの男も、乗つてゆく。それは馬門マカドの茶屋の人だといふ事であつた。雨が小やみになつた。濁水を流しこむ黄瀬川ワラセとの合流點をすぐれば、奥入瀬川オイラセの水は清い。

鬼神のお松の窟いはやだといふ所へゆくと、運轉手はありて御覽なさいと、お客を案内して川原近い方へいつて説明する。板のやうな巨岩が、大木に支へられてゐる。雨やどりは出來よう。こゝを石げといふ。「げ」とは山小舎をさすとか、酸湯ソウの城が倉クラにも。同じ名の窟があるから、お松はこの邊でつたへの女主人公になつてをるのであらう。

その中にあとから空の自動車が來た。まへに子の口へ歸らうとした自動車ださうだ。そして私は自分の方の客だから、こちらへ乗りかへてくれと、馬門の主人といふのに言はせる。私の乗つたのは「常

磐」といふので「世界」といふのに乗るべきだとか。常磐では客をゆづれないといふ。この自動車は一里五十錢ほどの定めだといふに、その三倍をはらうて、車をおり、世界といふのにのりかへる。その方ではたゞで私をのせて、出る所へ出て、不當を責めるのだといふ。たゞも乗れないから、そこらへは心づけをしたけれど、そんな事で、奥入瀬の流に接する心もちも、大部亂された。乗りかへぬ前から焼山からの自動車賃をいくらとさいても、運轉手も馬門の主人も、符牒で相談してゐて答へなかつた、賃錢はその時の心もちにでもよるのかも知れない。明治十六年に十和四遊記をかけた樋口倉静氏をして、今にあらしめば、どんな念をせらるゝであらう。

屏風岩、馬門岩、雲井の瀧、銚子の瀧、溪の流とうるはしい闊葉樹の林とをあわたゞしくも過ぎて、子の口の宿につく。まだ十時だのに、そこで和井内鯨での晝食をするやうになり、「世界」の人のみちびくまゝに、その方の舟にのる。石油發動機の小さい船、三四人の相客が私をまづてゐた。雲が破れて、日が照つてきた。船が進めば景もひろくなる。水の色濃さがいかにもよかつた。黒瀬川のやうな藍色は、何をかたるのか。水鳥が白き翼をのして低く飛ぶ。

御倉半島をめぐつて中湖に入れば、千丈幕は何といつても立派であつた。岩の大なるは立ち、小なるは躍る。その危げな中に、木々は己の所を得てをる。緑がうるはしい。遊覧船の事とて、船は迂路をとり、岸にそうてゆく。中湖の奥ふかく入る時は、さまでならねど、湖心にいづれば、船が浪に弄ばれる。今は何ならぬやうになつた此の船行に趣きあれよとか、風が出た。浪の花が船に入る。船中の人は時からだ浮かすやうになつたりした。さきに多かつた他の遊覧船も、もうゐなくなつた。

休屋半島をめぐつて、船は事なく休屋についた。十二時である。瀧澤へ出ないまでも、發荷へいつて、養魚場をみ、めぐり十三里の此の湖に、稚魚を放つて、明治十七年來苦心した人の志のあとをし

のびたかつたが、酸湯以來の睡眠不足で、それもものうい。それで境幽なる社にのぼり、さらに占場うらなばの方にあり、とつてかへして、火の神、風の神、などいふに、岩窟禮拜のさまを見、恵比須島によりて、休屋にかへれば、さきにきいた時間に舟は出ない。むなくまつて、三時半ごろ、今度は灣に入らで子の口へ直航する船にのる。乗客も大分多く、浪もさきよりは低かつた。同乗の女連は、風流な人たちなのか、聲をそろへて、歌をうたうた。湖上でさくのは、これもあしからぬ。子の口に近づいたころ、空がまたかはつた。雨がさつと降つてきた。歌の主たちは、上衣をまとふに忙しい。浪もたつ。

岸につけば雨は本降ほんふり。自動車がすぐ出るといふ。雨衣を出すまでもなく、その一臺にのれば、車は走る。乍らにして急雨。山の雨のすさまじさよ。道は水に没したらしい降り道を速力はやき自動車のゆく事として、車輪の轉ずる所濁水まきあがる。風つよく、雨聲はげしく、肩をならべた人の話も、時にきゝとれねど、まるで活動寫真だといつてをるらしい。しぶきに體はぬれる。車はよほどの速力で、急雨の境をぬけた。いとはしい記憶の馬門、焼山など、どこにも停まらうとしなかつた。その焼山にくると、小雨になつた。凡なりといふ奥入瀬の下流も、所在の村落も、私にわるくなかつた。こちらは雨も降らなかつたのか、地が乾いてゐた。

三本木についたら、自動車に同乗してゐた盛岡の客人たちは、船賃を私より餘計に請求せられた。その人は私のをきいたので、不當を詰つたが、取る方では何とかいつて取つてしまつた。三本木からは小さい汽車。それを古間木で青森行にのりかへ、九時になつて野邊地でやうやく辨當をたべ、十時に浦町でありて〇家へ。この夜は眠れた。

野内から淺蟲へ

六日。若い人たちが朝から遊びにきた。此の間からのたゞりか、少し氣分が悪い。夕方〇さんにつ

れられ、四人ほどで汽車で野内^{ノナイ}へゆき、そこから海ぞへの街道をあるく。石油^{タンク}のあるあたり、青森灣の波おだやかにして、北海道の方は薄霞んでゐる。道のべのハマナスの紅の花がうつくしい。道を横ぎつて、ケーブルが山から里へと鑛物をはこんでゐる。久栗坂^{ククリ}といふ部落は、北海道に漁場もつ人たちの多い所、この子どもは皆眼鼻立がよいとOさんがいふ。左にをれると、岩にかこまれた立派な寺がある。その背後、潮の満干^{みちの}をはかる建物のわきの岩の上、波のひた／＼する所で、夕の食事をとる、夕日が眞紅に燃えて、みる／＼沈んでゆく。里近い所としては、立派な景よと、奇岩をながめる。

部落をすぎ、また見あげるやうな斷崖を右に、海を左にして、もう暗くなつた道をゆく。淺蟲の燈火がまたゝいてゐる。淺蟲に入りて、仙波館で一泊する。海に面したよい宿であるが、絃歌の聲がきこえる。Oさんが派手な所へつれてきたものよと思ひながら、私は六日の月をながめてゐた、もうかへらうとすると、湯殿のそばで、花やかな長繻絆^{ナガヌハ}きて、化粧をしてゐるものがある。女性ではない。青森のねぶたに出るのださうな。さういふ人々と同じ列車にのつて歸れば、私には分らぬ懸聲^{ケンセイ}して、町は賑うてゐた。

弘 前 へ

七日。朝九時、Oさんにつられて弘前へとゆく。青森驛でH氏や、Y氏の大館へゆくのにあふ。車すゝみてY氏のさす方に、志す山と弘前の教會とが見えた。みちびかれるまゝの人力車が、弘前の教會の近くを通るので、私は去りにし師をしのぶと、構内について、碑を仰いだ、大きなねぶたにも、幾つかあつた。このは青森のより武張つてをるらしい。車は公園へとゆく。老杉古松、かう／＼しい。本丸には藩祖の銅像がすつくと立ち、岩木山がほんとに津輕不二の姿をしめしてゐた。陸奥のはてに此のかまへ。爲信、基をすゑ、信政、地を拓き、信明、後をよくした。「玉話集」には、信政の

生れたをり、白雲、岩木山より飛び來つて、産所をおほひ、硫黄の香がした、岩木山の神靈いでて、此の君とあらはれたのである。すれば逝きてのちまた彼の山に高照神社と納まつたと、宗教的のつたへが記してある。明君いづれば、これを山靈と結ぶ。しか結ぶほど、津輕の人と此の山とは、相呼び、相應へてをるのである。

在府町のこゝ家に迎へられ、手あついてもてなしを其のまゝ受けて、靜かに庭をみる。林泉趣きあり、たゞの庭でないらしい。私は弘前に入つてから、故國喬木多しといふやうな、落ちついた感じに包まれてゐた。

嶽 へ

八日。朝、八時廿分、○氏と家をいでたつ。Kといふ若者が荷を背負うてくれる。町はづれにゆいて馬車にのる。賀田もすぎて、宮地あたりよりやや登り氣味に、馬車はゆく。新法師すぎて、高岡への別れ路のかなた、高照神社とあるこそ、「玉話集」の主人公の祀られある所であらう。つかれて捗取らぬ馬のあゆみではあつたが、私どもを百澤につれていつてくれた。

石壘を北へと登りゆけば、岩木山神社。田村麿は奥羽のヒーローとてか、この社も將軍にちなみて延暦のころより祭られたと稱せられる。今の社殿その他は、津輕家代々の造營にかゝる。○さんは其の道の人とて、建築物をみてをられた。私は樹齡およそ千二百年とある社頭の大杉をみまもる。こゝも以前は百澤寺とて、眞言の寺であつたさうな。社務所にゆきて宮司にあひ、縁起やうの印刷物をもらう。それには國安珠姫神が、音の上から安壽姫に附會せられたのだと書いてあつた。さるにても東遊記などにある岩木山の安壽姫、丹後の人を思むといふつたへは、どうしてあゝ津輕人の心に深くはひつてゐたのであらう。

十一時半ちかく、社務所を辭して、嶽溫泉への道を進む。裾野長うして、木かげなく、ほこり立ち

舞ふ。追風少しあれど、いかにも熱い。キイチゴ少からねば、時につんでは食べる。南の連山をみわたす眺めは、おだやかであつた。岩木山には時に薄雲がかゝつたりした。藁はなけれど、冷水水の湧きいづる道のべで、一時すぎに辨當をつかひ、汗をふく。さらにも一度イェドリにおほはれてゐる澤に休みて、嶽についたら二時過ぎ。湯治客多きまゝ、そこへ聞いて、岩木館といふに室を都合してもらふ。まづ湯に入る。硫黄泉、かたの如くの山の湯である。宿でOさんの友人のSさんが飲ませて下すつたカルピスは、所がらとて上なくうまかつた。この湯宿は十二軒、これよりますを許さぬ定だといふ事も、その人から聞いた。

夕方、Sさんたちの案内で、十數町はなれた湯段にゆく。こゝは嶽より地やゝ低けれど、野趣はさらに深からう。藤田氏の農場をみにいつた同行の若者も、かへつてきた。夕、山は曇つてゐた。夜はまた眠られない。一時ごろ戸じまりなき戸外に出づれば、星屑が天にみちてゐた。

岩 木 山

九日。昨夜ほどならねど、空は晴れてゐる。したくを濟せて、七時、嶽を出る。一行三人、誰もこの路を知らぬのだ。宿の人は、路をよく教へてくれたけれど、私には飲みこめぬ。Oさんは心得てさきに立つ。湯の樋にそうて登りゆく。七時四十分、湯の澤の川原につく。湯の澤の火口のあとあたりでか、少し右へのぼりすぎたが、Oさんの判断で、左へ、澤の中に路を得て、ネマガリダケをくぐりゆく。時に景のひらけたる所にやすらへば、下方に嶽や、湯段や、新な農場が見わたされる。九時半ごろまで、竹のもとをわけけるのも、あらかた終つた。それとともに溪間の水にも別れた。

ちよつとした平がある、ハンノキか何か生えてゐた。誰しも休みさうな地點である。そこから山路は、また少し急になる。今度は竹ならで、草をわけてゆく。ナ、カマドが時に見える。もう尾根に出てゐるのだ。北の海が見える。鰯が澤の方面のうちひらいてゐるのを、Oさんは夜見の濱のやう

だといふ。なるほど、あの山陰の長汀をうつしたやうに、長い濱がみどりなしてつらなつてゐる。

つひに岩根こゞしき鳥海山。鳥の海の爆裂火口は、ありし日のすさまじさを語つてゐる。金倉といふは巨岩のわれたるもの、風穴とは岩のさけめである。さらに東北へとのぼつて、十一時廿分、最高點岩木山につく。雪がなく、山が乾いてゐるせいもあらうが、植物の美しさは、この山に缺けてゐる。されど群をはなれた孤山とて、景はひろい。あたりの山々ははるかに低く、田野下にひらけ、海波かなたに浮ぶ。この日、青森の方は雲に遮られて定かならず、弘前の方よりも霧が舞ひ上つてきた。一年おきに建てかへるといふ小さき社のわきに、雨風をしのぐに足る室がある。岩によれるその一つに坐して食事をする。嶽の宿でくれたサイダーがうまかつた。

しばししてから、おみ坂降つて下山の途につく。種蒔苗代をすぎて下れば、ほどなく錫杖清水。その名からして行者にゆかりのあるもの、湧泉傳説がついてゐるのであらう。つめたい水に頭をあらひてのち、大澤の溪間に入る。水に洗はれる石をつたひゆくに、さきの清水の流れながら、末はぬるい。石の間にウコンウツギかとおもはるゝものを見て、澤をのがれ出る。臺地に大きな道しるべが立つてゐる。こゝから頂きまで十五町とかあるを、そんなに短くないなど言ひなだら、もう樂になつた道にくだる。

中津輕をみおろす景がよい。百澤は眼下にある。ヤナギランさく高原をずん／＼ゆく。キイチゴをとりながら、私はおりた。左へあり氣味に、小さい澤をこすと、草刈が臺地ではたらいてゐる。芝生に櫻もうち多てある。さらに木立の中にはひつて、樋をつたふ水の流るゝに、汗をぬぐふ。つひに昨日の社のわきに出た。もう三時半近くなつてゐた。馬車は四時半に出るといふ。まつよりも歩かうと、〇さんがいふまゝ、立派な並木のもとをゆく。道がよいので歩みも進む。しかし荷をせおうてくれる若者は、おくれがちになる。宮地まで来て、戻りの空馬車あるまゝ、乗らうとするに、若者はいつまで

も来ない。○さんがとつてかへして搜すと、若者は氣分が悪くなつたさうで、百澤からの馬車にのつてきた。それを迎へて、こちらも頼んだ馬車にのる。西へくとゆく私どもを、岩木山は晴々した姿で、どこまでも送つてくれた。

六時在府町にかへつて、お湯に入る。すが／＼しい。夜、I君とかたる。

歸途

十日。朝、I氏が訪はれる。三十何年にして、はからず舊知に會したのである。あつくならぬ中にと、○家を辭し、大圓寺の五重の塔を教へられて、停車場へ。

青森にかへつて、その日の列車にのらうとすると、をかしい故障があつた。もう一夜、厄介になる事として、夜、教會にゆき、若き人の話をきく。

十一日の朝は、先年いつた合浦公園^{カッポ}にゆき、長く／＼浪をみてゐた。かへりの自動車がゆれるとて○さんが騒ぐ。

午後、おくられて常磐線まはりの急行にのるを得た。この行はめづらしくお天氣都合もよかつた。その上、○さんの介抱で、私のからだの工合もよかつた。青森灣の風光をおくり、陸奥灣をむかへ、夕に南部の片不二のほとりを過ぎて、私は疲れたからだを寢臺に横へた。(十三年)



冠松次郎氏撮影

藥師岳と眞川

雜 錄

○觀望臺としての荒船山及

其附近

信越本線の高崎本庄附近の車窓から見る時は、妙義の左に當つて、橋を失つた難破船が坐洲したやうな山形を示して居る荒船山は、昔から相當に名を知られては居たであらうが、妙義の繁昌に引きかへ訪ふものが少いやうである。この山を東西兩側から望むと多少異様の山形が人目を惹くことはあるが、一四二三米突といった僅の標高を有して上信國境の群山中に雜居し、其山頂が扁平であるから、南北の兩方面からは勿論、他の高山上から物色した場合にも見別けにくいばかりでなく、特に登山慾を挑發するやうな趣に乏しい。併し其絶頂に登つてみると觀望臺としては實に手頃の山であることを知つた。觀望臺といつても笹嶽から南アルプスを眺めたり（私は未だ經驗しない

が）立山から北アルプスを瞻くやうな譯のもではないが、手頃といふ取柄がある。

東京から比較的近距离にあつて、東側は上信電鐵の下仁田驛から山麓の砥澤近くまでは自働車を驅ることも出来る。西側は佐久鐵道の中込驛から内山村の奥まで馬車も通ひ、山麓から頂上まで登路一里前後で、西麓には荒船不動堂があつて頼めば泊めても呉れるし、近くに初谷シメヤの鑛泉もある。東麓には星生峠の直下に人家があつて番茶位は飲ましてくれやう。陸測五万分一圖の御代田、十石峠兩圖幅を披けば明かであるが、上信國境に沿ひ碓氷峠から十石峠までの間では、荒船山を凌ぐものは神流川左岸の赤久繩山位のもので、最高點の京塚山（内山村では劍ヶ峰と呼んで居る）に立てば、周圍の山よりはともかく棧敷が高い上に、南北十五六町、東西七八町もある、難破船の甲板とも見られる荒船原の南端に約百米突ばかり突起した最高點京塚山の小圓錐體が司令塔宜しくといつた調子に設けられてある。甲板上も司令塔の周圍にも矚目を邪魔するやうな立樹はなく、幅二三間

で南北に十五六間位延びた絶頂には短い萱芝や小灌木が疎生して居るのみで、腰をおろしたまゝで四望することが出来る。

仰山な登山仕度などを要する山でもなく、四季を通じて登ることも容易で、附近に黒瀧不動を始め、岩走る溪水、河鹿の聲、あちこちに仄立する奇抜な岩峰もある。ステッキ一本携へて出掛けてゆくのには適當な位置と高さとも山容である。

荒船山は全然原形を破壊され悉した舊火山であるといふ。學術的研究としては震災豫防調査會報告第十九號、或は餘程以前の地質學雜誌（之は私が一讀した記憶によるのであるが巻號數は今判然しない）に載つて居たと思ふ。

最も便利な登路は、荒船山の南肩を乗り越す上信國境の星生峠から登るもので、峠の頂上から右方によくふめた小徑がある。闊葉樹の中を十二三分も潜りゆくと左に廻つて荒船原の南端に出る。膝丈位の笹の中に半ば埋もれて、列を正した落葉松が植林してあるのみで、廣々した笹原の中には一團に餘る枯木の殘骸が其の儘に立姿を見せ

て居るものや、笹分くる大蛇が胴を迫り上げたやうに斜めに横倒れとなりて居るのを見ると、信濃寶記に記したやうに、昔は蒼々たる巨樹に満山を裏まれて黒み渡り、霧間に浮いて見える荒船と詠まれた程の姿もあつたらうが、今は北の端れまで一望の下に展びて居る其向うに立ち塞がるのは、いふまでもなく淺間山である。原から京塚山の頂邊まで一文字に登るのに造作はない。南側には岩幄の峻しい部分もあつて雜樹が絡みついて居る。山麓近くへ寄ると最高點は隠れて見えないが、内山峠の東側の中萱附近、西側は大月附近、南麓では星生峠中段にある桑畑まで来て初めて見え出し、峠の上からは全く眺望のない代りに京塚山だけが手近に仰がれる。

絶頂には建御名方を祀つた小さな石祠が鎮めてあるが、無慘にも今は倒壊した儘である。本來信州の宮で里宮は内山村相立に鎮座し、上州の荒船神社は西牧村市野萱にあつて共に郷社である。頂上の石祠に登拜する人は少いやうであるが、春の頃は尾澤村の青年などが酒を携へて遊山には出

掛けるさうである。

荒船原の西縁は何處からでも強いて茂みを掻き分ければ登ることも降ることも困難はないが、東縁は殆ど削り落した峭壁で殊に西牧川の溪に面した北側のものは頗る見事である。西牧村の相澤から登る山道もあるさうだが、私は踏んで見ないから委しいことを知らない。この方面には格好の面白い銚子瀧といふのがあつたといふが、何時の頃か領地争の果てに銚子の口を叩き壊して今は見る價值もないといふ。星生峠の登り口、星生の部落を出はづれた道の左に線ヶ瀧といふのが懸つて居る。名の通り一線に瀉下する高さ三四丈もあらうか。

京塚山の絶頂に腰を据えてぐるりと見廻すと、淺間の右に並んで草津白根から武尊や日光諸峰に及ぶ奥上州の山々が、舞臺から棧敷を眺めたやうに、尻と膝、肘と肘とを突き合せて窺窟さうにしかも落ちついた顔して重り合ひ、誰が誰やら容易に見定めもつかぬが、其數の少からぬのにはいつもながら呆れて仕まう。西牧川の溪谷の向側に碎

き損ねたやうな妙義山は金雞山の筆頭岩まで肉眼に映つる。一府五縣に亘る縹渺たる平野の果に筑波があるかなさかにうすれて見える。上武國境に群る秩父の山々の手前には近いだけに赤久繩が一際高いが、三國嶺の背後に奥秩父の諸山、五文石で名乗りあがる金峰山から東に國師三寶、破風雁坂、雲取から武甲山まで銘々數へるだけでもかなり暇がかゝる。富士が見えぬのは關東の眺望として點睛を缺くにも似て居やうが、八ッ岳の左に北嶽が雪のちらつく尖頭を覗かして居る。西方眼下に縱觀する内山溪谷の口を塞いで立科山が上田平まで長い裾を曳き、和田峠一脈の上には御嶽から白馬に連る北アルプスの雄物がずらりと並び、雪の煌き雲の色まですゞる天界の聖境を人間に暗示するかにも見える。

火山岩地の常としてこの附近には岩壁岩峰が甚だ多い。私は何故か峻しい岩壁を瞻上げたり、或は其上縁から那落の底でも探るやうに覗き込むのが好きなため、岩壁に會ふと無性に嬉しいが、ラスキンがアルプスで研究したやうな眞に直立した

百米突以上の滑かな岩壁が日本にあることを未だ聞かない。筑後久留米の東方にあつて、青山延壽に紹介された日向神岩の一部や、越中庄川の上流などに見るものがやゝ直立に近いものであらうかと思ふが、夫等とは趣を異にするが荒船附近の到る所の山頭溪間にも随分面白い岩壁がある。要するに妙義山の分家と見る位のものである。鍋川も格別の景を刻むに至らないし、下仁田で西牧川と南牧川とに岐れるが何れも流小さく水淺く、兩岸亦た平凡、齋藤竹堂が漢文一流の形容には大分欺かれる。黒瀧山不動寺だけは一游の値あるものともいへやうか。曾て不折畫伯が何やらに紹介されたのを讀んだ記憶はあるが何雜誌であつたか今思ひ出せない。蘇峰氏も百穂齋伯を随へて一二度游ばれたこともあるやに聞いて居る。下仁田驛から一里餘りの黒瀧の山村から阪路十六町も登ると、荒船山の支脈黒瀧山の中腹に、三個の巨巖を負ひて苔深い黄蘗宗の不動寺が、青葉に三方を圍まれ前に深い谷を見下しながら、物寂びた四五の堂宇を並べて居る。禪味は頽嵐を薫じて山寺の氣分は

充分である。こんな寺に一炷の香煙に三世を觀じて今日明日の生死を忘れ、非經濟非物質に生きて現代離のした和尚が箒片手に石垣の草でも筆つて居ると、人間の角突合ひにうんざりして我家をさへ逃げ出し、谷水を元手の汗を唯一の旅費として出掛ける私などが、拂ひ終うせぬ慾念の少し位は掃きとつて貰へやうが、寺格は高して檀家はなく寺領乏しく、什寶さへも多くは山門外に身賣したやうな財政難を聞かされると、人間の棲む所は矢張社會の一部だと覺るのも止むを得ない。唯だ硝子障子越しの谷向うに稻含山の秀でた峰影を睥めたり、庫裡前の窠から谷底にたぎり落つる清水を掬ふだけでも、武州御嶽山や、名栗の子、權現に比し、暑を避けて勉強でも仕やうとする人には、都近くて遙に山深い氣のすこ佳い處である。

黒瀧山から西へ小尾根一つ越して、上底瀬から下底瀬に下る峽路の東側に幕岩がある。砥澤から星生峠に至る途中星生の部當に負ひ被つて突起した立岩といふ岩峰が聳えて居る。更に砥澤から十町ばかり上流の羽澤で本街道から岐れ、田口峠に

向ふ間道の廣河原に達する手前に狹岩といふ岩壁があつて、小さな瀧が一條懸つて居る。狹岩は全然檜ノ原の神ノ戸岩式であつて、兩岩の間を割りぬける溪流上に頑丈な棧道が懸けてある。こゝに面白いことは、上信國境は、碓氷峠から三國峠まで、關東平野と千曲溪谷との分水線に沿ふて劃されて居るから、國境を横切る河流は殆どないが、この狹岩の間を流るゝ甘なし澤が唯だ一つある。國境線は荒船山の西南兜岩の東で柏木山といふ小峰から分水線を離れ、尾根に沿ふて東側に下り今井戸澤（天保六年森川保元の信濃國大繪圖には糸澤中央國境上野國にて出入澤といふと附記してあるが、田口村役場に從ふと之は誤りで、馬坂から星生に通ずる、點綴路のある小流が出入澤である）と呼ぶ小流に沿ひ馬坂まで下り、こゝから半里ばかりの間狹岩の溪流甘なし澤が國境となり、途中から小尾根を乗り越し、余地峠東側の溪流に沿ふて再び分水線まで這ひ上つて居るので、分水線の東側に在る廣河原馬坂の二部落だけを信州に抱へ込んで居ることである。しかも馬坂は國境線の眞上に

ある。溪流の右岸にある三軒は群馬縣北甘樂郡羽澤村字馬坂で、左岸にある六七軒は長野縣南佐久郡田口村字馬坂であるから、同じ馬坂の兒童でも右岸のものは下流羽澤の小学校に、左岸のものは上流狹岩の分教場に通學する。そして其通學路の一部が右岸を迫るから洪雨などで崩れても他縣の村に修繕して貰はねばならぬ。郵便は兩縣の馬坂に何れから集配するものか聞きもしたが、田口村では兩部落のために狹岩に分教場を設け、一人の老教師が休日の外は寢泊りして居る。この老教師月曜日には田口峠を越へて四里西の田野口の自宅を曉前に立ち、授業時刻までに駆けつけるといふ。暮れてからは人聲も聞こへず、水音が喧しくもありさみしくもありといふて居た。この國境の氣紛れ沙汰には往昔何か譯のあつたことであらうと想像し里人にも口碑の有無を尋ねて見た。上記の地圖と更に新しい長谷川雪堤の信濃國繪圖にも廣河原、馬坂を信州に加へて置いてこの邊國境知れずと添書きがあり、又た筆者年代未詳の上野十四郡惣村石寄鑑と題した地圖には、この位置に動

張（？）といふ一村が記してある。田口村役場に照會すると奇妙とは思ふて居るが理由不明と回答して居る。いらぬことだが今からでもこの二部落は群馬縣に轉籍をした方が双方に便利であらうと思はれる。

國境の序に荒船山の三角點は陸測圖では明かに上州西牧村に入れてある。併し明治十七年以前には全山が長野縣に屬して居たのが國境争を生じ、内務省地理局の臨檢を以て荒船山嶺の中央を東西に劃して境界線を定めた結果、絶頂の石祠も三角點も内山村に屬することとなり、國境線は其東方二間位の處を通過するものであるといふから荒船山は信州の山といふ譯である。

荒船山南側の中腹にイドムキ不動といふがあるが、平常は堂守も居ないし、わざ／＼立ち寄る程のものでもない。西麓の荒船不動は境地は頗る平凡であるが、内山村本宿の圓城寺に屬し俗に出世不動と呼ばれ、軍人の尊信厚く願果しの印に紙折の鶴が澤山垂してある。供養日には賽者境内に溢れると堂守は威張つて居る。不動堂と並んで庫裡

やうの大きな籠屋もあり、陋穢を免れないが仲々廣いやうである。この邊を岩狐といひ三四町下つて二三軒人家の散在するあたりを仿耕場といふとか。堂の階前から兜岩山の岩頭を正面に望む外眺望は全くない。由來信越線の開けない以前には西上州の山村へは總べて峠を越して信州から米麥を輸來したもので、澤山の峠路は割合に交通が繁く今日でも稻藁などは馬に負はせて峠越しに信州から上州に供給して居る。星生峠路は郡道であるが冬期雪に埋れると馬子達が道を掻き分けるといふ。荒船京塚山と兜岩山との間にある尖つた一峰の頂上に御嶽神社が祀られ、黒田に近い道傍の畑中に古びた木の華表が一見無意味に建つてある。

初谷の礦泉も農閑時には百五十人位の湯治客が滞在するといふが、この外には星生峠から中込町まで約四里の間に旅宿がないから、上州側の砥澤から登るのが最も便利である。こゝには山村屋外二軒程の宿屋があるが、養蠶時には客よりも蠶である觀あることを覺悟せねばならぬ。

格別價值もないことを長々と書き連ねたが序に

猶一つ荒船山西麓の孝勇傳を紹介して置く。荒船不動から一里程下つた初谷礦泉道との分岐點近くに縣道の北側、松林の中に海舟の筆で孝勇龜松之墓と大書した七尺ばかりの碑石が建てゝある。天明八年の秋、狼を殺して父を救ふた十一歳の勇童の事蹟を傳へるために有志が、明治三十四年に建てたもので、碑陰に刻した三島中洲の撰文を讀むよりも、次の代官下役の上申書が詳細を悉して居る。之は勇童の家に傳へて居る書附で内山村役場を煩はして其寫を得たものである。

私儀遠藤兵右衛門支配所代檢見被仰付、信州佐久郡廻村の節、同郡内山村百姓狼に被喰候處若干の悴、即座に狼を拘留、鎌にて殺候由去月廿八日野先にて承候に付、呼出し始未承候趣左に申上候。

遠藤兵右衛門支配所

信州佐久郡内山村

百姓惣右衛門悴

龜松 申十一歳

右村之儀、信州上州國境破風山（荒船山）の麓

にて、右惣右衛門儀高壹斗餘所持、家内五人暮、居宅より三町程隔り宇逢月（現今の太月部落）と申所、猪鹿防の番小屋へ去月廿五日夕方、悴龜松を連參、龜松は草を刈、右衛門は小屋にて火を焚き居候處、同人後の方より來、足へ喰付候を振返候處、唇より腮へ懸喰付候間、狼の耳を掴、聲を立て候に付龜松聞付駈參所持の鎌を狼の口へ入引候處、かつら際より嘴被折難用立、惣右衛門所持の鎌を龜松取揚、尙又狼の口へ柄の方を捻込後へ引倒、兩人にて押へ候へ共、惣右衛門は數ヶ所被喰候故働成兼、打倒候に付、狼起上り候を龜松石を以て、狼の口へ差入候鎌の柄を打込牙を折かさ候へとも、狼搔付相働候に付、龜松大指にて狼の兩眼を揉抜、打たゝき漸仕留候由。惣右衛門事所々被喰候へ共、炙所に無之故龜松介抱いたし宿へ連歸り、翌日より療治藥用等仕候處、追日快方の由申之候。龜松儀年齢より小柄虛弱と相見え、中々右體の働可致ものには相見え不申候間、驚退可致處親大事と存、若輩に不似合働仕候ものに付申上置候以上。

申十月

大貫治右衛門

右之通十月廿八日申上候處、左の通御書付を以て鳥居丹波守殿被仰渡候

元遠藤兵右衛門御代官所

信州佐久郡内山村

百姓惣右衛門倅

龜松

右龜松儀父惣右衛門狼に出合候節、相働狼を仕留、父を助候段、幼年にて寄特なる仕形に付、爲御褒美銀廿枚被下之右御書付並申上候書付寫遣し候。以上。

天明八申年十二月

大貫次右衛門

役 所 印

信州佐久郡内山村

百姓 龜松

名主 新右衛門
同 善左衛門

此外にも數通の書類が今も保存されて居る。そして勇童龜松は年々公儀へ御目見への爲め江戸へ參上したもので、其節には御用添觸といふ書面も

あつて、居村より板橋宿までの宿々で人馬入用の節は差支へなきやう取り計へと公儀から申渡されてあつたといふことであるから。當時随分世間を驚かしたものであつたらう。(吉岡八二郎)

孝勇傳及國境などに就いては内山村及田口村役場の好意に負ふ所が多い。附記して謝意を表す。

○丹澤山の近況と眺望

昨秋の關東大震災以後、丹澤山塊に脚を入れること數回に及び、溪流は神ノ川を除くの外主なもの全部を跋涉し、峠路は明神峠と犬越路以外、重要なものは悉く越えて見たが、山峯に至つては經ヶ岳と燒山連山を毘盧ヶ岳に傳つた外、これぞといふものへ登る機會がなかつた。然るに今更七月下旬、神奈川縣廳の主催によつて、縣下の代表青年十數名を引率して、丹澤山塊殊に東西兩丹澤を踏査する舉が行はれ、筆者もその一行に尾して丹澤山と塔ノ岳との頂上を極め、その際従前の觀察の不足を補ひ得たことは少くなかつた。殊に本誌第十五年第二號に掲げてある拙文中、更に訂正を

要する點を發見したので、近況を報ずると共に正誤を試みることにしよう。

神奈川縣の一行は、丹澤山頂に達するのが主要目的の一であつたので、秦野を出發して札掛に到り、此處に一泊の上翌日の行程を審議することゝした。出發の前、秦野の青年團が特に再三踏査した結果に基いて、左の三案が提出された。即ち一は札掛から木の俣大日を経由して直に塔ノ岳に達し、これから山脊を丹澤山に傳ふもの、第二は本谷を溯つて丹澤山に攀ち上るもの、第三は汐水によつて丹澤山に登るものであつた。そして下山路は塔ノ岳から尾根通り箒杉澤と金澤の合流點附近に下り、玄倉川上流に沿ふて諸士平に達する豫定であつたのである。

されば登路第一は塔ノ岳から丹澤山頂に往復する必要があるのと、今一つは途上眺望はよいが暑氣と渴とに苦められることは當然過ぎる程當然な道程であることの爲めに、第二又は第三案の何れかを選ぶ希望を有して居た。然るに札掛在住の土民中には、一行を弱蟲と見て取つたか、夫共山川

の峻嶮を誇りたい爲めか、汐水の登りは藪が猛烈に深く、本谷の溯行は危險が伴ふから思止まれとさへ勸告した者もあつたが、危險な箇所は僅か二三丁の長さに過ぎないことが判明したので、一行は第二案を採つて本谷によることゝ決定したのである。

札掛を出た一行は、西に金林の尾根に取付き、その東から北裏を横にからみ、荒橙尾、大洞、縁廻し等の上を通つて本谷の河原に下り、繭小屋を経て蜘蛛ヶ淵に出た。淵は岩石に埋まつて昔の面影はなく、只の河原となつて居る。これから路を右にとつて木裏澤を上りつめ、終に丹澤山頂に達したのであるが、その途中に鳥渡難場があつて、多大な時間を費してしまつたのである。

丹澤山の頂上は例の通り草原で、震害を蒙ることに甚だ軽く、これぞと言ふ龜裂さへ見當らない。然しそれ以外に、特筆す可き變化が起つて居る。それは本年六月に出來た一等三角測量櫓と、その周圍の樹木の伐採されたことである。その爲めに山頂の眺望は素晴しいもので、殊に櫓に登つて見

れば、四方目を遮るものは何もない。當日は雲霧多く、完全な眺観を擅にすることは出来なかつたが、晴れ間から奥秩父の山々さへ手にとるが如く望むことが出来た。

然し遠望よりも更に愉快に思はれたのは、焼山連山が目の下に見ゆることで、姫岳の南地藏澤の源頭あたりと思はれるあたり迄、例の防火線も明瞭に指摘される。ボツチあたりは鬼ヶ岩續きの陰となつてしまふが、最も愉快なのは、毘盧ヶ岳が不動ノ峯續きの彼方に、三角形の頭を顯すことである。

今迄丹澤山頂に立つて、これ程の眺望を得たことのない私は、この壯快な景に接して無上の嬉しさを感じた。それと共に、丹澤山頂から毘盧ヶ岳を望み得ることゝ、その逆に毘盧ヶ岳から丹澤山頂を望めることが確められたのは、特記する価値があり、そして本誌第十五年第二號六六頁に掲げた私の記事を訂正することが出来るのであるから甚だ以て欣びに堪えない次第である。

毘盧ヶ岳の頂上から東南を眺めると、右に遠く

塔ヶ岳とその北の一小峯が見え、正面には手近に鬼ヶ岳から不動ノ峯に續く山稜が立はだかつて居る。その左に見える一峯は概形丹澤山らしくはあるが、どうも不動ノ峯續きの様に思はれてならなかつたので、前記の記文中には、毘盧ヶ岳から丹澤山は見えないと斷言した次第。茲に謹んで前言を訂正して置く。

序を以て今少しこの附近の情況について記すことゝしよう。丹澤山から塔ヶ岳に到る山脊の路はスッダケの繁茂でいつも乍ら悩まされる所であるが、今度測量櫓建造の爲め、刈拂はれたり等して、大層歩きよくなつた。山腹には崩壊が大分出來たが、山稜は只一ヶ所崩れた丈で、通行は安全に出来る。従て舊の様に笹の中を泳ぐ必要もなく、左右の景や樹木を觀賞し乍ら樂々と往來することが出来るのは何より幸福である。

塔ヶ岳の頂上には無數の龜裂が出来た。それでも彼小石祠は無事で、その傍に三等三角測量櫓が出来て居る。然し尊佛の岩は谷間に墜落して、跡には小石佛一兩體が残るに過ぎない。それでもそ

の下の水は依然湧出して居るから、狭い乍らも野營地としての價值は十分にある。

塔ノ岳の頂上から大倉への路は、諸所崩壊して通交不可能といふことであるが、札掛か諸士平へは相當の路が出来て居る。尤も諸士平へは箒杉澤と金澤の合流點以下は、主として積を歩くのであるから、少くも鍋割澤の合流點迄は、路も不明瞭たるを免れない。

札掛には依然多數の民家があるから、何れかに頼めば一夜の泊りを乞ふことも容易である。諸士平には今は一軒も山師が居ず、家屋としては林野局の屋舎と、常夫の住ふ小屋が一二軒あるに過ぎない。この川筋では玄倉に下る迄、この他に民家は一戸もない。

その他の事は、本年三、四、五月發行の『科學知識』を見て頂けば、大抵な様子はわかることゝ考へる。

(武田久吉)

○黒部川瑣談

長次郎新道。去年迄何事もなかつた黒部川の下

流が、東洋アルミニウム會社から水力の權利を譲り受けた日本電力會社によつて、平の小舎から下へ測量の爲め歩道を計畫され、その路の案配を長次郎が主として擔當することになつた。私が曾て下廊下に入つた時には、平の小舎から川縁に出て水の中を汀に添ふて、左へ廻りながら下つて行つたのだが、今年は小舎の後へ路が出来て、二十間程行くと林叢の中に大きな天幕が二つ張られて、そこが日本電力の倉庫となつてゐた。路はやがて川へ降り、廣い河原の砂利洲の中を通してゐる。中ノ谷の手前から針の木岳の山足が川の近くで、少しばかり緩くなつてゐる處へ向つて、三十數間の長い釣橋が架けられた。之は中ノ谷の少し先へ行くと左岸に暫く壁が続いてゐる爲に、それを避けて後立山側へ道を選んだのであらう。針の木岳側の元ザクボ澤を横ぎり、小スバリ澤の押し出しを通つて行くと、今度は御山澤の對岸の大岩壁で行けなくなるので、四十數間の釣橋が右岸から御山澤の落口の左手に向けてかけられてある。橋を渡ると、御山澤の落口の少し上の丘に出る。そこ

には五つばかりの天然幕が張られて、流石無人の境も、四十八人以上の人夫や係員が宿泊して、この路を開鑿する爲の根據地となつた。これから内藏之助澤までは左岸がよいので、山側の草を薙り、木を拂つて、歩道がついてゐる。内藏之助澤手前の大岩壁の横上を爆破して道を造り、澤の入口の所まで道が出来てゐた。これから先が廊下へ入るので、岩壁が壯麗峻高になつて、崖側にはなだらかな所は殆どなく、爆破によつて路を開いて行くので、従つて容易に工事が進捗しなくなる。今年の六月の末から始めて、八月二十日頃に平から内藏之助澤の入口までは、崖側が好いので割合に早く出来たが、その先は廊下の壁づたいを行くので、私等が半日行程位しかかゝらなかつた廊下の架橋地點まで、約一ヶ月を費やして、九月の二十日頃に漸く出来たとのことである。氣候が寒いので今年はそこで中止してしまつた。

兎に角道の有難味は、私が大正九年に下廊下へ降りたときに平から御山澤まで二時間餘、御前澤まで一時間程かゝり、内藏之助澤の入口までは、

その入口の岩壁でロープを使つたので、三時間以上もかゝつた。今年は三時間かゝらずに、平から内藏之助澤の入口まで降ることが出来た。

廊下へ入ると、黒部別山の中央部の澤の二三町手前では左岸へのみ路を付けて行き、この澤の手前のトロの上手の所で後立山側へ釣橋をかけ、急壁を尾根に上り、地圖の西澤小澤の左岸の尾根の二〇六七、四米突の地點まで上り、それから棒小屋澤の落口に向つて尾根へ路をつけるのだが、これは恐らく來年の夏一杯はかゝると思はれる。黒部別山澤の手前も悪いし、その下手は尙更險惡なので、川通しは道を開くと云ふことが出来ない。大體私が先年長次郎と登つた道筋に添ふて道を開き、それから棒小屋澤の落口に向つて出てゐる尾根へ道を造り、それを降つて行く様になるらしい。

下の鐘釣から上は、東洋アルミニウム會社の歩道を修繕して、猿飛から樺平、シバミ坂——シアヒ谷——オリオ谷——石小屋乗越を通り、アヅハラの上の澤を登つて瀑の上で仙人澤を横ぎり、

奥仙人澤附近から東谷の方へ向つて釣橋をかけ、棒小屋澤までの道を完成したが、棒小屋澤の上手の絶險で先の見込がたゞず、棒小屋澤の小屋へ留守番を残して、人夫は皆仙人澤から立山へ出て御山澤を下り、上手の方へ引き上げられて、上流から漸次に棒小屋澤に向つて、前記の様な道を造ることゝなつたと云ふことである。

兎に角毎冬橋は落ち、棧道は壊れ、道は氷雪と共に崩れることの激甚なこの難場の路は、年々數十人の人夫を督して修繕にかゝらねばならないのであるから容易のこととなく、何時までそれが續いてやつて行けるか甚だ疑問である。道の出来る迄は當分御山澤を上り、立山から劍澤を下り、池の平を廻つて仙人澤を下ることになつてゐるが、やがて内藏之助澤を上り、内藏之助平からハシゴ澤の乗越を劍澤へ出て、仙人澤入の路をとることになるであらう。下廊下の道は一時は維持して行けるとしても、行く／＼は矢張りこの道を往來することになるであらうと思はれる。

今夏私等が長次郎を連れて行つたので、水力の

方では長次郎のゐない爲、路を開くのには無駄をしては又造りなほすことが多いので困ると云ふてゐた。山相を見ることに鋭敏である長次郎は、非常に重寶がられてゐることを知つた。

立山側から落ちる澤。立山本峯の側から黒部川へ落ち込む澤では、御山澤が一番長大で、優美である。全く瀑のないこの澤は、登降が頗る容易で、一の越からカールを降り切つて、突き當りの岩壁の下で、左へ廻つて行く一二町先が深い徒渉が一、二ヶ所ある丈で、その下は美しい楊や榛の木、白樺などの森の間を降つて行けば、黒部川への落口の數丁手前から谷幅は俄然廣闊になり、左岸の低い尾根の端の上から、灰白色に聳え立つたスバリの絶壁が見える。それから間もなく黒部川の渡に出られる。この澤の支流のタンボ澤も樂な澤で、途中澤を登る處が一ヶ所ある丈で、やがて廣々としたタンボのカールが見える。然しこの澤から雄山の三角點の臺へ登るのは、雪溪が細く急なので困難であるから、御前澤の方へ乗越すか、御山澤との間の尾根へとりついて行く方が樂であ

る。

御前澤は中々險惡な澤で、谷が狭く瀑が數段にかゝつてゐて、その最大なもの、へぶりか可なり困難らしい、御前澤と内藏之助澤との間に出て居る一九八一米突の丸い峯は、上から見るとさう立派にも見えないが、内藏之助澤に向つてゐる方は壯麗な巨大な岩壁續きで、御前澤の方の崖側も急峻な懸崖になつてゐる。御前澤はその源にサル又雪と云ふ、日本で最も廣大な雪の窟を持つてゐる著しい特長がある。

内藏之助澤は、内藏之助平迄二時間餘にして達せられる程短い澤で、その水上を黒部川の出合から仰ぐと、右岸の壯大な岩の櫓と左岸の大タテガヒンの大岩壁が聳立して、黒部川に向つて大きな窓を爲して、壯快なU字形の溪谷を形ち造つてゐる。この澤は暗い狭い澤だと想像してゐたが、反對に素的に明るい、幅の廣い澤であつて、期待してゐた長大な瀑は全くなく、大きな岩窟も見當らなかつた。内藏之助平から上のこの澤は至極樂であるが、登りつめて大汝に向つて行くカールは中

々登り惡くさうである。

黒部別山の中央部に落ちこ、寧ろ懸かつてゐる黒部別山澤は、登ることは無理であらうと思ふ。對岸への徒渉（後立山側から立山側へ）が既にむづかしく、雪の少ない時でも落口まで急峻な雪崖となつて黒部川に落ち込んでゐた。劔澤は今の處絶險で行けない處となつてゐるので、何れ一度は試みだけでもやつて見る積りであるが、こゝでは敬意を表して筆を擱くこととする。

それから序でだが、立山の別山乗越の東北にあたる別山側の平地、別山平（俗稱三田平）附近に、劔の小舎と云ふのが出來た。それは今年の六月に富山電氣局で建てたので、二間に三間位しかない小さなものであるから、夏の頻繁な登山客を容れるのには少し狹すぎる、然し春のスキ―登山者には頗る好適の足だまりとなることと思ふ。

立山川に沿ふて伊折の衆が立派な登拜道を出來してくれた。室堂乗越（地獄谷から立山川へ下る鞍部）から伊折までは中々の難道で、一日の行程としては水の大きい時は困難であつたが、道が出

來た爲、劔の小舎を朝七時頃發つて立山川を降り、バンバ島迄午後二時頃には出られる。伊折迄は午後五時前に着することが出来るやうになつた。私はこゝを降つたとき途中で四十人程の團體登山者に逢つた。今後は伊折の方面からこの登山路を登る人が追々殖えて來ることであらう。行くくは立山鐵道の上市驛から伊折迄自動車を運轉して、伊折では地獄谷の湯、或は仙人の湯を引いて、大きな溫泉場を建てる計畫を目論まんとしてゐる。この道は奥大日岳の氷雪の美觀と、劔岳早月川向の大尾根を仰ぎ見ることが出来るのみならず、立山川自身が中々雄大であり。雪溪も長大であるから、今後立山路として重要視せらるゝことであらう。(冠)

○ 雁 戸 山

嘗て本誌(十四年三號)の雜錄に私は「仙臺附近の山々」といふ一篇を載せた事があつたが、其中に南藏王の御前岳から縦走を始めて、雁戸山及び神室岳附近を探るつもりであつた所、人夫の病

氣から名號峯以北は中止した趣を記して置いた。其れから東京に居る事になつては、わざ／＼あの邊迄行く程の事は無い様な氣がして、誰もよく試る「行くまじき計畫」をさへ立てた事は無かつた。所が機會といふものは妙なもので、大正十一年の夏、飯豐の探勝を劃策して見ると、さア第一、其雄姿を手輕に行ける山地から心ゆく迄見てあこがれたい。地形圖を色々見て居ると、山麓や飯豐の支脈では惜しい。吾妻や磐梯ぢや位置が悪い。あゝでもない、かうでもない結局御馳染の藏王山、それに數年前其急峻さに強くも心惹かれた雁戸山を加へて、三四日の旅をしやうと決めてしまふ。で、今度は一切人夫無しで、私が案内を引受け、近頃油乘りのしてゐる岩永君を誘ひ、米一升二合、ビクニックブレッド三斤を主要食品として、出懸けたのは大正十一年六月二十九日の夜であつた。けれど、旅の結果は、山上では薄曇りが多く、僅か一四八五米の雁戸山丈に豫想外藪がひどくて半里と隔てぬ距離の所に貴重な二晩を費し、辛じて熊野岳南麓の新關溫泉跡に出た。次の日は嵐の

氣味で、曰く付の藏王越をする勇氣がない(少くとも私はさうであつた)。其處で大に目的に反した譯であるが、私達に取つては忘れられぬ苦行であつた記念と共に、「仙臺附近の山々」の後記として補ひたい爲に、拙筆を振ふ事とした。因に地形圖は五萬分一「山形」及「上ノ山」兩圖幅を參照せられたい。

廿九日午後八時上野發の急行は卅日の午前六時前に山形に着く。汽車中赤湯の手前で食堂から見えた飯豐の連山は夥しい殘雪を胸にかけて曉の西空を飾つてゐる。此方面からは大又澤に面した種蒔、飯豐本山、ノコギリメ(寶珠山)の一脈と其後方右に御西つゞきの羽越國境連山、及び杵差岳が覗いて居る。兎に角早く嶺に登り、飽く迄飯豐、朝日等の雪の山脈を眺めたい。さういふ心でせいた私達は、山形驛での上梅と辨當を買ふや否や、慌しく市外の小白川迄傳を走らせた。市中は櫻桃の熟頃であつた事も油賣りの種とはならないで。

小白川の天神様の前で山支度^{ヤマサツ}に身を固めた私達は、梅雨の氣の去りやらぬ笹谷街道を東に向つ

た。千歳山を背^しへにし、妙見寺、釋迦堂と通つて行くと、空は追々晴れて來る。そして此街道に古い石碑の多い事はどうだ。湯殿山、象頭山、馬頭觀音、天照皇大神、山神其他諸々の神佛供養塔が到る處に見られる。それも東北地方特有の大まかな巨石に彫つて、雜然と列べてある。小さな農家の山神迄、比較して可笑しい程大きい石燈籠などが立つてゐる。寶澤^{ホウザワ}への別れ道には刈田山の一の鳥居が建つてゐる。裏山道の入口だ。私達は其から左して、笹澤に廣い河原續きの長い橋を渡り、中程の雁戸山の一峯から延びて此の合流點に終つて居る可成銳角な側尾根を眺めて、雁戸山プロバの峻嶮さを想像する。其から先、街道は滑川、新山を過ぎて暫くすると山間^{ヤマノ}に入つた氣がし出す。關澤に來たのが九時二十分過で、初めは此處で何か不足の品物を買つたり、山の様子を聞いたりする筈であつたが、氣の利いた店も人間も見えず、其内にもう傾斜の増した其部落を通り越してしまつた。外れの大谷橋^{オホタニ}から雁戸山一峰の支脈が見える。(恐らく一三三七米峯の南方、一三八〇米の圍

を有するものであらう。次に桂澤橋といふのを渡り、草原から駄馬の見える本道は避けて、大分長い事近い間道を上つた。神室岳西南の高原性の山（二三四四米）の腹に地形圖にも示してある岩壁が見えたりした。午前十時頃、八合目と思ふあたりに、一つの廣い小屋があつて、其處で私達は休んだ。此邊は總て大きな木がない。なるい平は灌木の繁みと小さな沮洳地及び小流が交錯してゐるらしい。北國の氣分の勝つた峠山である、流の水を飲んで、小屋ノ澤橋を渡り、相變らず拔道ばかり進んで、十時二十分、九〇六米の地點附近に出た。笹谷峠の頂である。其處にどういふ人か知らないが、岡崎武七之墓と記した石碑が一基立つてゐる。道の上の岩の出た草地に腰を下ろして四邊を見乍ら中食の箸を取る。北方目前の一一四六米の山は急斜する草山で、其右に宮城縣側の秋保、川崎兩村界に當る神室岳（一三五三米）が高聳してゐる。其は右へ支脈が続いて、平野となり。松島灣となる。ずつと先の金華山、それから仙臺附近の太白山（ウドガモリ）のピラミッド型を望んで、

非常になつかしく思ふ。西側では朝日、飯豐のあたりはとくに雲中に没し、藏王山中一峯の瀧山（一三六四米）さへぼかされた。

十一時出發、有耶無耶關趾に向ふ。一三三七米の雁戸山最北峯から流れる小じんまりした裾野は、此附近だけ草地で、少し上からは全くもくもくと闊葉樹林のうごめきを感じる様なヤブだ。遠眼で美しかつたこの高原も、來て見るとこの様だ。關跡は荒廢に歸してゐる、寺の存否は確めなかつたが、可成以前に御本尊の十一面觀音は麓の笹谷に移してしまつたと云ふ。神佛が下界に下られて俗人が山に押しかける世の中だ、然し附近沿道には當時の盛況を忍ばしめる大石碑が少くない。先づ頭大の平石に湯殿山、□□十丁五年八月八日立と記したのがある。背後には姫小松が植ゑてある。それから高さ四尺ばかりの鉞を持つた佛がある。なほ先に高さ六尺、幅三尺程の南無阿彌陀佛と中央に彫つて、右手には百萬遍供養、之より笹谷二里、左手には北越吉田、◆能登屋七衛門と彫つた一基がある。又、正面に仙人大權現、東面に唐

松堂東推敬書、願主明海とした高さ八尺のものがあつた。「山形縣」の杭をうつた先には馬頭觀世音、文久二〇戌年五月、明海としたものと、石地藏一體がある。こんな調子で、其道の人々ならば充分參考になる遺物であらう。其内の仙人大權現の東側から、一三四四米の高原性山岳の頂が見え始めた。其山から流れる谷の内に、神室岳の直下に當つて顯著な一瀑布が見える。其谷は此邊侵蝕谷の典型的な相貌を呈して、豪壯といふにふさはしい。

道が國境を横切る附近で私達は丹念に切開（あはよくば小徑）を探した。一度は地形圖に現れてゐる東南の小徑を辿つて洞澤（カウ）に下り、其邊から峯へ踏跡はないかと動き廻つた。けれども矢張り絶望だ。止むなく元に戻つて正十二時頃、幾分踏んだらしい所を拾ひつゝ小蘆を分けて行くと、半町ばかり上に關の遺物らしい石を見た頃から、そろ／＼蘆が高まつて全然足許（もと）が暗くなつてしまつた。其處でもう搜索はあきらめて、左手の浅い洞澤（カウ）を上る事とする。其も初めは樂（たの）に歩けたが、直

きに樹の爲身體（からだ）がつかへる様になつて、其折々左右の蘆に上つてもがく。やがて其澤は全く通れぬ位細まつたので、右へ押し分けて、成るべくは、關澤から登る小徑の過る草地に出る方針を取る。幾つか浅い澤を行つては又右へ上へと蘆をこぐ。試みに高さ一間ばかりの木の股に上つて、揺れながら見上げると、密林の梢が邪魔して判然（はつきり）しないが、大して損もしてゐないらしい。自信を以て又押し登る。此蘆は灌木帯様の蘭葉樹林で、檜、樺、榎、ナナカマドの類が多數を占めてゐる。陣竹も多少ある。そして二時間もたつた頃、大分山腹を西へ廻りこんで、幾らか身體（からだ）の運びが容易になつた。南に巻いて行くと、果せる哉、草地が展開してゐる。二町も進まずに再び密林に突貫せざるを得ない其の狭い開地（あきち）も、私達の極度に伸縮した筋肉にとつて最大の救ひであつた。關澤方面の山や谷を見乍ら、森に包まれた澤を右にして行くと、蘆のと切れ目に所々準高山植物たるアカモノやイハウチハの葉を見る。段々風物が高山めいて來て、いさゝか山稜らしくなる。と、其處の高みが雁戸

山の第一峯（一三三七米）だつた。時に三時十五分。三時間餘も難行した所を振り返つて、我乍らうまく通つたものだと思ふと同時に、隙間もなくしきつめた藪の海を眺め下して、再び呆然とした。

第一の峯から次に一峯がある。其左手に鋭い最高峯が見え、未だ随分遠い事を豫期させられる。私達は南の鞍部迄痛い木を避けながらだら／＼と下りて、中食の後長い休息を取つた。此鞍部のみが雁戸山尾根中唯一の安息地であつた。藪も無し、平は廣し、若し其の所々濕つた黒土が暗示した如く、も少し時期が早くて残雪があつたなら、好箇の野陣場であつたらう。晝寢の後で私達は東北の方に漸く晴れた鳥海山を眺めやつて、自ら慰めた。既に四時半を過ぎた。水を求めて泊らなくてはならない。で同四十五分に立上つて、東面の澤を下つて行く。大分急だ。中々水が湧かない。四五十分の後、もう二三町で本谷に落込まうといふ所で泊る事とする。時に五時二十分。今度は荷になるので天幕を持参しなかつた爲、早速小屋掛

をする。大木がないので火を起すにも手間取つて、十時半に漸く寝る事が出来た。

次の朝は疲勞の爲寢過して、出懸けたのは午前八時四十五分になつた。昨日下りた通り登つて、九時五十分に鞍部に出る。十分の休憩。次の峯は陣竹が高々と茂つてゐるが、幸ひにして國境の切開が判然としてゐる。十時三十分嶺上に立つて、屏風岳、杉ヶ峯、刈田岳、五色岳、熊野岳、名號峯、地藏岳、三寶荒神山、瀧山等藏王の一群及び飯豊山塊を瀧山の左に、ずつと北寄りにはY字形の大雪溪を懸けた大朝日及び其一群と、饅頭形の優しい月山を眺めた。飯豊の雪の様は遠くてはつきりしない。中央分水嶺の藏王山群は流石雪が少かつたが、只杉ヶ峯の廣い雪田が特に眼に着いた。雁戸山の最高峯は北から見ると可成りうすつぺらで、前山の一隆起が特に登攀の困難を不安に豫感せしめる。

十時四十五分出發、下りに切開は分るが灌木の藪は勢力を増して来る。試鍊と負擔及び休養の條件が悪い上に、水分の欠乏を來して、大分こたへ

る。日頃猛勇の岩永君が具合悪くなつて來て、度々休息を要求する。鞍部に着いたのは十一時十分。其處で又十五分休んで、愈々最高峯の急な登りとなる。右側は急なナギで、前に刈田、五色、熊野、地藏、瀧山等の諸岳及び飯豊が遠く薄く見え、先に見た此の薄つぺらな急崖は、來て見ると手懸り足場は充分で、只、まづはる矮木を拂ひのけるのが厄介な丈であつた。途中一回休んで、十二時半、三角點の峯の下に出て休む。川崎村側の澤の源に當る所で、最高峯から東に伸びた尾根の北の窪地に残雪がある。ひからびつゝある身體には其白い輝きがたまらない。二十分後に出發して、猛烈な密林の内にもがき、午後一時十五分、漸く絶頂に達する事が出來た。

絶頂（一四八五米）は狭い方だが、三角點附近は流石打開けて、短い灌木の間に柔かい平らな草地もある。（偃松はどうも無いししかつた）中食と共に飯盒に詰めた水を飲む。其水のうまさ忘れられずと岩永君はいふ。前から曇つて來た空の明けるのを待たうと、ぐつたり寝をべつてゐると、霧

風が頻りに南から吹く。標石の上に、大正十一年五月十四日新山から登つて午後四時山頂に達したと附記した山形高校學生三輪信一氏及川村義雄氏の名刺がある。其頃ならば雪がおほつて可成行程が捗るだらう。私達は覺悟しながらも、矢張り「來るまじき旅」の上にあつたのだ。

空模様は埒が明かないので、二時十分に出發して南に下る。其尾根は藪が少く感じていい。尾根の右側の傾斜が一所兀げて土が出てゐるので、其上を走り下ると、熊の足跡が見付かつた。不意の侵入者に驚いて谷の方へ駆けて行つたものだらう。が、方向を誤まりはしなかつたかと恐れて、草に腰かけ、暫く馬鹿面して霧を睨んでゐたが、たう／＼霧れない。其處で附近の様子によつて見當を確めてから、すぐ下の鞍部迄下り、又藪の平尾根を登り出す。尾根らしくなつてから少し左へ廻りこみ、再び右廻りに第二高峯に近付く。此峯は最高峯に登る前に眺めたばかりだが、中々最高峯に劣らない位高い。そして絶頂近くなると、ちゞこまつた石南科の矮木の密叢が敷きつめてゐる。深

さは膝迄もないが、其が亦一方ならず抵抗した。午後を餘程廻つて藪に飽々した私には、此間が一番不快であり且困難であつた。午後四時五分、第二高點の絶頂に着く。其頂上は東面にかけて高い木の藪で、感じはよくない。少し晴れて來たので見ると、最高峯だけがつんと尖つて、熊のノタ場は赤く草緑の間に置かれた。

四時三十分出發。又霧が卷く。二十分後最後の高みを通して、愈々雁戸山南面の熔岩臺地(？)に下りかけると、切開はもうさつぱり分らない。少しばかりの針葉樹の間は一面に陣竹に埋められてはてしもない。身體は其中に忽ち隠れて行く。絶望だ。時刻が遅い。其處で餘り陣竹となじまぬ内に右に切れ、小さい薙を西に向つて下りた。澤になつてから段々と傾斜が増す様な氣がしたが、果然一(すなわ)の空瀧が現れる。右手の森林を卷いて其下に下り、しばらくすると、又、瀧だ。かういふ風に數回まごついて最後に二十尺許の空瀧の上に來た時、流石に長い日もとつぷり暮れてしまつた。然し幸ひ其處には幾らか清水も湧くので、泊る事と

する。七時五十分。コミネカヘデの下で今日こそはほんとの野宿、スリーピングバック丈が露よけだ。此晩は火がよく燃える。飯がうまい。寝たのも早かつた。

七月二日の未明一時半頃、小雨が下りる。不安乍らいつしか又眠りについて、眼が醒めた六時の頃にはどうやら上つてゐた。米が不足なので雑炊を作つて食べ、八時四十五分出發、右手の森林に入つて可成長い事山腹を斜に下る。(ノートには何もないが、岩永君の記憶ではこの日の初めも數回空瀧を卷いた様だ)一時間ばかりして澤に下りると、もう瀧はないらしい。澤も水づいて傾斜も鈍くなつた。と、そろ／＼鈍目が見付かる。占めた。自ら足早になる。終に「道に出た」其言葉こそ人間に戻る事の出來た喜びの第一聲であつた。時に十時。此は寶澤の上流、藏王行の道と分れて雁戸山南方なる熔岩臺地の略中央の西縁に出るべき道である。海拔凡八五〇米。

私達はどう氣樂であつた。雁戸山第二高點から西した二五六米峯の南側山腹を緩やかに上ると、

一寸した高原に出る。進んで行くと、月山と朝日岳が残雪美々しく空に浮ぶ。山の行樂、口笛鳴らしつゝ、細かい尾根を急に下る。戀しい谷が見える。十時四十分とう／＼雁戸澤の二股に着いた。峯頭の銳角に相應する深い狭い谷だ。快く對岸に渡つて、一先づ荷を下ろし、身體を拭いたりする。それから左岸を下流に歩き出す。十五分ばかりで、葉ノ木澤との落合に着く。此澤は河原が廣い。對岸假橋の所に「追分、右に見る杉は葉ノ木澤（新關峩々溫泉道）左は雁戸澤（林道）山中」とした標柱があつたので、一層安心さを加へる。

十一時三十五分、出發して葉ノ木澤の磧を上ると、籠渡し風な裝置がしてあつて、其處に「右はハノ木澤（山道）左は溫泉行（山道）」と書いてある。道は尾根にのぼつて行く。一二町で又「新關三里半、峩々四里」とした追分の木杭がある。右の澤道は地形圖に現れた藏王越の舊道に當るので、現今は六二〇米の隆起の東北側を通り、次の隆起邊で地形圖の道と合して行く。前の隆起のあたりで、私達は中食し乍ら、晴れ切つた月山を飽く迄眺め

たりした。三十五分休んで、だら／＼上りの道を進む。日蔭で涼しい。一時十五分、不動堂に着。鍋倉山、嘉永七年甲寅四月二十八日、山形十日町佐藤利衛門と記した石がある。不動瀧は堂後の小徑を分け下つて葉ノ木澤末股に下りなければならぬ。中々遠いので中止する。十五分後歩き出して又同時間だけたつと、廣い草生の高原に出た。遠山の眺めはないが、目先が變つて一寸面白い。其が盡きて再び緩やかな平尾根の上りとなる。熊野岳の方が見える。雪の輝き、冷いシラベ、トマツの林、然し未だ遠い上の方だ。登りとなつて一時間ばかりで上道川（？）を渡る。其數町手前から森林は低く灌木帶の狀となつて、山草の色もすが／＼しくなつてゐた。澤で中食。三十分後、又緩やかに登つて地形圖に水條のある一澤を過ぎ、黒木林の殆ど水平な道を散歩氣分で歩む。其手前で新關から下りて來た湯の客と人夫とに出あつた。感じのいゝ黒森の道は三十五分にして、熊野岳名號峯間の乗越に導く。此處からは曾遊の地だ。又霧雨が降る。一休みの後、雪溪をよぎたり、オホイタ

ドリニヒゼキの群落を分けたりして、どん／＼下り、五時十五分がらんとした新關溫泉宿に着いた。所が此溫泉は後で聞くと此春から止めてしまつたさうで、其時はいくらさがしても人聲一つないので、中に入り、微臭かひい壘を土間に敷き直し、自在鉋や、鐵瓶其他炊事道具を持ち出したりして、枯枝をばち／＼盛にもやした。あてにしてゐた食糧中糲は出來ない上に、雁戸山で意外な時間を費した爲、白米二人一食分有るか無しかの有様である。従つて今晚も恐しく水つばい雜炊を作つて胃袋に流しこみ、食後は煙草も切れたので、ぽかんとして寢出した。溫泉はこはれて水が溢れこんだ爲入れなかつた。

七月三日。どんなに迫つた峡谷で寢ても野營は楽しいものの一つであるが、無人の廣い家で一夜を明かしたのは何となく氣味の悪い思出だつた。朝は恐しく風が吹いて南から雲が飛ぶ。シケの氣味だ。其で、パンをかぢつた後、藏王越は止めにして、遠刈田に下る事にする。七時頃出發、登山期前の山路は綺麗で、自由な空氣に満ち充ちてゐ

る。十時半遠刈田溫泉に着、村上源平方あがに上がつて一浴、ひる迄遊ぶ。と、輕便が脱線して開通の見込ない事になる。けれど自動車が出るといふので喜んだのは束の間、同乗者の高村某といふ實業家（東京市本郷に住し、遠刈田附近に牧場を經營してゐる人物）の横暴の爲に、時間はのばす、出て見ると、白石驛迄の約束が何時の間にか大河原驛行に變つて、然も其處に行つて見ると、くだんの紳士（？）はステーションに向はず、宿屋に車を横付けさせ挨拶もせず上つてしまふ。唯一の夜行列車は今しがた出たばかりだつた。憤慨しても追付かない。止むを得ず、運轉手のせめてもの好意で白石迄乗り付け、次の日未明に漸く上り列車に身を投じた。私達はやはり「行くまじき旅」をしたのだつた。（大正十二年十一月。沼井鐵太郎）

其後東北帝大學生の深町氏が、矢張雪のない時人夫を連れて名號峯の方から雁戸山へ向つたが、大して時間はかゝらなかつたといふ。此事は偶然にも大正十三年正月西吾妻の麓高湯溫泉の宿で同氏から直接聞いた。但詳細は知るを得なかつた。

○マロリー氏を悼む

本年舉行されたる第三回エヴェレスト山探險に於て、英國山岳會員にして同探險隊の主要登山者の一人なるマロリー (George Leigh Mallory) 氏は、少壯登山家アーヴィン (A. C. Irvine) 氏と共に行衛不明となりたりといふ。二人は六月八日八人の人夫を伴ひてチャン・ラの第四キャンプ(二二、〇〇〇呎)を出發し、約二千三百呎を登りて第五キャンプ(二五、三〇〇呎)に野營。七日更に千四百呎を登り、二萬六千七百呎の位置に作られたる第六キャンプに達し、同行の人夫は即日此處より下らしめ、明くる八日二人は用意の酸素を吸入しつつ、エヴェレストの絶頂を目指して出發したるものなる可く、其日第五及第六キャンプ間の地質調査に従事しつつありしオーデル氏は、午後十二時五十分、今まで山巔を掩ひつつありし雲の急に途切れて、エヴェレストの絶頂と夫に續く山稜とを現し、しかも其山稜上の一地點、經緯儀によりて二萬八千二百二十七呎と測られたる場所に、二

個の黒影の山巔に向つて可なり輕快に行動しつつあるを見たりといへば、こはマロリー及アーヴィン二氏に外ならざることは明か也。されどこの光景は瞬時にして再び雲に掩はれ、それと共に兩氏其後の消息は杳として知る能はざるも、唯だ二人が何等か事變の爲に終に山上不歸の客となりたるものなることは、最早事實として疑ふの餘地なし。

マロリー氏は千九百二十一年に行はれたる第一回の探險には、ブルック氏と共にエヴェレストの登山路線を發見踏査す可き重要任務を帶び、ロンブ氷河、カマ及びカルタ溪谷の上部を探り、ラクバ・ラよりチャン・ラに至りて、此處より登山の可能なること、且つチャン・ラに達するには東ロンブ氷河を迫るが捷徑なることを確め、こゝに探險隊をして、エヴェレスト登攀の比較的容易にして成功の望あることを想はしむるに至り、翌二十二年には同じく登山隊の一員として、最初は酸素を用ゐることなく、ノートン、ソマーヴェルの二氏と共に五月二十一日二萬六千九百八十五呎の高さに

達し、六月七日二度目の登攀を企てしも、雪崩の爲に七人の人夫を失ひて、之を中止するの已むなきに終りぬ。

かくマロリー氏は第一回以來探險隊の一員として活躍したる唯一人にして、他は暫く措て問はざるも、エヴェレストに就ては最も経験を積み、よしや今回は或は成功せざりしとするも生命を全うしてあらんか、更に第四回の探險隊を送るが如き場合には、エヴェレストの絶巔に初めて人の足跡を印するもの、恐らく氏ならんとは、衆人の等しく期待する所なりしに、今この計報に接して悼惜の情に堪へざる也。

アーヴィン氏に就ては知る所少なきも、氏は隊中の最少年者にして、他の隊員の平均年齢より十二年も若く、従つて登山の経験はある範圍に限られたるも、體軀の強健は隊員中の第一に位し、曾て牛津大學のボート選手として、二度競艇に出漕したることある程なりといふ。酸素吸入器に少しの故障起りし際の如きは、直に之を修理して、機智に富み機械に巧者なることを示せり。この將來

ある有爲の隊員二人を同時に失ひたるは、エヴェレスト山委員會に取りても大なる損失といふ可く、大英國皇帝陛下は、之に對して同情ある電報と書狀とを委員會に賜はり、世界各地の地學協會及個人の多數よりも、亦同様の電報及書狀を送られたりといふも宜なりといふ可し。(木暮)

雜報

○南アルプスに小屋建設

從來甲州の山には、富士山を除き、小屋の設備ある所としては、駒ヶ嶽、金峰山位のもので、それも有つてよし、無くてもさして不便を感じずといふ程切要な位置を占めてゐたものではなかつた。そして登山者の痛切に必要を感じてゐた白峯赤石兩山脈の方面はといへば、可なり早い頃から年々相當の登山者があり、近年になつては益々増加する一方であつたが、容易に小屋の建設を見るに至らなかつた。北アルプスの方では登山者の人氣のありさうな山へは、どしどし小屋が出来て、中には無定見に小屋さへ立てればよいといふ風に思はれるものもあつたとしても、登山者には便利であるに相違ないから、従つて登山者は多くなるのみである。南アルプスの山が北アルプスに比して、残雪が少ないといふ以外に、何等の劣つて居る點を見ないのに、登山者の少ない一半の原因は、早い頃は知らず、今は確に此の小屋の無いことに歸するものと稱してよい。勿論登山者のすべてが小屋萬能主義ではないに決つてゐる。然し有る可き所に有る小屋は、山岳の景觀をも威厳をも傷けるものではないから、位置の選定を誤らぬやうにして、兼て又今後盛になる可く豫想されてゐる冬期登山にも役立つやう注意を加へて小屋を建てることは結構なことである。これまで南ア

ルプスに取りて遺憾であつた此點に當事者が眼を着けるやうになつて來たのは、登山者に仕合だ。それには今年設立された甲斐山岳會の主唱者であつた人々の盡力を認めねばなるまい。昨年あたりから既に建設されたものは、野呂川上流右俣左俣の合流點（陸測五萬市野瀨圖幅の北嶽から西に派出した尾根上、二四一二米と測られたる獨立標高點の南嶺西直下に當る）、北澤（北澤峠の下）、早川尾根（韭崎圖幅の左端中央より稍下部に二四六三・四と記入されたる三角點ある峯の南側）、廣河原（野呂川と大樺澤との合流點）、農島山と間岳との鞍部、早川の支流廣河内の大門澤合流點附近（銀澤圖幅の大磨松山の西南直下に當る）の六ヶ所であつたが、甲斐山岳會では、更に鳳凰山北御室（賽ノ嶺の下）、八ヶ岳の三ツ頭（東側の斜面）及破風山（地圖に破不山とあるもの）と木賊山との鞍部合計三ヶ所へ小屋を建設する必要ありとし、縣廳に相談したところ、全部縣費にて建設することになり、最早工事に着手したとの事であるから、年内に完成したものもあるかも知れない。其中破風山のは、用材伐採の都合上位位置が變更されるかも知れぬとのことである。此上尚ほ三繁平附近にも小屋が出来たならば、奥秩父の甲武信と金峰間を縱走する人には何程助けになるか知れない。孰れにしても適當なる登山路の開拓と小屋の建設とは登山者に取りて何よりの福音である。

○各地高山の初雪

富士の初雪 「靜岡電話」 富士山の頂上は二十五日午前六時より降雪あり、同八時に歇んだ。本年の初雪で頂上一帯皚々た

る大雪景を呈し、尙噴火口や馬の脊は數日前より結氷し、數尺のつららが到る處に下がり、もはや登山者は殆んど絶えた。(八月廿六日東京朝日新聞)

富士六合目附近の初雪 【小山電話】 富士山頂は三十日黎明六合目附近迄降雪があつたが、氣溫俄に降下し、恰も冬の如く、本年の初雪である。去年より五日遅く、積雪九寸に達した。

峽中の諸山 昨二十九日朝より當地は雨天と相成、夜に入り降雨益激しく、氣溫下降仕候爲、「タケ」には初雪もがたと今朝來早起展望仕候ところ、六時半頃より西の空次第に雲切れて、果せる哉、眞白に白銀の装せし白峯、地蔵諸峯を望見仕り、思はず快哉み叫び候。二千五百米以上は眞白にて農鳥岳殊に靡はしく輝き居り候。昨年中殆ど雪らしきもの無之候爲、年々中秋に至れば體驗いたす事ながら、久方振にて渴を醫したるやうな感有之候。(九月三十日甲府にて野々垣邦富)

淺間山 【岩村田電報】 十六日夜淺間山に雪降る、例年より旬日早く、十七日輕井澤は朝來木枯らし荒び、午前の溫度四十一度、岩村田は五十度である。

上越國境 【前橋電話】 上越の國境利根の奥地連山及び上信國境の白根山等に十七日初雪降り、縣下一帶に寒氣厳しく、十八日早朝前橋の溫度三十八度五分であつた。

藏王山 【仙臺電話】 十六日夜藏王山に初雪あり、全山白色を以て蔽はれた。十七日午前八時頃には刈田郡宮村遠刈田温泉地方に降雪あり、約三十分にして歇んだが、昨年より二十日早い。

國後 【根室特電】 十七日夜來氣溫急變して攝氏三度に

降下し、國後、擇捉島には初雪が降つた。例年より約二週間も早く、近年にない寒さである。

吾妻山 【福島電話】 福島地方は十七日の最高溫度は攝氏十三度となり、吾妻山頂に初雪を見た。昨年より五日遅れた。

駒ヶ嶽 【函館特電】 昨十六日夜駒ヶ嶽横津嶽に初雪降り、昨年より五日遅く、平年より早し。

岩木山 【青森電報】 十六日夜來の寒風、雨となり十七日早曉岩木山八甲田山の山腹まで初雪降る。昨年より五日遅し。十七日午前七時青森に初霰、最低氣溫六度三。(十一月十八日東朝)

○千島の大噴火

第一回千島諸島の巡視を終へて十一日根室に歸港した農商務省監視船ウルツプ丸船長は語る。「中部千島雷公計島(周圍六哩)は爆發して、餓頭形の山頂は凸字型に變じ、濛々たる白煙噴出しつゝ全島は灰に埋もれ、海水は變色してゐる。ウルツプ島に越年した探檢家白瀬中尉の實見談によれば、爆發したのは二月十五日で稀に見る好晴であつたが、突如天地を搖がす大音聲と共に雷公計島の上空に滔々たる火が舞上り、同島から十二哩を隔てた松輪島及岩城島附近の海上二ヶ所から一大噴水現はれ、天地晦冥眞に凄慘の光景を呈した、斯る光景は一週間も続いた。」(小樽電報)(大正十三年六月十二日國民新聞)

○山岳圖書紹介

○高山植物の話

武田 久 吉著

著者は劈頭先づ「登山と人生」なる題下に筆を起して、次に「山岳と自然」を説き、更に「高山植物の觀察」に及ぼし、「人は自然を離れても又自然に背いても生活し得るものではない。そして大自然の粹を萃めたものは山岳であるから、そこに登山と人生と密接の關係が生じて来る。斯くして多くの人が山に登るやうになるのは必須の勢であるが、其際一般登山者の眼に著き易いものは、何よりも先づ植物であらう。殊に高山の頂上や其附近、或は雪溪の側などに美しい花を咲き誇つてゐる所謂高山植物を見ては、誰しも何の花だらうと其名を知り度く思ふ。然し單に名を知る丈でなく、尙ほ高山植物はどうして生活するかといふことの一般をも知ることを得たならば、登山者に一層の興味を加ふるに相違なからう」といふ意味のことを述べて、本書の使命を明にし、第四項の「山麓と樹野」より漸く主題に入り、以下第三十六項の「高山植物の研究と保護」に至る迄、喬木帶、灌木帶、草本帶、地衣帶、又は御花晶と其種類、岩上の植物、乾生植物と濕生植物、菌根等に就て例を擧げて何人にも分り易く説明され、其外葉の構造や氣孔などの平地植物と異なる點を指摘し、尙幾多の項目を擧げて、簡潔明快に叙述されて居る。加ふるに九十八枚の寫眞圖版は、五六を除き全部著者の撮影したもので、どれも皆詳細な説明を加へてあるから、實物と對照して名を覚へるにも便利で、其數は百を超えてゐるであらう。尤も用紙の關係上、圖版は目がさめる程鮮明とはゆかないが、さりとてインキの勢がかゝつて、何處に何があるやら分らぬといふやうな不鮮明なものではない。これは唯外國の書物に比較しての話であつて、よく見懸ける他人の著書から

無斷借用に及んだものなどは、素より同日に談る可きではない。十七の挿圖も適切に選ばれてゐる。附録として日本山岳冒稱の植物が擧げてあるのも行届いた注意だ。高山植物に就て一般を知らうとする人は勿論、登山でもしつとするとする人は、同じ著者の手に成つた「高山植物」と共に机上に一本を備へんことを勧する。これは私が著者と面識あるのみならず、旅行を與にすること多く、常に其教を受けてゐる爲めのお世辭では決してない。尙半截八十九頁、定價一圓八十錢、大阪毎日新聞社發行。

○會員通信

△拜啓。小生去る一日夜行にて東京出發、二日飛驒吉城郡見座に着。三日双六谷に入り廣河原手前にて野營。四日奥後戸附近に野營。五日九郎右衛門澤を溯り、黒部乗越に上り、伊藤氏の作れる五郎平の小屋に泊り、六日黒部川に降り立石に泊り、七日奥廊下に入り候處、この日より毎日毎夕立大に至り、廊下の壁へつりと徒渉困難の爲、雨中の行進は危険と相成、且岩永君が七日既に平に待つて居らるる約束に候故、思ひ切つて急峻な山側を深藪を分けて赤牛の尾根に上り野營。八日赤牛岳に登り東澤に下り、東澤の落日泊り。九日朝水小さき爲一時間五十分にして平に至り、即日岩永君と共に内藏之助澤を横切り、下廊下に入りて泊り。翌日黒部別山の中央部まで入り候ひしも、往年へづりし壁が河床右に傾きて深く相成候爲、とても荷を持つて行くこともロープを使用するも足溜りなく、已むを得ず引返し一泊。十一日内藏之助澤を溯り、ハシゴ澤より餌澤へ出て、本年出來したる餌の小屋に一泊。十二

日早月川を下りて伊折泊。十三日午後の汽車に乗り、十四日歸京仕候。(八月十四日冠松次郎)

△尾瀬を中心として岩越兩毛の境を彷徨すること二週日、最後は鬼怒沼、川俣、西澤を経て湯本に出て候。鬼怒沼は豫想外のよい所にて、再遊を望むこと切に候。歸來直に丹澤山に向ひ、一昨夜歸宅。塔と丹澤との頂に三角測量櫓復活され、兩山間の交通路も數倍の容易を加へ候。八九月に大雨さへなくば、今秋の登山には差支なき迄の山徑出來候。尤も前の如く深谷に入り山稜を縦横に歩くことは當分不可能に候。(七月廿六日武田久吉)

△七月三十一日東京をたち、八月一日青森につきました。八月二日、横内村を經、雲谷峠を馬で越え、酸湯につきました。八月三日、八甲田の大嶽に登り、井戸岳の火口をつたはつて、赤倉岳にゆき、さらに裏手から井戸岳、大嶽を通つて、酸湯にかへりました。雪溪もいくつかりありますし、沼もよく、植物がすこぶる豊かでした。四日、根まがり竹を案内に少し切り拂つて貰つて、石倉山に中途まで登りました。冬ならば上までロープなしに登られるさうです。岩のぼりの練習によいでせう。此の日は薦にとまりました。五日は細雨の中を焼山にいて、自動車で十和田にゆき、その夜おそく青森にかへりました。六日は野内から久栗坂を經て、淺蟲に遊びにゆきました。七日は弘前にゆき、八日朝、岩木山へと志し、あつた裾野を嶽温泉までゆきました。九日、嶽から岩木山へのぼり、百澤口へとおひ、夕方、弘前につきました。八甲田から見ると、單純な山で、花なども少なうございました。十日は青森に滞在し、十一日の急行で、昨十二日東京にかへつて來ました。(別所

梅之助)

△拜啓。友人と二人連れにて七月二十六日午後上野發沼田泊り。二十七日(晴)。沼田街道を左に武尊、右に赤城の山塊に慰さめられ乍ら進む。追員にて大瀧、吹割の瀧及浮島等を見物、戸倉たまり屋泊り。

二十八日(晴)。笠科川に沿ふて登る。アテ坂の上にて笠狀を呈せる笠ヶ岳に見惚れ、鳩待峠より憧れの至佛の偉大な山容を望み、林の中を川上川一支流の澤に沿ふて下る。山の鼻の人無き魚獲小屋に、リュックサックを置き、至佛へ登る。利根方面の眺望は遺憾ながら雲の爲望みを達せず。晴れ間をと思ひたれど、遠雷に脅かされしと、時間の都合で割愛して下山。其夜はヨツヒ川畔にある關東水電の小屋に一泊。

二十九日(晴)。小屋を後にし、燧を正面に、景観の面白き頂きを左に見ながら尾瀬ヶ原を横斷。路惡き燧の裾を沼尻川に沿ふて尾瀬泊へと向ふ。長藏小屋に着き、静養。

三十日(晴)。燧に登る。頂上よりの眺望廣闊、午後湖畔にて遊ぶ。三十一日(晴)。鬼怒沼への新道(大正十二年八月頃竣工)を尾根傳ひに黒岩を經て鬼怒沼へ行く。沼にて朝食。八丁の湯邊にて雷雨に遭ひ、一時間程小屋(新築)にて休み、小降になつたので川俣温泉に出て湯に浴す。鬼怒沼より川俣温泉迄の路の悪いのには閉口したり。

八月一日(晴)。今日の行程は湯本迄なればとて、遅く出發。西澤金山の廢坑に遊び、金田峠を越へ、湯木板屋に投宿。二日(晴後曇)。金精峠を越へ菅沼畔りを丸沼に行く。折柄魚釣中

の土方博士にお目にかゝる。日中として生憎獲物無き由。八町の瀧より再度菅沼に出て板屋に歸り、静養の爲來湯したる會員三輪氏に會ふ。

三日(晴後曇)。三輪氏兄弟と四人連にて前白根より奥白根の頂に達す。南方は雲海に遮られ見えず、他の三方面眺望好し。過ぎし尾瀬方面並びに鬼怒沼邊の山々には、殊に懐かしみを加ふ。

四日(曇後雨)。戦場ヶ原より白根の頂きに別れをおしき、日光に出て其夜歸京。(野口末延)

△拜啓。小生本月初旬鬼怒沼方面探勝に出掛け申候。昨年來同地方面の開發殊の外著しきもの有之、新開の道路により極めて安易に同地到達、附近一帶の風光を賞美仕候。

三日朝上野發、日光線今市迄行き、下野電氣鐵道により新藤原に赴き下車、日中ちりちりと照りつけられつゝ川治温泉に到り、同温泉近江屋に宿泊。

四日早朝川治温泉出發。鬼怒川に沿ひ西進。小指、日向、日蔭、黒部、大川筑等の部落を経て、夕五時川俣温泉着。湧清館に投宿致候。連日の早天の爲め鬼怒も水量乏しく、奔雷岩を嘯むてう同河特有の景趣に接することを得ざりしは寔に遺憾に存候。然し山容水景そのものは仲々捨て難く、苟に紅葉時の美觀に想到致候。

五日午前八時前、案内人を雇ひ川俣温泉發、鎗澤を横り林中を鬼怒本流と湯澤との合流點に出て、それより徒歩により湯澤を廻り、午前十一時過噴泉塔に到達致候。噴泉塔が人の爲め破碎の災に遇ひ、僅かに二尺に足らぬ高さに留まり、噴水力の極めて微弱に陥り居り候を見て、甚だ慨嘆に堪へず感申候。それより噴泉塔の

背後に廻り、手白山の山腹を縫ふて北進し、手白澤を渡り、直下して鬼怒の本流に出て、流を横切つて一丁許りにして八丁湯に着し申候。時に午後三時過。こゝには昨年新築したりといふ無人の小屋(六疊敷)あり川俣村民の盡力とかにて鍋、茶碗等備付あり、自由に使用して仕舞ひ置くも一寸興深く感候。

六日午前六時過八丁湯出發、鬼怒を遡り、日光澤の落口より十數間上手にて鬼怒川を辭し、右折して坂を上り、十一時頃鬼怒沼に辿り着き申候。好晴の爲め風光絶佳、燧の翠微ことに懐しく覺え申候。こゝより案内人を返し、昨年夏開通したりといふ新道により鬼怒沼山、黒岩山、赤安山、袴腰山を縦貫し、尾瀬沼に下り、午後五時前長藏小屋に到着。

七日朝雨降る。雨の止るを待ち午前十一時頃より長藏氏同道、燧嶽に登山仕候。長藏氏談論風發、氣焰奮るべからず候。

八日長藏小屋を辭し、尾瀬峠を超え、片品川に沿ひ、沼田街道を下り、戸倉を経て關本に到りて左折し、蛇倉峠經由、東小川に出て、白根温泉に到り星田館に投宿。

九日白根温泉發、大尻沼、丸沼菅沼を觀賞し、金精峠を越え、一路湯本に下り板屋に宿泊。これよりは休養がてら悠々附近見物の事とし、十日には刈込切込の兩湖を経て山王峠に出て、光徳沼に下りて湯元に歸着。十一日は前白根より奥白根を探訪し、再び湯元に歸泊致候。

かくて十二日戦場ヶ原、中禪寺湖經由、日光町に出て、一路上野に歸着仕候。(中島喜一郎)

會 報

○第二十五回小集會記事

九月廿八日午後二時より麴町區紀尾井町清水谷皆香園に於て、鳥山幹事司會者として開會、左の講演ありたり。

双六谷と黒部川

冠 松 次 郎 氏

今夏氏は、越中大山村の宮本金作外一名の人夫を伴ひ。八月上旬飛驒國双六谷に入り、峽中を溯行して、九郎右衛門谷より黒部乗越に出て、五郎澤を下り、黒部本流に沿ふて奥廊下に入り、之を突破する豫定なりしも、雨の爲に意外の日子を要し、約束の期に後るゝを恐れ、中途にして赤牛岳に登り東澤に下りて夫より平の小屋に至り、茲に鶴首して氏の來著を待ちつゝありし岩永氏と合して、下廊下を鐘釣方面に出づる筈なりしも、先年氏の通過に差支なかりし黒部別山側の岩壁に變化を生

じ、到底通過の見込なき爲、止むなく引返して内藏之助澤を上り、劔澤に入り、別山乗越を踰えて、早月川を伊折に出でられたるが、其當時の狀況を多數の寫眞によりて詳細に講演され、極めて興味深きものなりき。尙ほ黒部川の歩道に就ては、雜錄欄の「黒部川瑣談」を見られたし。

當日の來會者は、磯貝藤太郎、永江博、松本善二、飯塚篤之助、青木軍二郎、大熊保夫、岩永信雄、本多友司、野口末延、加藤留五郎、松井幹雄、神谷恭、沼井鐵太郎、山口成一、豊島喜一郎、別所梅之助、平田恒太郎、今村巳之助、小瀬孫作、伊藤朝太郎、梅澤親光、武田久吉、木暮理太郎、冠松次郎、高頭仁兵衛、鳥山悌成の二十六氏にして、外に三名の來會者ありき。

○日本山岳會員有志晩餐會

日本山岳會員の有志晩餐會が初めて催されたのは、山岳會の上に未だ日本の二字が加はらなかつた明治四十二年の一月十六日であつた。この晩餐會の發起者は辻本、高野、三枝の諸氏で、大會は

年に一回であり、それも講演が時間の大部分で、個人的な、又家族的な會合といふ譯にはいかぬ。そこで如上の目的に叶つた會合を催ふして、大に面白く話さうといふ趣意で晚餐會が創められたのであつた。第一回は麴町區富士見町の富士見軒で開かれ、それから引續いて第十二三回頃迄は、最初の目的に背かぬ愉快な會であつたが、回を重ねるに従て晚餐を主とするやうになり、山岳の話よりも、世間話の方が蔓ることになつて、發起人先づ愛想をつかして出席せぬやうになり、夫に小集會が設立されたので、いつとはなしに行はれなくなつたのである。夫を別に再興するといふ意味からではなく、時には晚餐會もあつてよからうといふので、小集會のあつた九月廿八日の夕、四谷見付外の三河屋で有志の會合を催ふして晚餐を共にした。會するもの次の十六名。

神谷恭、冠松次郎、松本善二、飯塚篤之助、大熊保夫、高頭仁兵衛、山田應水、岡野徳之助、今村巳之助、小瀬孫作、瀬戸強三郎、島山悌成、沼井鐵太郎、岩永信雄、梅澤親光、木暮理太郎

話は自然最近の第三回エグゼレスト探検より始まり、各自好む所に就て氣焔を吐き、梅澤氏の懷舊談などあり、餐を終るも興更に盡きずといふ有様で、散會したのは午後十時頃であつた。

○特別取扱手数料廢止

本會の會費は、會則第十四條により、毎年二月末日迄に納付すべく、三月一日以後になると特別取扱手数料として、金五拾錢を添へて拂込む規定であることは、毎號の誌上に掲載する本會規則の抜萃を見る迄もなく、とうに會員諸賢の承知せらるゝ所であらう。然るに實際は三月一日以後に會費を納付される方で、この特別手数料を添へて拂込む人は誠に少ない。若し規定通りにするならば本會ではその會費として拂込まれた三圓の中から規定に従つて特別取扱手数料五十錢を差引いて勘定す可きであるが、それが一度だけならばまだよいとしても、度重つては煩くて面倒なこと到底五十錢の手数料では間に合はない。それでどうせ實行されないものなれば、正直に實行して下さる少

數の人に對してお氣の毒であり、會計係の骨の折れることは同じであるならば、一層のこと之を廢止した方がよからうといふことになつて、來年度から之を廢止することに決した。然し吳々も申述べて置きたいことは、會費は必ず規定の期日内に納めて頂きたいことである。くどいやうではあるがこれ丈は是非實行を願ひたい。

○本會規則の一部削除

別項に記した通り、九日二十八日の本會評議員會に於て、特別取扱手数料の納付を廢止することに決したから、從つて會則第十四條を次の如く改訂した。

正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

會費納付の期日を三月末日としないで二月末日とした理由は、今こそ雜誌の發行が遅れて會計の年度と同一でないけれども、これは一時の變態であつて、一兩年中には雜誌の年數と會計年度とが一致するであらうし、實際には第一號を三月に發行

する豫定であるから、三月末日とすると、會費未納者にも雜誌を頒布する處があるので、之を豫防せんが爲の注意に外ならないのである。會費滯納者は、別に本條に規定せずとも、會則第十九條を適用するから差支はない。

○會務報告

大正十三年六月八日午前十時、清水谷皆香園に於て幹事會開催、入會希望者に就て詮衡を行ひ、左の七名入會を許可せらる。

藤本九三、山本正造、内山知春、田尻春雄、坂上亮三、中根經三、大熊保夫。

(出席幹事) 冠、鳥山、高頭、木暮(委任)高田(委任)

大正十三年九月廿八日午前十時より、麴町區清水谷皆香園に於て、評議員會を開き、左の件に就て協議す。

一、三月一日以後の會費納付者に對する特別取扱手数料廢止の件。一、會則第十四條改訂の件。

(出席評議員) 冠、木暮、横、高頭、鳥山、武田、高野、梅澤
終て入會申込者の詮衡を行ふ。

前八時三十分アルバートホールに於て合同の集會を催し、千九百二十四年のエヴェレスト山探檢に就て、ジェネラル・ブルース、コロネル・ノートン、キャプテン・ジョーフレ・ブルース及オーデル四氏の講演を聴取したるが、其際豫め兩會の會長より、日本山岳會長及夫人の參會せらるゝ光榮を得たき旨、招待狀を受取りたり。本會は其地の遠隔なる爲、之に出席する代表者を送ること能はざりしを遺憾とするも、地學協會及山岳會の厚意は深く感謝する所也。尙ほエヴェレスト山の今年に於ける探檢の結果に就ては、次號の誌上に掲載す可

榎平治氏、

氏、

○交換及寄贈圖書目

石垣茂市

山とスキー 第三十八號乃至第四十一號

ツーリスト 第十二年第四、五號

徳山、今治、設樂地質説明書

アルカウ趣味 第十一年第六號

關西時報 第三十二、三十三、三十四號

山岳時報 第五年第七、八號(城南山岳會)

○英國地學協會及山岳會よりの招待

英國皇立地學協會と山岳會とは、十月十七日午

山稜 第二、二輯「第八高等學校山岳部」
槍ヶ岳を中心として「福澤桃介氏」
山のつづく「別所梅之助」

The Mountaineer, Vol. XVI No. 7, 8, 9, 10, 11.
Trail and Timberline, No. 69, 70, 71, 73.

Colorado Chautauque Bulletin, Vol. XIII No. 11.
Club Alpino Italiano, Anno XLIII Num. 5. 6.

Natural History, Vol. XXIV No. 2, 3, 4.

Bulletin del Centre Excursionista de Catalunya, Any

XXXIV No 349, 350, 351, 352, 353, 354.

Mededeelingen der Ned. Alpen-Vereeniging.

Revue Alpine, Vol. 25 No. 2.

Geographical Journal, Vol. LXIII No. 6. Vol.

LXIV No. 1, 2, 3.

La Montagne, 20^e Année No 169, 170, 171, 173,
174.

The Prairie Club, Bulletin No. 138, 139.

The Bulletin of the Geographical Society of Phila-
delphia,

Vol. XXII No. 2, 3.

Alpin, 32 Jahrgang, No. 3, 4, 6.

L'écho des Alps. 60^{me} Année No 4, 5, 7, 9,

Alpine Journal Vol. XXXVI No. 228.

Bulletin, Appalachian Mountain Club, Vol. XVII
No. 8.

Heros of the United States, Bulletin No. 5.

Jahrbuch des Schweizer Alpenclub, LVIII Jahrgang.

○本會規則拔萃(大正十三年九月改正)

第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、
又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアル

第五條 本會ハ會長ヲ裁カズ幹事若干名ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理
セン

第六條 本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セン

第十條 本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ
幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セララルモノトス

第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所
姓名、年齡及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、
但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス(入會申込用紙ハ事
務所ニ備付ケアリ)

第十二條 入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費

ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條 正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スヘキ

モノトス(以下略)

現在幹事(八名)

藤島 敏男 冠 松次郎 木暮 理太郎 植 有 恒

六 鷗 保 高田 達也 高頭 仁兵衛 島山 悌成

評議員(十八名)

小島久太(在桑港) 武田 久吉 梅澤 親光 高野 鷹藏

近藤 茂吉 中村 清太郎 三枝 守博 辻本 満丸

田部 重治 山川 默

及ヒ現在幹事八名。

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと

一、用紙は半紙又は半紙半枚大、天地左右をあげ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行數のこと

一、〃、〇、〔 〕等ハ各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げ

のこと

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨を括弧内に明記す可きこと

一、原稿は必ず左記宛て送附のこと

東京市本郷區駒込蓬萊町三十一番地「山岳」編輯所

尙ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等のある原稿は其調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり(スケッチは複製の際誤記脱漏等の憂あるを以て豫め本誌面に適當せる大さに調製あらんことを望む)

近く第二秩父號を發行せんとす秩父地方に關する山澤の記文及寫眞を寄せられんことを望む

「山岳」編輯所

大正十一年度會計報告

差引大正十二年三月十六日現在高

四三六七、一〇五

収入之部

繰越(大正十年度より)

二八八三、一九五

會費

一九二九、〇〇〇

入會金

二三〇、〇〇〇

雜收入

一九一、二六〇

寄附金

一〇〇八、四〇〇

計

六二四一、八五五

支出之部

基本金へ繰込

八三八、九二〇

集會費

一九三、三二〇

事務所費

八四二、五一〇

計

一八七四、七五〇

右は次期の會計に繰込む事とす

引繼の都合上大正十二年三月十六日迄小生の手にて會計事務を取扱ひたるを以て右を以て決算の期となしたり。

右の内雜收入中には小集會々費、諸手數料、預金利子其他を含むものにして事務所費中には事務所移轉費用、事務所諸費、書記手當、編輯費、郵税集金費等を含むものなりとす。

右之通

會計 梅澤親光

以上を帳簿と照らして正しき事を承認す

庶務 高頭仁兵衛

大正十三年十二月十二日印刷
大正十三年十二月十五日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

新潟縣三島郡深才村深澤

日本山岳會

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會會計取扱所

振替口座東京四八二九番

東京市神田區表神保町

東京堂

發賣所



發行兼編輯者

印刷者

印刷所

發行所

山岳圖書販賣

奧上州號 山岳第十六年第三號

本欄及雜錄二百十二頁 定價金貳圓五拾錢

奧上州は巨流利根及其貢流の發源する所、山や谷や殘雪や森林や登路や果して如何に、奧上州號は其詳を盡して餘蘊なし。

高頭式編纂

日本山岳志 全一冊

正價金貳圓
送料金貳拾七錢

山岳
第五年第三號。第六年各號。第七年各號。第八年各號。第九年各號。第十年第二號。第十一年第二號。第十二年第一號。第十三年第二號。第十四年各號。第十五年各號。第十六年各號。第十七年各號。以上何れも定價異り、部數も僅少につき御注文に先立ち往復葉書（又は返信切手附）にて一應御照會之程願上候。

東京市芝區高輪南町三〇

健全書店

振替口座東京三二〇五二番

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XVIII

1924

No. 2